
異世界迷走記！？

りんごの芯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界迷走記!?

【コード】

N6004K

【作者名】

りんごの芯

【あらすじ】

車に轢かれて死んでしまった主人公。そしてきまぐれな神によって吸血鬼にされ飛ばされる異世界「ネギま!？」。転生オリ主ものです。作者の妄想と衝動で書かれ始めた物語。初投稿なうえに、ド素人!の作者が書く為、意味不明な文章・カオスな展開があるかもしれないですが、それでも良いという方のみどうぞ! 気が向いたときに更新します。

ぶるるーぐ（前書き）

突然の衝動でかかれた物語！！

なにぶん素人ですので、生暖かい目で見守ってください。

ぶるるーぐ

全身を脈打つような痛みが駆け抜けている。

身体を動かすことはできない。

折れた骨が内臓を傷つけたのか、口からは血が溢れてくる。口を塞ぐ血のせいで呼吸すらまともにできない。

身体のひとつい有様に反して、頭は切り離されたように妙に冷静で、自分がもうすぐ死ぬのだということを知っていた。そんな状態にもかかわらず

ああ、空がきれいだ・・・

場違いにそんなことを思った。

坂本カイ。それが俺の名前だ。

歳は18の高校生で、趣味は空を眺めること、特技は”散歩”だ。特技が散歩というのは、なぜか出掛けるたびに、本来の目的地にはたどり着くことはできず”散歩”してしまうからである。学校の友人には『カイもあるけば、迷子になる』といわれている。迷子じゃ

なく”散歩”だつて言っているのに、まったく失礼なことだ。

そんなわけで今日も受験勉強用の参考書を買いに”散歩”をしていたのだが、その途中で5歳くらいの子どもが車に轢かれそうになっているところに遭遇した。

気がついたときには、その子を突き飛ばしていた。そして俺はその子の代わりに車に轢かれてしまった……。

段々目が霞んできた。傷は燃えるように熱く、脈打っているのに身体は徐々にその温度をなくしていく。

霞んだ目で周りを見てみると、助けた子どもが状況が理解出来ていないのか、ただ泣きじゃくっているのが見えた。ひざにすりむいた傷があつたが特に大きな傷はないようだった。

(・・・無事でよかった。)

そう思いながら、坂本カイはその意識を手放した。

ぶるるーぐ（後書き）

初投稿となります！

これから頑張っていきたいとおもっているのでよろしくお願ひします。

神はとても理不尽でした。(前書き)

とりあえず、衝動のままに書き進めています。

神はとても理不尽でした。

沈む……

カイはぼんやりとそんな風を感じた。

暗い暗い、ひたすら暗い海の中を、あるかも分からない水底にむかつてひたすら沈んでいく。

もう、空を眺めることもできないな……と感傷に浸っていると、ぼんやりとした光の玉が目の前に浮かんでいた。

いつからあったのだろうとカイがいぶかしんでいると、

『人間がこんなところにくるにやんてめずらしいんだにやー。迷ったのかにや？』

こんな声が聞こえてきた。

おそらくこの光の玉から聞こえてくるんだろうが、妙に頭の中に響く。まるで直接頭の中に言葉を打ち込まれているかのようだ。

『ちょーど退屈してたところだにやー。これはいい実験おまじ体が手に入つたかもしれないにやー。』

……どうでもいいが、にやーにやーうるさいな……

そうおもいながら、カイは口を開く。

「えっと、あなたは何ですか・・・？それに実験体って、俺のことですか・・・？」

「何”とは失礼にやんだにやー。これでもあちしはぶつちやけ神なんだにやー。そして、君はあちしのすーこーにやる実験のモルモットににやるのが決定したんだにやー。」

(神・・・？このにやーにやーうるさい、頭の悪そうなしゃべり方の光の玉が神・・・？それにモルモットって・・・どう考えても好ましいものではないよな・・・)

ものすごい胡散臭さを感じながらも、カイは続けて聞く。

「俺って死んだんですよね？それでここは死後の世界ってやつですよ？あとモルモットってなにされるんですか！？」

「ぶぶつ・・・死後の世界ってあつたまわるそーな言い方なんだにやー。それと君ちよつとうるさいんだにやー。質問攻めとか勘弁してほしいにやー。」

(頭悪いしゃべり方はお前のほうだろ！！)

「まあ君は死んで魂だけの状態なんだにやー。そしてここは簡単にいうと”なんでもある場所”なんだにやー。まあ君には理解できるものではないから”なんかすごいところ”っておもってればいいんだにやー。ふつーは人間なんかはこれないけど、君は迷子の才能でもあつたのかにや？迷いこんじゃったたみたいだにや！にやつはっはー！」

神はとても理不尽でした。(後書き)

次からネギま!?!の世界にはいれそうです。

妄想と衝動で書いているからむちゃくちゃだけど仕様です。

「仕様です。」この言葉便利ですね

つぎはぎの世界（前書き）

ネギまの世界へとついで！。

つぎはぎの世界

ふと目が覚めた。

目の前に広がる、青空。そして所々に浮かぶ白い雲。

(良い空だな・・・)

しばらくながめてからカイは仰向けに寝転んでいた身体を起こす。そして自分の周囲を見た瞬間に激しい嘔吐感に襲われた。

「なん・・・だ・・・これ!？」

カイが今いるのは木がまばらに生えている草原だった。

ただその草原にはおかしなところがあった。

いたるところに黒い”線”と”点”があるのだ。

その黒い線と点のカイには何か分からなかったが、その線と点を見ていると、世界が今にも崩れ去りそうな感覚に陥ってしまうのだった。

「まるで、つぎはぎだな・・・」

そんな呟きをカイがこぼすと、頭の中に声が響き渡った。

『ぐっもーにんぐなんだにゃー。とりあえず、ネギま!？の世界に飛ばさせてもらったにゃ〜。異世界に降り立った気分はどうかにゃ〜?』

カイは吐き気を抑えつつも神に言う。

「最悪だよ。なんだこのつぎはぎの世界は!!」

『つぎはぎ?なにをいつてるんだにゃー。あちしは君を吸血鬼にしなければにゃー。』

「じゃあ、この黒い”線”と”点”はなんだよ!!」

『黒い線と点・・・?つぎはぎねえ・・・。ん〜。』

そのまま神は暫く考えている風だったけれど、やがてピンポンという軽いSEとともになにかひらめいたようだった。

『それはきつと”モノの死”が見えてるんだにゃ〜。いわゆる”直死の魔眼”ってやつにゃ!きつと一度死んだことと、あちしと出会った空間に迷い込んだせいで、君が”死”というものを理解しちやつたんだにゃー。』

モノの死が視えるなんて到底信じがたいことではあるが、目の前の光景はそれが真実であるということを力強く物語っていた。

「モノの死が・・・。これを見ないようにするにはどうすればいいんだ?」

『なんでそんなもつたいたいなことするんだにゃー。なんでも殺すことができる能力なんてチートも良いところで面白そうなんだにゃー。まあ魔力で押さえ込めばいいんじゃないかにゃ?吸血鬼になったことで魔力もたくさんあるはずにゃ!さすが吸血鬼にゃ!』

とどこか嬉しそうな声で神は応えるが、カイは途方にくれてしまった。

(魔力で抑えるって……どうすればいいんだ？とりあえず念じてみるか？)

『とりあえず、がんばってあちしを楽しませるんだにゃ。ボーイには期待してるにゃ。』

そういつて神はどこかへ行ったようだった。

「……ああいうのを自己中っていうんだろうな。ああはなりたくないもんだな。」

(さて、吸血鬼になったって言うても日光は大丈夫みたいだな。それに他の吸血鬼らしい弱点とかも大丈夫ほいな。根拠はないけど、これはきつとあってるだろう。それにしても……)

カイは自分の身体を”視る”

(あれだけ草原にはたくさんあるというのに、俺の身体にはうつすらと線が視えるだけ、か……。ひとまず、不死つてことは無いけれどめちやくちや死にくいみたいだな。それと……。なんか黒色と金色のもやが身体の中を巡ってるな……。これが魔力ってやつかな？)

そこまで考えて、とりあえずは魔眼を抑えることにした。

「できる気はしないけど、とりあえず念じてみるかな。このままじ

や俺の精神衛生上よろしくない。」

そうして念じはじめる。するとカイの身体に巡っていた黒いもやが目に集まってきた。それにつれ段々と今まで見えていた”死”が視えなくなっていた。

「っふうー。意外とあっさり視えなくなっただけっ・・・身体が尋常じゃなくだるいなっ・・・」

魔眼を抑えることには成功したけれど、身体のたるさと油断すればすぐに視え始めることもあって予想以上の労力であった。

(ひとまずは魔眼の問題は解決したな。次はとりあえず人の居るところまで歩くとするかな。)

そうして、歩き始めるカイだった。

つぎはぎの世界（後書き）

え？ネギま関係ないって？

も、もう少ししたら本編キャラと絡んでいくはず！

もう少しまってください>><

後悔（前書き）

読みやすくするにはどうしたらいいんだろう。。。

後悔

坂本カイの周りをこわーいおじさんたちが囲んでいた。所謂盗賊である。

カイが町を指して歩いていて途中に通った森の中で襲われたのである。実際は森なんて通らなくても最寄の街にはいけたのだが、そこはカイの”散歩”スキルが発動してしまったのである。

カイを囲んでいる盗賊は数は15人ほど、それはもういかにも「盗賊です!」といった感じの服装と武器だった。どうやらカイの着ている服が珍しかった為に襲ってきたようだ。ちなみにいまカイが着ているのはなぜか黒のスーツだ。きつと神様の趣味だろう。

(あの神様はいつたいつの時代に飛ばしてくれたんだ? 明らかに現代ではないよな……。なんにせよこれだけの数に囲まれるとはまずいな。なんとか逃げないと……。)

そんなことを考えているうちに、盗賊の一人が襲ってきた。なにか威勢の良い掛け声を叫びながら盗賊が振り下ろす剣をカイは冷静にかわし、そして盗賊を殴った。

グシヤッ

カイは手に嫌な感触を感じ顔をしかめる。
盗賊の頭があつたはずの場所は、代わりに紅い華が咲いていた。

カイは混乱した。ただ殴っただけで、人の頭がつぶれたトマトのようになつたのだ。

そしてそれ以上に混乱したのは、盗賊たちだった。

口々に「化け物つつつ」などと叫びながら蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

その後には、呆然とするカイと頭のなくなった盗賊の亡骸だけが残された。

カイは人を殺してしまったことを悔い、そして吸血鬼になったということを理解していなかった自分を呪った。

圧倒的な身体能力の向上。生物としての格がすでに人間とは違いすぎていることをこのとき痛感した。殺してしまった盗賊をせめて供養しようと埋葬しながら、

「力の使い方を覚えよう。もうこんな風に殺してしまわないように・
・。。。」

そう誓うのだった。

それからカイは力の制御を森にこもって練習しだした。

幸い、森を”散歩”しているうちに廃屋を見つけた為、そこを隠れ家とした。

廃屋に入ったとき初めて、この世界にきてから自分の容姿を鏡で見たカイだったが、吸血鬼だから鏡に映らないなんてことはなく、鏡にまっすぐな黒髪のまだ少年のあどけなさが消えきらない顔の自分の姿が映っていたことに安堵した。しかし目だけは鮮血のような赤色になっていた。

（転生つていっても姿かたちは変わらなかつたみたいだな。目は吸血鬼になったつてことで変わっちゃったのかな？）

目の色が変わったといつてもあんまり気にしないカイだった。

力の制御の練習はまずは自分の力の限界を知るところから始まった。

だが、殴ってみたところ、岩すらもコブシで簡単に砕いてしまったことから、限界を知るのはあまり意味がなさそうだなと感じ、すぐに手加減の練習に移った。

手加減の練習は、廃屋に残されていた日用品や家具などを使った。普通の人間が使う力の基準がわかればいと始めた練習だったが、ただ掴むだけでも最初は握りつぶしてばかりだった。それでも根気良く続けたカイはなんとか握りつぶさない力加減を身に着けた。

しかしここからが長かった。自分で放り投げたものをキャッチする

練習を始めたカイだったが、これが難しかった。カイは廃屋に握りつぶした物のガラクタの山を積み上げながらもひたすら練習を続けた。

カイは練習の甲斐あって7割の確率で握りつぶさずにキャッチできるようになっていた。しかし、もう廃屋には練習に使えるような家具や日用品は残っていなかった。

「われながら良く壊したもんだ。ちょっとひくな……。」

カイ自身は気づいて無いことだったが、この生活の中でカイは意識せずに”直死の魔眼”を抑えられるようになっていた。ただ身体のだるさは取れてはいなかったがこれが”普通”になっていたカイにはまったく気になるものではなかった。

「さて、そろそろ別のところに移動するかな。とりあえず、情報がほしいところだよな。」

そんな独り言をつぶやいていたカイだったが

- 次の瞬間廃屋は火の海となっていた -

後悔（後書き）

急展開いえ〜〜い

文章力のない自分が恨めしいZ E

いつになったら本編に絡めるんでしょう^^^…

狂気の発露（前書き）

バトルむずかしいiiiiiii

読者様の脳内補正でなんとか読んでください>< ;

狂気の発露

カイはなにが起こったかわからなかった。

ただいきなり周りが火の海になって、崩れてきた廃屋の下敷きになったのである。

混乱するカイだったがとりあえず倒壊した廃屋から抜け出した。

「おや、この魔法の威力で死なないとはなかなか頑丈なようですね。
”化け物”」

廃屋から抜け出したカイにそんな声が掛けられた。

カイは混乱していた。

（こいつはなんだ！？さっきの言い方だと、廃屋はこいつがやったみたいだが、魔法！？それに化け物は俺のことだよな？）

「この近隣の森に化け物が潜んでいるという話を聞きましたね。人に危害を加えるような存在を見逃すことは出来ないものでね。．．．おとなしく死んでくれますか？」

そういつて魔法使いはカイに対して攻撃を開始するのだった。

「フツ・・・、クツ・・・」

カイはひたすら魔法使いからの攻撃を避け続ける

（見たところあまり強い攻撃魔法ではないみたいだが、数の多さとある程度の誘導が厄介だな。足が止まった瞬間蜂の巣になるっ）

一方、魔法使いは

「ふふっ、ほらもつと速く動かないとあたっちゃいますよ？魔法の射手・火の47矢！！（想像以上に粘る・・・。あの化け物から感じる魔力は大したことなかった、それに気で身体を強化しているようにも見えない。無駄な動きも多いのに魔法の射手が全て避けられている。身体能力だけでこれは驚異的ですね・・・。）」

表面で平静を装いながらも、魔法使いは焦りを覚えていた。

しかし焦っているのはカイも同じだった。

（殺らないと殺られるっ・・・それに反撃をしないとこちらのジリ貧だ。一か八かいくかつ！！）

そうしてカイは魔法使いに向かって突撃を始めた。

魔法使いは、カイの突撃の速さに驚き、とっさに攻撃をやめ魔法障壁に魔力を回す。

その魔法障壁の上からカイは拳を叩きつける。

カイと障壁の間にバチバチと火花が散る。カイは予想外の魔法障壁に驚いた、そして自身の下策を悟った。

チャンスと見た魔法使いは、無防備なカイに対して攻撃を仕掛ける！

「（決める！）契約に従い我に従え炎の霸王。来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよソドムを焼きし、火と硫黄、罪ありし者を死の塵に。燃える天空！！！」

（私が使える魔法で最も威力の高いものを直撃させました。さすがにこれならあの化け物も死んだでしょう・・・。）

その思考はどこか自分に言い聞かせるようなものがあつた。

熱い・・・熱い熱い熱い熱い熱い・・・！！

本能的に攻撃を防ぐように前にだした腕は両方近距離での爆発で吹

っ飛んでいた。
痛さで意識が飛びそうになるが、痛すぎるせいで意識を手放すことができなかった。

イタイイタイイタイイタイ
ユルサナイ・・・オナジクルシミヲヤツニモ・・・

魔法使いは背筋が凍った。
いきなり大きな魔力が目の前に膨れ上がったからである。

(あの化け物からは魔力を全然感じなかったのに今になってなぜ・・・！？)

そうして目の前に現れたカイには傷一つなく、そして目は不思議な蒼い目になっていった。
その目を見た瞬間、魔法使いは自分の死しか連想できなくなった。

「ハハッ、これはいい。この世界にはこんなにも死が満ちているんだな。ハハハッ」

魔法使いは、狂気を前に立ち尽くすしかなかった。

「それじゃ、アンタ死んでおくかい？こんな素晴らしい世界を教えてくださいましたお礼にただで送ってやるよ」

カイが魔法使いに襲い掛かる。

頼みの綱の魔法障壁もまるで何もなかったかのように、カイの腕の一振りですべて消えてしまった。

そうして魔法使いの両腕はカイの爪での攻撃で切り落とされた。

「ひっ……」

魔法使いは目の前の狂気^{カイ}から逃げるのに必死だった。

腕をなくしたことでバランスが崩れ何度も転びながらだが、無様にそして必死に逃げた。

不思議と追撃が無いことにも気が付かないくらい魔法使いは必死だった。

カイは腕を切り落としたところで意識を失っていたのであった。

狂気の発露（後書き）

とりあえず、言葉が足りなくせに妙にくどい!!!

魔力的にはカイは、ネギまの世界でもずば抜けていると作者は妄想しています！具体的にはナギと同じくらいかちよつとうえかな？魔力が感じられない云々のくだりは魔眼を抑えるのに魔力のほとんどを回しているからっていうお話でした。

それぐらい魔力つかわないと、直死の魔眼はチートすぎるとの作者の考えであります。

開幕（前書き）

勢いで書きまくってるZE！

妄想と衝動はまだとまらないっ！！！！

開幕

カイは目を覚ました。

しばらくぼんやりした様子で周りを見ていたが、“魔法使いの腕だったもの”を見つけた瞬間に自分のしたことを思い出したようだった。

（魔法使いの死体が無いつてことは、俺は殺さずに済んだのか…？ それにしても、あのときの俺は何かおかしかった…。あの魔法使いを殺すことしか考えられなくなっていた。”殺人衝動”。この目のせいなのか…？）

カイはまた人を殺しかけた自分を責め、初めて飲まれた”殺人衝動”に恐怖した。

（俺はもう殺したくないの…。でも追い詰められればまたあの衝動に飲まれてしまうかもしれない。それにまた俺を狙って魔法使いが来ることもあるだろう…。）

そこまで考えてカイは決心した。

「強くなろう、殺さない為に圧倒的に強く!!」

それからのカイは自身の力の使い方を覚えることに専念した。といつても、カイは魔法のこともわからず、武術の類のことも分からない。ただ自分の吸血鬼としての身体を最大限に生かすためにひたすら身体を動かした。直死の魔眼は、殺人衝動に飲まれることをカイが恐れた為ずっと魔力で抑えていた。

カイが予想した通りに、魔法使いによる襲撃も少なからずあった。

自身の力の使い方を覚え始めていた事や、魔法使いとの戦闘経験を積んだことよって、カイは並みの魔法使い相手ならば簡単にあしらえるようになっていた。

しかし、不殺しを貫いたカイは、直接対峙した者の言葉が残ることになり瞬く間に有名となってしまうた。カイは知らないが懸賞金も懸けられていた。

修行と襲撃を退ける生活を100年も続けた頃、カイは襲撃されにくいように常に移動するようになっていた。迷子スキルのせいで、かえって厄介ごとに巻き込まれることが多かったのだが本人は気が付いていない。

そうして、今日も元気に散歩まじりをしているカイだったが、濃密な血の
においがどこかからしてくるのに気が付いた。

（吸血鬼になつたせいかな、妙に血のにおいに敏感なんだよな。でも
血は飲みたくならないんだよなあ。吸血鬼の定義が揺らぎそうだな
…。）

なんて考えながらも、カイは血のにおいがする方へと歩き出すのだ
った。

そこは地獄絵図だった。

折り重なるように倒れている人、人、人。

血で川ができるのではないかと思えるほどだ。

（生きているものは一見していないな……。大きな戦でもあったのか？ん……。あれは……）

そうしてカイが見つけたのは、ふらふらと覚束ない足取りで遠くを歩く少女だった。

（死んだ兵士から金目のものでも剥いでいるのか？それにしてもずいぶんフラフラだな、いまにも倒れそ、う……。ってほんとに倒れたよ！？）

慌ててその少女にカイは近寄った。

（可愛い子だな。フランス人形みたいだ……。大きなケガもなさそうだし、疲労で倒れたか？なんにせよどこかで休ませよう。）

そうして、その少女を抱えて駆け出すカイだった。

開幕（後書き）

やっとのことで本編キャラに絡めるぜ！！ひゃっほーい！！！！

とりあえず、キャラ崩壊とかしても怒らないで欲しい！！作者との約束だよ？

邂逅

とりあえず、少女を抱えて見つけた廃屋に入ったカイ。

現代で、気絶した少女を廃屋に連れ込む見た目18歳の高校生といったらそれはもう一発で警察に突き出されるようなアレな場面なわけだが、そこらへんまったく気が付いてない坂本カイだった。

とりあえず、少女をベッドにおろし、やることも無いためカイは少女を眺めることにした。

（ほんとに人形みたいだなあ。それにこの寝顔、なんか癒しのオーラがてる気がする！それにしてもどうしてあんなところに居たんだろう？服はボロボロで血もたくさん付いてるのに傷は無いし。）

「う・・・、ううん・・・」

「ん、苦しいのかな？」

少女のほうから何かうめき声のようなものが聞こえてきた為、カイは身を乗り出して顔を覗いた。覗いてしまった。

そのとき、少女の目がパツチリと開いた。

「……………」

少女はそこで固まった。

??? ? SIDE

「う……、ううん……」

気絶していたのかな…？襲ってきた人たちを倒すのに魔力を使いきたみたい。でも今日の敵は多かったなあ、最近この辺にきてるっていう吸血鬼のせいかな？私とおなじ吸血鬼には興味あるけど、こいうのは勘弁してほしいなあ…。そういえばなんか寝心地がいいけど何でだろ？とりあえず、起きてみようかな

しようとしていたではないかー!」

そう真つ赤になって叫ぶ少女。

「(かわいい…) いや! 誤解だつて! ただ顔を覗き込んでただけだつて!」

「~~~~! それだつて充分恥ずかしいわ馬鹿者がっ!!」

そしてなおも追撃をしようとする少女だったが、その追撃は途中で終わった。

廃屋を囲む気配があつたからである。

「なんだ? なんでこの廃屋囲まれてるんだ? それに結構な人数だな…。」

「さっきのやつらの仲間がまだいたようだな。フンツ、数だけはやたらに多いな。(どうしよう、まだ魔力消耗したまんまだよ。この変態さんはどうでもいいとして、逃げ切れるかどうか。捕まったらまた焼かれるのかな?)」

「(ん…。この言い方。) もしかして、あの死体の山は君が作ったのかい?」

「ああ、そうだぞ? どうした人間、怖くなつたか? 逃げるなら今だぞ? もつとも今ここにいる人間は皆殺しにしてやるがなっ!」

「信じられないな…。とりあえず、話を聞きたいところだけど、こ

の囲まれた状態じゃ話もできないな。ちょっとそこにいてくれ。すぐ戻るから。」

「はっ？お前なにを……？ってまたんか貴様！！（もういつちゃったよ……）」

そういつてカイは少女の制止も聞かずに外へ飛び出していった。

?????SIDE

あの変態さんは何なんだろう。魔力はあんまり感じなかったし、物腰も武術をやってる感じにはみえなかつただけどなあ。それに珍しい服着ていたし。あ、戻ってきた。

「ふう、これで話が出来そうだな。おれは坂本カイツっていうんだけど、君は？」

「あれだけの数を倒すとはなかなか出来るようだな。私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。呼び方はエヴァでかまわん。」

「そうか、なら俺のこともカイツって呼んでくれ。それであの死体の山を作ったってのはどういうことなんだ？」

この変態さん私の名前聞いて、そうか、だけで済ますなんて。それ

に死体のこともすぐ察しがつきそうなものだけだな。よっぽどの世間知らずなのかな？

「そんなこと決まっているだろう。私が吸血鬼だからだよ、それも真祖のな！人間達は自分たちとは違うもの、特に自分達より力のあるものを排除したがるものらしいな！」

「そうか、それでエヴァは自ら望んで人を殺しているのか？」

「ツハ、貴様状況が分かっているのか？目の前に真祖の吸血鬼がいるというのに！頭が沸いているのか？」

「いいから応えてくれ、望んで殺しているのか？」

「ツフ、私は自らに降りかかった火の粉を払っているにすぎん。憎しみをもって殺したのは最初の1人だけだ。それに私は女、子供も殺さん。」

「その最初の一人ってというのはどんなやつだったんだ？」

この人なんなの？こんなこと聞いてなにがしたいんだろう。でも不思議と話してしまってもいい気がする。

「そんなことを聞いてどうする？まあいい。そいつは私を吸血鬼に

変えたやつさ。10歳の誕生日に私は人間からこんな化け物に作り変えられたのさ。それからわたしは30年ほど追われる身ってやつさ。滑稽だろう！笑うが良いさ！！」

そこまで言うと、この人は急に私を抱きしめた。すごく驚いたけど、不思議と嫌な感じはしない。むしろ気持ち良いくらいだ。

「つき、貴様！何をしているっ！！」

「つらかったんだよな。どうしようもなく理不尽なこの世界に憤るしかなくて、そしてただ必死に生きているだけなのに後ろ指差されて、命すら狙われて…。」

「っ！貴様に何が分かるっ！！」

「分かるさ、俺も吸血鬼で命を狙われて生きてきたからな。」

え…この人いま自分も吸血鬼だって。

「これからは俺と一緒に居てやる、だからもう無理するな」

SIDE OUT

「これからは俺と一緒に居てやる、だからもう無理するな」

そういつた瞬間エヴァは俺の胸に顔をうずめて泣き始めた。

10歳だった少女がこの30年を生き抜くのには相当な苦勞があったはずだ。それも一人ですつとだ。いままで我慢していたものが一気に溢れてきたんだろう。

「グスツ、ほんとに一緒にいてくれるの？」

「（口調が変わったな、こちらのほうが素なんだろうな）ああ、あいにくと俺も吸血鬼だからな、言葉通りずつと一緒にいてやるよ。」

「ありがとう…すうすう…」

泣き疲れたのかエヴァは寝てしまった。

（しかし、ほんとにかわいいな。……………ハッ！！いかん！ロリコンに目覚めるところだった！！とりあえず、ここを離れるか。一応外の連中は気絶させただけだしな。しかし10歳の少女を吸血鬼に変えるなんて、とんだ外道も居たものだな。今まで不殺しを貫いてきたが、そういう奴は殺したほうが良いかもしれないな。）

この邂逅は少女に救いを、少年には人間へのしこりを残した…。

邂逅（後書き）

さて、とりあえず作者はエヴァ信者であります。

その信者として、あのSなエヴァもいいけど、普通にかわいいエヴァっていうのも妄想が膨らむんですよね。ってことで、吸血鬼になって30年ほどというところで登場させて精神が磨耗しきっていない！という感じにしてみました。異論は認める！！でも優しく反論してね 作者はとってもデリケートですよ！

スパルタレックス (前書き)

ごめんなさい、やりたかっただけです。後悔はしていない!!!

スパルタレッツェン

カイはエヴァを抱えて（所謂お姫様抱っこ）駆けていた。

（ん〜どこが良い感じのところないかなあ〜と。あ、丁度良いところにてっかい洞窟発見〜。）

とりあえずエヴァをおろして、やはりやることも無いのでエヴァの顔を覗き込んでいた。

（さてと、これからどうするかな。やっぱりエヴァを守る為にもっと強くないとだめだよな。でもどうすれば良いんだろうなあ〜。）

「……………うん…」

（お、エヴァが起きるようだ）

「あれ？ここは？」

「おはよう、エヴァ！」

「え！？カ、カイ？な、なにしてるの！？」

エヴァがなぜか慌てている。

「ちょっとかわいい寝顔を眺めていただけさ。それより初めて名前
で呼んでくれたね。」

「かわいいって…／＼／＼と、当然だよ！これからカイとはずっと
居るんだからね」

「（いちいちかわいいなあ）そうだね、一応ここは適当に見つけた
洞窟。さっきのやつらは気絶させたただだったから、あそこにいつ
までも居るとまづかったからね。」

「気絶させただけって…。もしかして今までずっと殺さずに生きて
きたの？」

「ああ、一度だけ殺してしまったことがあるが、今まではのらりく
らりと逃げてくるだけだったな。」

「呆れた…、良く今まで生きてこられたね…。そういえばカイから
はあんまり魔力を感じないのだけれど、どうやって戦ってるの？す
ごく気の使い方がうまいとか？」

「……………気ってなんですか？」

「 」

暫く無言が世界を支配した。

「それじゃあ、いままでただの身体能力で戦ってきたの？」

「そう…なるかな？」

「よく身体の強化なしに100年も生きられたね…。もはやバグとしか…。」

「えっと、できれば魔力とか気とかのことを教えてくださるとありがたいのですが？」

・そのとき不穏な空気があたりに張り詰めた

「フフフツ、では教えてやるうではないか！私はスパルタだぞ？まあいまさらやめようなんて言っても貴様に拒否権などないがな！」

「ちよっ！なんで口調かわってるの！あとどこから出したのその眼鏡！！（似合ってるから良いけど）」

そこには、眼鏡をかけたスパルタ教師がいた。

・・・

・・・

・・・

（う…地獄をみた…。ああ、ゆとり教育って素晴らしかったんだな。ゆとり万歳！！）

エヴァの授業はカイに軽くトラウマを残した。

「それじゃあ、おれは気を伸ばすほうが良いみたいだな。（魔力は多分あるのだろうけど、きつと魔眼を抑えてるせいで使えないんだろっな。できればあれは使いたくないからな。）」

「そうなるね。わたしたちは不死だし、生命力は無尽蔵だからね。最大出力を伸ばす方面でいいと思う。それにカイはもとの身体能力がすごいみたいだし…。（ほんとに何の強化もなしにあんな力を出すなんてほんとにバグみたい…。）」

エヴァは説明する過程で、まれに気を認識していない者が無意識に気を操っている可能性があるといってカイの力を見せてもらった。∴結果は惨敗だったが。

「（ちよつと力見せたらかなり引かれたからなあ、吸血鬼だからエヴァも出来ると思ってたのに…。）そうするよ。エヴァの為にも頑張らないとな！」

「（私の為だなんて∴∴∴）あんまり∴無理しないでね？」@上目遣い

「ぐっ……この破壊力は反則だっ……（ああ、わかっているよー！）」

そうしてカイの修行が始まった。

スパルタレックス (後書き)

作者の頭がかなりイッてしまっています。

エヴァはいいものですね。

ところで直死の魔眼とだけ空気なんだろう。

あれをだすとほぼ一瞬で終わってしまうからな。まさにチート。それにカイの初期身体能力が高すぎになってしまっている問題が！

一応、カイの吸血鬼設定はアルクエイドから引っ張っています。目が赤いとかいうのはそういう事情。ただ、地球とのつながりが無いため空想具現化とか使えないです！その代わり環境破壊系の攻撃とかでも力が弱まったりしません。妄想的にはアルクの吸血衝動に当たるものが殺人衝動にしたいと思ってたんですけど、バランス的に無理じゃね？っておもっ今日この頃。

とりあえず、次回からカイのチート化が始まるのかな？
よければまたよんでください！

殺人衝動一（前編）（前書き）

うむ、妄想でかくとひどいことになるっていうのをいまさらながら痛感中

さて、いつになったら原作に絡むのかな？w

殺人衝動一（前編）

SIDEカイ

気の訓練を始めて10年が経っていた。

この間俺とエヴァが行動を共にしだしたことに焦ったのか襲撃者の数が激増した。

俺はエヴァに人を殺させるのを嫌った為色々無茶をしていたが、それでも全ての襲撃者を自分ひとりで片付けることはできなかった。

それが嫌で、俺は更に修行にのめり込んでいった。

幸い気の飲み込みはかなり早く、今ではそれなりに使える。更に気を使い始めたことで飛躍的に身体能力が向上してかなり良い線いつているんじゃないかと思う。

今日は久しぶりに”散歩”している。エヴァに散歩に行くといったら「またか…」っていわれたけど俺は断じて迷子になどなっていない！

「さて、今日もいい青空だ…」

吸血鬼が燦燦と降り注ぐ日の光のもと空を眺めているのも変な話だなっと少し自嘲してみる。

さて、そろそろ戻るとするか。きつとうちの姫さんがお待ちかねだ。

SIDE OUT

カイが現在使っている隠れ家に向かって帰り始めた頃…

エヴァは唸っていた。

SIDEエヴァ

「う〜ん…、最近カイが遠い気がするう。確かにカイは気を覚え始めてから反則気味な強さになってきているけど、何も一人で全部背負い込まなくてもいいのに。というより、パートナーとしてもう少し私のも頼ってほしいっていうか…。」

ここで一つ大きなため息。

「そりゃ、守ってくれるのは嬉しいけど！それはもう騎士様みたいでノノノってそうじゃなくてっ！！それに、今でも不殺^{こころ}ずでいるっていうのも少し…。圧倒的な力の差を見せてやれば襲撃者も減るだろうし、いちいち隠れ家を変えたりしなくてもいいっていうのにな…。」

ここでもういっちょ大きなため息。

50年を生きた乙女の悩みは尽きないのであった。

しかし、悩んでいる時間は唐突な終わりを見せた、何者かが隠れ家に侵入してきたのである。

「ツツ…、敵かつ…」

エヴァは敵の襲来を察知して、悩める乙女モードから戦闘者のそれへと切り替わる。

「（敵の数は7人か…それに、それぞれがなかなか出来るツ）人の家へと無断で侵入するとはあまり良い趣味とは言えんな！貴様ら今すぐ死ぬか？」

「はっは！実験動物が随分と威勢の良いことだな！お前一人で俺達全員倒せるとも？」

「（実験動物！？この人たち私を”変えた”やつ仲間！？）貴様ら奴の仲間か？よく私の前に顔を出せたものだな！よほど自殺願望が強いとみえる！」

「御託はいいからさっさとかかってこいよ、遊んでやるよお嬢さん！」

「（私でもカイの力になれるって証明しなくちゃっ）なめるなよ、餓鬼どもがっ！！」

S I D E O U T

カイは大きな魔力のぶつかりを隠れ家のほうから感じて焦った。

（なっ！襲撃者だと！？それもかなり強い力だ。クソツ間に合えっ！！！！）

カイが隠れ家に、いや隠れ家が”あつたところ”に戻った頃には全てが終わっていた。

隠れ家は吹き飛び、そこにエヴァの姿はなかった。

ただ一つそこには手紙が残っていた。

手紙にはこうあった

『大事な君の姫様は預かった。返して欲しくは明日の夜明け湖の畔までこい』

「クソツ…！どこの漫画的展開だよ！全然わらえねえ！！」

（なんと少しでもエヴァを助けなくちゃいけない！相手はエヴァを攫うくらいだ、かなり出来るだろう。しかし、相手の目的がわからない、俺達を殺したいだけなら普通に各個撃破でいいはずだ…。なにかあると思っ行って行ったほうがいいのか…。）

.....

.....

.....

そして、約束の刻。

拘束されたエヴァが、エヴァを攫った7人と共にカイの前へと転移してきた。

殺人衝動一（前編）（後書き）

うちのエヴァ様になしとるんじゃああああ

こんにちは作者です。

さてこの作品のタイトルですが、異世界迷走記！？です。
どこら辺が迷走かっていうと、作者が支離滅裂なことが迷走です。

まだまだ迷走は続くよ！！！！

殺人衝動（後半）（前書き）

ああ〜なにかがしたいのかわかんない…。

< 絶賛迷走中の作者！！！！意味不明だけど想像力で補ってください >

殺人衝動（後半）

「さて、エヴァを攫っておいて、覚悟はできているんだろうな？」

現れた敵に対して精一杯威圧をかけるカイ。

「おお〜怖い怖い。でも正直私達にとってはこの実験動物なんてどうでもいいんだ。私達がほしいのは君だよ！！坂本カイ君！！」

「実験動物とはどういうことだ！それに俺が欲しいっていうのも理解に苦しむな。」

「はは、知りたければ力づくで聞き出さがいさ！ではいくぞ！！」

そうして戦いが始まった。

カイの戦闘スタイルはその圧倒的なまでの速度とパワーで敵をつぶしていくものだ。とてもシンプルであるが故に強い。

（敵は前衛タイプ4人後衛タイプ3人という構成か…。エヴァじゃきつかったな）

エヴァンジェリンは体術もそれなりにこなすが、やはり膨大な魔力による魔法を使うほうが本来のスタイルなのだろう。それなりの使い手4人との体術勝負はきついものがあった。

そして敵は空を飛んでいた。魔法が使えないカイには飛ぶことはできない。

敵は空を飛べる利点を活かし、立体的な攻撃を展開し、後衛の詠唱が完了すると空に逃げるといふ連携をみせた。

この連携がなかなかの錬度で思いのほかカイをてこずらせる。

（さすがにエヴァが負けるだけはあるってことかっ！でもまだ遅いぜ！！）

圧倒的な速度を誇るカイはその連携ですら凌駕する。

そうしてカイは戦線から1人目を排除しようと拳を振るう。

ガンッ

（硬いっ！？障壁を抜けない！！）

カイの攻撃を受けた敵は一瞬後退したもののまたすぐに戦線へと復帰する。

戦局は圧倒的なスピードを誇るカイに未だ傾いているが、カイも決定打を与えることができず攻めあぐねていた。

戦局は均衡状態へと移行しつつあった。

（これじゃ埒があかないな。少し危ないかもしれないが、エヴァを攫ったんだ少しきついお灸をすえてやるかつ！）

そうしてカイはまた敵を排除すべく拳を振るう。

敵は今までの攻撃で自身の障壁が突破されないものだとおもって油断していた。

「今度はさっきとは違うんだぜ！！」

ガゴンッ
ッ
ッ
ッ
ブ
チ
ッ
ッ

カイの拳は敵の障壁を抜くだけではとどまらず、咄嗟に危険を感じたのか防御に回した敵の腕すら紙切れのようになり千切り敵を吹き飛ばした。

不殺^{じころ}ずのカイはこんなときでも手加減をしていたのだった。

カイの攻撃に危険を感じたのか敵が空へと逃げていくが、それをカイはニヤリと笑ってみていた。

その様子に敵が不吉なものを感じた時には、カイの姿は地面から消えていた。

そして、空を飛んでいる自身の上から話しかけられた。

「俺は飛べないが、跳ぶことはできるんだぜ？」

ギョツとした敵が上を見たときにはカイの拳は目の前に迫っていた。

圧倒的なスピードには3次元への移動もたやすい物だった。

そしてカイはそのまま虚空瞬動を駆使して次々と敵を撃墜していった。

「意外とあっけなく終わったな。いま解いてやるからな！エヴァ！」

そういつてエヴァの方へ向かっていくカイだったが、猿轡を口にはめられているエヴァが暴れながら唸っていた。

それも、カイが近づくにつれて激しくなるのだった。

（オイオイ、どうしたんだよ。まさか俺への文句が我慢できなくな
って叫んでいるとかないよな…？）

そして猿轡をとった瞬間、エヴァは叫んだ。

「カイ！まだ終わってない！！！」

そして、カイは魔法の集中砲火を受けた。

「おっと、やりすぎたかい？すまないね」

そうして、ボロきれ同然まで魔法を浴びせかけられ地面に這いつくばっていたカイが見たのは、傷一つない7人の敵だった。

「な…んで…？」

当然のカイの疑問だった。
どうして倒したはずの敵が、傷一つなく立っているのか理解できなかった。

「君は世界に吸血鬼がその小娘一人だと思っていたのかい？吸血鬼を生み出す法があるのだ、世界に吸血鬼がまだいたって不思議ではないだろ？」

（クツ、俺だつてその可能性は考えたが、どこかで否定していたっ。エヴァみたいな悲しい子が他にもいるなんて考えたくなかった！）

「その実験動物は実に良い結果を出してくれたよ。おかげで私達は吸血鬼の力を手に入れることができた！」

（こいつらがエヴァを作り変えたのかつ……。自分達の目的のために、なんの罪も無い子供を……！）

「そして、最近その実験動物の近くに私達も知らない吸血鬼が現れたんだよ！実に興味深かつたね！君からはあまり魔力を感じられな
いが、その代わりに圧倒的な身体能力があつた！私達の身体にその
身体能力が加われれば完璧だ！圧倒的な身体能力・魔力！そして不老
不死の身体！喜べ！君は偉大なる存在を生み出す為の礎いしづえとなれるの
だよ……！」

そこまで聞いてやっとカイは口を開いた

「…腐ってる。お前達は腐ってやがる。」

「何か言ったかね？これから至高の存在となる私達が腐っているって？」

「ああ、そうまでして力が欲しいのか？」

「欲しいに決まっているだろう。この世は力が全てだろう！！」

「醜いな。力にしか価値を見出せないとは。自分勝手な欲望のために何の罪もない人間を踏み台にしゃがってっ…」

そこまでいって、カイはフラフラと立ち上がった。

「そして、その犠牲となったものはただ在るだけで悪だとして処断される。本当の悪がなにかも分かっている偽善者どもによってな！ エヴァはただ必死に生きていただけだった。ああ、腐っているのはお前達だけではなかったな。人間どもは腐っている奴が多すぎる！」

「ほう、それでどうするのだ？ 私達を殺すか？ あいにく私達は不老不死なんだがな？ ましてやそんなボロボロで自己回復も出来ない君に何ができるのかな？」

「ああ、それがいいな。まずはお前達を殺そうか。」

その言葉をきっかけにあたりにあたり濃密な死の香りが充滿した。

「なっ!?!どこからそんな魔力が!それになんだその目は…!?!その目で私達を見るなっ!?!」

S I D E
E H ヴ ア

その目は私を惹きつけた。

不思議な蒼い目。

その目は、綺麗で、危うさを内包しているようで、そして死を連想させられた。

カイは瞬く間に不死であるはずの敵を殺してしまった。

不思議と疑問は起きなかった。むしろ必然だとさえ思えた。

敵を倒したカイがその場に立ち尽くしていた。

私が行かなくちゃいけないっ

自由になった口で魔法を詠唱し、拘束を解除してカイに駆け寄る。

「エヴァ、人間は醜いな。」

「うん。」

「自分の欲望の為に力を求める人間、自己満足な偽善者…他にもたくさんある…」

「うん。」

「俺ちょっと疲れたみたいだ。ちょっと休むな。」

「うん。私がずっと一緒にいるから。無理しないで…。」

「ありがとう、エヴァ。」

そういって彼は眠ってしまった。

殺人衝動（後半）（後書き）

あは

意味不明ですね。本当にありがとうございました。

まあとりあえず、エヴァのほかにも吸血鬼いるんだぜ！？っていう妄想をふくらませたらこんな感じになりました。

ほんとにもつとうぜー！ー！ー！ー！！な感じにしたかったのに…

あとは脈絡もなくキレタ、カイ君ですね。どう考えてもキレルには色々不足しているだろう！！そこそこは、ゆとり世代の「キレル若者！！！」スキルが発動したものと思ってください。そうしないと困ります。

迷走はまだまだつづくよ！！！！

魔眼と魔法と、ときどきスパルタ（前書き）

2人の生活編だよ!!

脳内補完でよんでくださいませー！

魔眼と魔法と、ときどきスパルタ

SIDEエヴァ

カイはあれから不殺^{レキ}ずをやめた。

といつても、殺人嗜好の殺戮者になったというわけではない。

私たちに挑んでくるものに対して容赦がなくなったのである。

圧倒的な私とカイの力の前に、いまでは挑んでくるものは真に力あるものだけとなった。

カイが挑戦者を殺す際に、私は何度かあの”蒼い目”をみた。

10年私達は一緒に居たけれど、カイはずっとあの目のことを隠していた。

隠していたからには何か触れられたくないことがあるのだろう。

薄々私はあの目が何であるか理解し始めていたが、それでもカイに目のことを聞くことはできなかった。

最近私達は、奪った城を暗黒大陸へと転移させ、レーベンスシユルト城と名づけそこで暮らしている。

いま私達は今までが嘘みたいな平穏な日々を送っている。

今日は思い切ってカイに色々聞いてみたいとおもっ。

SIDE OUT

SIDE カイ

今日は外で寝ころんで日向ぼっこしながら空を眺めていた。

すると、エヴァがいつの間にか隣にきて、座っていた。

心地よい風が無言の俺達ををなでる。

この雰囲気は何か聞かれるな……。魔眼のことを聞かれたら、俺が転生したことも話さなくちゃいけないだろうな。まあこの際話してしまっても良いかもしれないけどな。

「カイ、聞きたいことがある。」

「口調まで変えてどうしたんだ？」

「カイの目には何が視えている。」

「青い空と白い雲。」

「モノの死が視えているんだろう？それを普段は魔力で抑えているから魔力がほとんど無いようにみえるのだろうか？」

えらく直球勝負だな…。ちょっとくらいはぐらかしてもいいじゃないか…。

「ああ、俺にはモノの死が見えている。俺はこれを”直死の魔眼”
つてよんでる。魔力についてもそれであっている。」

「やはりか。しかしどうして魔力をほとんど回してまで魔眼を抑える必要があるのだ？」

「…この目でみる世界はつきはぎだらけで、今にも崩れそうなんだ。それに大切な人の死まで意識せず視えてしまう。」

そこで、おれはエヴァのほうを見る。

「そんなのには俺の精神が耐えられないんだ。それに魔眼を出しているうちは、攻撃的になってしまうって言うか…、殺人衝動が強くなってしまっただ。この殺人衝動に完全に飲まれたらきつと見境なく殺す機械になってしまうと思う。」

「そんなに物騒なものなのか、その魔眼は。しかしその目はいつか

らなんだ？カイの魔力ほぼ全てでないと抑えられないような魔眼だ、吸血鬼になつてからののだろうか？」

「この魔眼は、吸血鬼になつたときの偶然の産物って感じかな。だから吸血鬼になると同時にこの魔眼も手に入れた。」

「どんな偶然があつたらそんなものが出来るんだ…。吸血鬼だつてかなりアレなものだというのに…。」

「あ…。それなんだけどな、俺一回死んでいるんだよ。」

「……………は？」

エヴァが目を丸くしている。こつこつ驚いた顔もかわいいな。

「んでさ、生き返らせるときに吸血鬼に作り変えられたんだ。」

おお、驚いている驚いている。

「それで、一回死んだせいで俺が死を理解できるようになつたから、直死の魔眼もくつついてきたってわけ。」

色々和省いたり変えたりしたけどこつこつのほうが分かりやすいだろ。

「クツ…、限りなく臭くそ臭くて胡散臭い話だが、カイがここにいる、

その目があるということがその話が本当という証明だな。」

「まあ、おれ自身の話はこんなところかな。大して面白くなくすまないな。」

「そんなことないよ、カイのこと知れてよかった!」

そういつて屈託なく笑うエヴァは本当にかわいかった。

SIDE OUT

「ところでさ、カイもそれだけの魔力があるんなら魔法覚えたら?」

「それもいいかもしれないな…、魔眼を封じている間は使うことは

できないけど使えるに越したことはないよな。悪いけど教えてくれるか？」

カイはエヴァの魔法を見ていて便利そうだなと常々おもっていたので、良い機会だともってエヴァに魔法を教わることにした。

しかし、このときカイは過去の過ちを失念していた。

エヴァに教えるを請うことが、どういづことかを。

「あっはっはっは!!そらそらどうした、そんなものか!!いくぞ
「氷神の戦槌」!魔法障壁だけで防いで見せる!間違っても”気”
はつかうなよ?」

(鬼かっ!!!ノリノリすぎるだろ!!!)

カイは必死に魔力を障壁に回す。

(なんとか凌いだか！マジ死ぬって！普通死ぬって！！)

「大丈夫だ、カイは吸血鬼だからな！この程度は平気さ　ほら次だ！！！！」

(エスパーかよ！？もしかしてほんとに思考読まれてるのか…？つてやばっ！！！！！)

どーーーーーんっ！！！！

エヴァのしごきはカイがボロ雑巾になるまで続いた。

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

「カイは魔法の才能があるな。成長が恐ろしく早い。」

「そ、それはどうも…。直死の魔眼のおかげで魔力の流れが視えるせいかな？魔力も練りやすいし、魔法のイメージもしやすい。それに多分魔力も効率的に運用できてる気がするよ。」

エヴァと魔法の訓練を始めてから、視ることに慣れてきたのかこの世界に来たときには、”もや”だったものが最近ははっきりとした流れになって見えるようになっていた。

「…カイ、魔力も視えるのか？」

「ああ、気も視えるな。エヴァのは俺と同じ黒い魔力で、魔力の練りこみ、運用のスムーズさもとても綺麗で見惚れるくらいだよ。」

「…っ／／／ほ、ほめても修行は軽くはしてやらんぞっ！！ほら、いつまで休んでいるんだ！いくぞ！！！」

「え？ちよ！まつ、ワキヤーーーー！！！！」

ボロ雑巾が1枚仕上がった。

魔眼と魔法と、ときどきスパルタ（後書き）

教えているときのエヴァ様は生き生きしているよね!!

あの感じがとつてもいい!!!え?マゾジャンイデスヨ?

さて、次はやりたかったあれいってみようか!!

原作まだー?

ばくていおー（前書き）

ハハハ、やっちまったぜ

後悔はしている！！！

関係ない話だけど、今年もTYPE-MOONの嘘企画は楽しかったな。エイプリル Fool が毎年楽しみです！！でもカレンが全然絡んでこなかったのが残念かな。私のカレン分補給がああああ

ばくていおー

sideエヴァ

カイと出会ってもう何年だろうか？

カイには出会ったときから助けられてばかりだ。本当に感謝しても
しきれない。

でも、今は感謝よりも強い気持ちが私にはあるみたい。

どうやら私はカイが好きみたいだ。

カイは私のこと、どう思っているんだろう？

「あーーーーーうーーーーー……。」

「ケケケ、才悩ミノヨウダナ御主人。」

「チャ、チャチャゼロ！いつからそこに居たの！？」

そこには、例の吸血鬼7人に負けた事をきっかけに創った人形で、私の「ミステル・マキ魔法使いの従者」であるチャチャゼロがいた。

「カインヤロート仲良クナリタインダナ？」

「……………なんでわかるの？」

「御主人八分カリヤスイカラナ、ケケケ、マカセロ御主人イイ案ガアルゼ。」

sideOUT

今日もカイは修行をしている。

修行といっても最近は実益を兼ねた趣味みたいなものになっている。新しい技術を身につけるのが楽しいのだ。

今はこの間 まごい 散歩 したときに出会った人に教わった剣術を練習している。このほかにも今まで色々な拳法・槍術・暗殺術等々、エヴァに節操が無いと呆れられるほどいろいろやっている。

剣術が大分カタチになったことで、カイは上機嫌に修行を終えた。

「ふうー。もう少し研鑽が必要だけどこんなものかな。とりあえず風呂にでもいくか。」

脱衣所に着き、着ていた服を脱ぐカイ。この城の風呂は改造を施したことによって、かなり広くて贅沢な造りとなっている。

「身体を動かした後の風呂は堪えない、よ……な!？」

風呂場に入ったところでカイの時間は凍った。

――男八ギャップニ弱イモノナンドダゼ、御主人。

（ギャップって言われてすごく困ったけど、なんだか妙に頭に響く声
が教えてくれた。これが天啓ってやつかな？妙ににやーにやーうる
さかったのが気になるけど…。それにこの服なんだろう。”声”
は正装だと言っていたけど…。）

カイは混乱の極地だった。

なぜならそこには、エヴァがいたから。

（なんでエヴァ！？しかもスク水で大人バージョンだとっ！それにサイズ少し小さいのか妙にミツチリというか……ッハ！そうじゃない！！ま、まて。そもそもなんでこの時代にスク水があるんだ！！スク水はもつと後の時代だろう！？……じゃなくてっ！！！）

「ナ、ナニヲシテイラツシャルンデシヨウ？」

「そ、その！背中を流しにきたんだけど……だめ、かな……？」

妙に尻すぼみに応えるエヴァ

（いきなりどうしたっていうんだ！！でもむやみに無碍にするのも……）

「そ、そうか。それじゃ少し頼む……。相手は10歳の女の子だっ、落ち着け！！ここで興奮でもしようものなら……あれ？でも実年齢はかなり上だし、外見もいまは……。ってなに考えてるんだ！！！」

「じゃ、じゃあ背中流すねっ！！（は、恥ずかしいよぉ〜〜／＼でもがんばらなくちゃ！）」

そういつて背中を流し始めるエヴァ。

「ど、どうかな？きもちいい…？」

「う、うん。でももう少し力入れてもいいかな。」

「わ、わかったっ！がんばるよっ！」

そういつて、再び背中を流し始めるエヴァ。

最初はぎこちなく、恐る恐るという感じだったが、慣れてきたのが徐々に集中し始めたようだ。

「（ちょっと！せ、背中にやわらかい感触！？これはさすがにまずいつてー！）ちょ、ちょっとエヴァ！？」

「ん？どうかした、カイ？」

「あ、えっと、その…あたってるんだけど…。」

カイがなにを言っているのかわからないといった風に、こてんと可愛らしく首をかしげるエヴァだったが。やがてその意味を理解したのか。

「~~~~~！！！！」

（や、やだ、すごくはずかしい！！ど、どうしよう！）『そこで決め台詞にゃー、わざとあててるのよ、これでイチコロにゃ！』『そ、そうなの？ていうかあなたほんとに何なの？人の思考に割り込んでくるって…』『こまけえこたあどうでもいいにゃ！さあズバツとい

くじや!...!』 は、はい!)

「わ、わざとあ、あて、あててっぺいえるかあああああ!...!」

ガンツ!!

「ゴフツツツ!...!」

エヴァは叫びながら走り去っていった。その場には殴られて気絶したカイが残された.....。

.....

.....

...

「ううゝ失敗しちゃったよおゝ。」

「ソシナニ気ヲ落トスナ御主人。次ガアル。」

「痛つつ…、なんだったんだエヴァのやつ…?」

「カイ〜!」

気絶から復帰したカイが風呂場からでて廊下を歩いていると、エヴァが向こう側から小走りにやってきた。

「おう、エヴァ。どうしたんだ?」

「そ、そのお…さつきはごめんなさい!それでね、お詫びにクッキーを作ったの!その…食べてくれると嬉しいんだけど…/ / /」

そう言うておずおずとかわいい包みを差し出すエヴァ。

…男八家庭的ナ女二弱イモノナンダゼ、御主人。

「(俺クッキー作れるほどの時間気絶してたのか…!) おう!もちろん食べさせてもらっぞ。」

カイが包みをあけると、そこにはかなりキワドイものがあった。

「……………」

(クッキーなんかつくったことなかったけど、あの”声”のひとつのアドバイスでなんとか出来た!…とところで”塩と砂糖を間違えるのはデフォにゃ!あと黒く焦がせば完璧にゃ!”ってなんだろう?)

「えっと、エヴァ味見はした…?」

「その……カイに一番最初に食べて欲しくて……/ / /」

「そ、そうか…。ト、トツテモオイシソウダナー。イタダキマース
!…!(ええい!…南無三!…!…)」

ぱくっ

「……………」

(グホッ…！？焦げの味しかしないと想像していたのに！？まずしょっぱさが最初にきて…うわっ！もうこの先は形容しがたい…。何入れたんだ！？とりあえずこれはまともな味覚の人間が食べられるものではないっ！！！！)

「ど、どうかな？」

「トツテモオイシイヨー??」

「だらだらと嫌な汗をかきながら、必死にクッキーを食べるカイは”漢”だった。」

「そ、そう？それじゃ私も一つ食べようかな 初めて作ったからすごく不安だったんだ」

「え？あつ、ちょっとまって！」

ひょい、ぽくっ

「……………」

「エ、エヴァア？」

「私…こんなときどんな顔すればいいかわからないの…。」

「笑えば…いいと思うよ。」

「う…ぐすつ…」

「エ、エヴァア!？」

「…みんなさ…いい!?!」

そういつてエヴァアは泣きながらまた走り去った。

……

…

…

(エヴァの様子がおかしいな。いきなりどうしたっていつんだ?)

カイはエヴァを探していた。

城の中に居ないので外に出てみると、拍子抜けするくらいすぐに見つかった。

どうやらまだ泣いているようだった。

「よっ！エヴァ！」

声をかけると同時に逃げ出さないように手を握る。

「ふえ？カ、カイ!？」

「エヴァ、今日変だぞ?どうしたんだ？」

「えっと…その…」カイト仲良クナリタカツタンダヨ」
「チャチャゼロ!!!」
「チャ、

いつの間に居たのか、チャチャゼロが応える。

「俺と仲良く？なんでさ？」

「その…カイは私といつも一緒に居てくれて、護ってくれて、それで…カイがすきだし…」ゴニョゴニョ

「ん？最後のほう聞こえなかったんだけど？」

「~~~~／／／ カ、カイはなんで私と一緒に居てくれるの？どうして護ってくれるの？」

「ん、そりゃ約束しちゃったしな。ずっと俺と一緒にいてやるって言っただろ？それに、護ってやるのは、”好き”でやっている」とだからな。」

(えーいまの”好き”ってどっちの意味!?)

「それにさ、エヴァだっていつてくれたじゃないか。」

そこでカイは一旦言葉を切り、口の端を少し吊り上げて。

「私はずっと一緒にいるってさ。俺にはエヴァが必要なんだよ。」

「~~~~／／／」

エヴァがゆでだこになった。それを微笑ましくカイが眺めている。

「そ、それじゃ証が必要だよー!」

「証？」

「う、うん。私とカイがずっと一緒にいるっていう証！」

「お、おう。で、どうするんだ？」

「パクティオーするよ！！！！」

「ぶっ！パクティオーってあれだよな？キスするやつ？」

「そ、そうだよ！！！！早くするよ！！！！」

相変わらず真つ赤な顔で急かすエヴァはかわいかった。

「強引だな……。いいぜ、この身はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの剣となり盾となり、永遠に護り続けることを誓うぜ。……
ずっと一緒にいような。」

「う、うん。ずっと一緒にいよう！」

……そして、2人は契約を結んだ

ばくていおー（後書き）

ははは、どうだやっちまっているだろう？

やめて！石を投げないで！！！！

とりあえず、風呂場のアレどこがギャップなの？って思った方。想像力を働かせてくれ！！

……あれ？どこがギャップなんだろう？

さてと、やっちまったことは仕方ない。あんまり突っ込まないで欲しい。作者は迷走しているのです。

次回から原作と関わっていくつもり！やっどこまでやってきた！！

迷走はまだまだ続くよ！？多分…

旅立ち（前書き）

ふー、やっと原作にたどり着いた！。

脳内補完フル稼働でお読み下さいね

旅立ち

sideカイ

「なあエヴァ、世界を巡ってみないか？」

「いきなりどうしたのだ？」

エヴァと出会って200年ほどが経っていた、エヴァは最近では昔のようなしゃべり方ではなくなっていた。前に「精神は肉体に影響を受けるものだが…歳をとったものだな…」と自嘲していたのを聞いたな、そういえば。

「この平穏な暮らしもいいけど、世界を巡るのも楽しいかなってな。要するに気まぐれだ。」

「フフツ、私は構わんど。私達を脅かすような存在もそうそういないだろうしな。それに…」

そこでエヴァはニヤリとこちらを見て笑い。

「そんなイレギュラーが現れても騎士カイが護ってくれるのだろう？」

「ふっ…もちろんさ、吸血姫きけい様」

そうして俺達は旅にでた。

s i d e O U T

s i d e エ ヴ ア

カイと巡る世界はたのしかった。

あてのない旅だったが、カイが大体迷子になってくれるので退屈しなかった。未だに散歩と言い張るのは本当にどうかと思うが……。しかし、退屈しなかったことを考えれば、本当に散歩の才能があると

言ってもいいのだろうか。
話がそれだな。

私達の話しよう。私は今600万ドルの賞金首になっている。カイに到っては1000万ドルだ。なぜこんな多額の懸賞金が懸けられているかというと、迷子になった先で暴れ回ったりしたせいだ。まあ一向に構わんがな。

今は1983年だ、魔法世界では戦争が起こっているらしいな。どこが勝とうと私達には関係のないことだから、介入することはないだろう。私達にちょっとかい出てきたならばその限りではないがな！

そして、私達は今日も迷子になっていた。

side OUT

ズズーンッ…ドーンッ

「なんだあれ？」

カイたちの歩く先から爆発音が聞こえてくる。それに加えてあたりは断続的な地響きがしている。

「知らん、私に聞くな。大方どこかの馬鹿がドンパチやっているの
だろう。」

「ちょっと行ってみるか？」

「はあ……、どうせ止めてもいくんだろっ？」

「名前答へ。んじゃいくか！」

……

……

…

「おお、派手にやっているな。」

「あの2人”本物”だな。しかし、環境破壊もいいところだ。」

そこでは、赤毛の青年と筋肉だるまが戦っていた。

2人の戦いを見ているカイとエヴァだったが、不意に声をかけられた。

「ここでなにをしていらっしやるんですか？」

そこには、眼鏡をかけた男と、柔らかな笑みを浮かべた優男と、男の子がいた。3人もかなりカイ達を警戒していた。

話しかけてきたのは優男のようだ。

「いえ、なにかすごい音がしたものでちょっと見物に来ただけですよ。」

「それはそれは、真祖の吸血鬼のお二人が来たときには私達は肝を冷やしましたけどね。」

「クツクツク、貴様ら私達のことを知っていて近づいてきたのか？ 酔狂なことだな！」

「いえ、私達は友人の闘いをあなた達に邪魔されなくなかっただけです。どうやらそんなつもりは無いようですけど。」

そう言つて、笑みをこぼす優男。ついでに警戒も解いてくれたようだ。他の二人も警戒を解いている。

「ええ、人の決闘を邪魔するほど無粋ではありませんよ。しかし珍しいですね、普通の魔法使いならば私達のことを知れば、排除しようとするか、恐れるものですけど、あなたたちはそんなことが無いのですね。」

「フフ、あなた達を排除しようとするれば私達3人束になつても不可能でしょう。戦う気のないあなた達をわざわざ刺激することはありませんよ。触らぬ神にたたりなしといえますしね。恐れに関してはただ鈍感なだけなのかもしれませんよ？」

「ハンツ！とんだ狸だな！クツクツク、貴様ら気に入ったぞ！私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。貴様の名はなんというのだ？」

このときカイは驚いていた。今まで世界を回ってきて多くの人と
触れ合ってきたが、こんな反応を示したエヴァは初めてだったのだ。

「フッフ、私はアルビレオ・イマといいます、アルとでもお呼びく
ださい。わたしもあなたが気に入りましたよ。」

そういつてエヴァに向かって微笑む アル。

ゾクッ…

（な、なんだ？いまなにか悪寒が…）

よくわからない悪寒に戦慄するエヴァだった。

「俺は坂本カイだ。君達とは仲良くなれそうだ。」

「おや、そちらが本来の口調ですかね？フッフ、これは信用された

「思ってもいいのですかね？」

「フツ、さあな。そちらのお二人さんは？」

「青山詠春だ、よろしくたのむ」

「ゼクトじゃ。」

「で、あの戦っている2人は？」

「あの赤毛のほうが私達の仲間のナギです。相手はジャック・ラカ
ンとか言っていましたかね？」

「そうか。しかし…楽しそうに闘うんだな。俺も闘いたくなつてく
るな…。」

「おいおい…。またかカイ？（カイは殺すのは嫌いだが、闘うのは
本当に好きだな…。いつからこんなバトルマニアになったんだ…？）
」

「ふふふ。邪魔しちゃだめですよ。」

「わかってるって。」

………

………

…

sideカイ

ナギとラカンの鬪いが終わったようだ。
結果は引き分け。

詠春におぶられたナギと、ラカンが何か言い争っているのが見える。
どうやらとどめは刺さないようだ。

「フフツ、俺もあいつらが気に入ったぜ。」

「カイ？」

「なあエヴァ、あいつらと一緒に行かないか？」

「フフツ、どうせ止めても無駄なんだろう？ 私ならいいぞ、あいつらの在り方は好ましい。」

「ああ、そうだな。それじゃ話つけてきますか？」

そうして2人で彼らの元へと歩いていく。

side OUT

「ん？この二人だれだ？」

ナギがきよとんとした顔で質問する。

「この2人はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと、坂本力イだ。お前達の闘いを見学していたんだ。」

詠春が応える。

「あの有名な”闇の福音”と”鉄壁のロリコン”ですね。」

「ブツツ！？なんだよその”鉄壁のロリコン”って!?!？」

「おや、知らなかったのですか？結構有名な異名ですよ?。」

しれっと応える アル。

「(こいつわざとやってやがる…)(断固抗議する！名誉毀損だ！訴えるぞ!?!)」

「おやおや、怖いですね、ふふふ」

「それでその鉄壁のロリコンは俺達になんの用なんだ？」

ナギが呆れた調子で聞く

「ぐっ…地獄におちろ、アルビレオ・イマ。…俺達を仲間にしてくれないか？それ相応には働くぜ？」

「…は？なんで俺達についてきたいんだ？」

「お前達が気に入ったから。」

「それだけか？」

「ああそれだけだ。」

「くくっ、おまえら強いんだろうな？」

「フツ、強くなければ生きてこれなかったんでな。それでどうなんだ？」

「ああ、いいぜ！紅き翼はおまえらを歓迎するぜ！」

そうして、カイとエヴァは紅き翼に加わった。

旅立ち（後書き）

かなり強引ですが紅き翼はいりましたー。

このあとはしばらくテンプレで進みたいなおもっています。

あと、異名が欲しいですね。鉄壁のロリコンは最初から考えていましたが！！

大戦編（前書き）

う〜あ〜つかれたあ。

朝からずっと書いていた。

ずっと書いてるのにこれだけしか書けないの。てへ

大戦編

Sideカイ

紅き翼に入った俺とエヴァ。

こいつら思ったとおりのいいやつらだった。

エヴァはアルにおちよくられていつもギャーギャー騒いでいるが、なんだかんだ言っても紅き翼が気に入っているようだ。

そして、俺はあのあと回復したナギと勝負して引き分けた。

ついでになぜか仲間になったラカンとも引き分けた。

といっても魔力は封じたままだったがな！

こんないいやつらの”死”は視たくないしな…。

エヴァは真祖の吸血鬼だから、全然視えなくて助かってる。そうじゃなかったら魔法の訓練なんかやってられないからな。

いま、目の前には帝国の軍隊がいる。

おれとエヴァの初陣ってやつだ。

「ふふ、まさか私達が戦争に加担するときがくるとはな。」

「そうだな。まあ、やるからにはさっさと終わらせて被害は最小にしてやるか。」

「クツクツク、カイはいつまでたっても甘いんだな。」

「そういつなつて。エヴァだってそう思っているんだろっ?」

「ふふ、さあてどうかな?」

「フツそれじゃ行くか?」

「そうだな。」

「ああ、ちょっとまってください。おふたりにお話があります。」

そこには、微笑みを顔に貼り付けた性悪^{アル}がいた。

「……アル、貴様わざとやっているだろっ?」

エヴァが若干プルプルしながら言う。

「はて?なんのことやら」

そういつてにつこり笑うアル。こいつ絶対狙つてやがった。

「仲良く出陣は大変結構ですが、一応あなた達は賞金首という自覚をもってくださいね?」

「ああ、そういうことか。私は幻術が使えるからそれでいいだろっ。」

そこまでいって大人エヴァになる。

「カイは……」

そこまで言って目配せするエヴァ。おれも幻術は使えるが、幻術を使う間は魔眼を抑えられないのが痛い。

「俺は幻術使えないからな。なにか用意してきてあるんだろう？」

「ええ、もちろん。こちらの仮面などどうでしょうか？」

そこには、「ロリコン！！」とデカデカと書かれた仮面があった。

「死にたいのか？」

「いえいえ、ほんのジョークですよ。ふふふ」

こいつほんと性格悪いよな…。

「こちらをどうぞ。あとはローブも用意しておきました。いつも黒のスーツですから黒にしておきました。好きなんでしょう？黒」

こんどはまともな仮面だった。怪盗がつけてそうだな…。

「特にこだわりがあるわけではないが…とりあえず、礼はいう。ありがとう。」

「いえいえ、それでは御武運を。私達もすぐ出陣でますから。それまでがんばってくださいね。」

そういつてアルは消えた。

まあ俺達も自分達が賞金首だつてことを加味して、ナギたちとは別働隊になつたわけなんだがな。

「ふふ、あいつ俺達が無駄な厄介ごと背負い込まないように心配してくれたのかな？」

「フンツ、あいつは本当にマメだな。いまさら正義かぶれの偽善者が襲い掛かってきても私達は一向に構わんのだがな。」

「…護つてやらなくっちゃな。あいつらのこと。」

「…ああ。」

俺もエヴァも、自分達以外の誰かを護ろうと思つ日が来るなんて思つていなかっただろう。

「それじゃ今度こそいくか。」

「ああ。」

魔眼を開放した俺と、エヴァのコンビは猛威を振るい。さらに後に参入してきた紅き翼により戦局は一気に傾いた。

……

……

…

そしてその後も連戦連勝し、グレートブリッジ奪還作戦での紅き翼の活躍は語り継がれるほどのものだった。

ついでに、世間では俺達二人は紅き翼と認識されていないため、別口で”黒の死神”と”死の女神”とか言われてた。

この頃にはナギのファンクラブが出来ていた。そして、俺とエヴァのも。それを知ったときは、大衆とは現金なものだなと2人して自嘲した。

ちなみに、俺は当然だが顔をだしていない。どうやら仮面をつけたミステリアスさがウケタらしい。

そして、俺が魔力を使えることを知った馬鹿二人が再戦しろとあまりにうるさかったので、キレタ俺が咸卦法と直死の魔眼で障壁抜いて、鉄拳制裁を行った。以来あの二人は俺を怒らせるのを極端に恐れるようになった。

そして、紅き翼に新しい仲間、ガトウとタカミチ、が加わり、敵の黒幕が「完全なる世界」と判明した。

S i d e O U T

S i d e E ヴ ア

今日はガトウに紅き翼が呼び出された。なんでも協力者がいるそう
だ。

誰かと思えば、ウエスペルタティアの王女だった。随分大物が出て
きたものだな。

クツクツク、それにしてもナギが王女に一目ぼれとはな！今ラカン
とカイの二人でナギをおちよくっているが私も加わりたくらいだ。

紅き翼は休暇中に「完全なる世界」について調査するようだ。私と
ナギとラカンの3人は情報収集に向いていないことから、普通に休
暇を楽しんだ。私とラカンと一緒にバカンス。ナギはアリカ王女と
デートだ。……………わたしもデートしたいか思っていないからな！！！！

どうやら決定的な証拠があがったらしいな。戦争を止められるとみ
んな舞い上がっている。なにかきな臭いかな…。

フフツ、ふたを開けてみれば、畏にかかった私達は一気に反逆者扱いだ。もとより追われる身だ。こんなのは少し規模が大きくなったにすぎん。

私達は幽閉されていた、アリカ王女とヘラス帝国の第三皇女テオドラを連れて秘密基地にやってきた。

…ラカンはどうでもいいが、あのテオドラとかいう皇女カイに懐きすぎじゃないか？…釘を刺しておくか。

「おい、クソガキ。カイから離れる。」

「なんだオバサン！無礼であろう！！！」

「オバっ！？このクソガキ…！この姿は幻術だ！！！」

そういつて幻術を解く、これならばオバサンなどと言うことは出来まい！！！！

「お、おいエヴァア！！！」

カイが幻術を解いたことに非難の声を浴びせるが今はそれどころで

はない！

「…なんだ、妾よりチビではないか。」

「チビ！？このクソガキが！！我が名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル！闇の福音とは私のことだ！貴様、その口閉じねば消すぞ！！！！」

「闇の福音とな？あの吸血鬼のか？」

「クツクツク、名を聞いて恐れたか？」

「なんだ、ロリババアではないか。」

いま、こいつはなんと言った？ロリババア？

「き、貴様！！言うに事欠いてロリババアとはなんだ！！！」

「本当のことではないか。ロリババア！！！」

「貴様こそ、なんだその婆言葉は！！！！！」

「なっ！？妾を愚弄するか！！！」

ギヤイギヤイ！

周りでは、私とカイの正体を知らなかったアリカ王女が驚いていた
り、アリカ王女とナギが何かの儀式をしていたようだが、今はそれ
どころではない！このクソガキを言い負かす！！！！！！！！！！

……

……

…

その後、肉体労働班と頭脳労働班に分かれて紅き翼は反撃を開始した。

あのクソガキは^{テオドラ}いけ好かないが、仕事はできるようだな。

そうして6ヶ月もの長い戦いの末、私達は敵の本拠地「墓守り人の宮殿」を突き止めた。

「フンッ、やっと最終ダンジョンか。随分とてこずらせてくれたものだな。さっさとこのうではないか。」

「キティ、そうさせるものではありませんよ。」

「ぶっ！？アル！！貴様なぜその名を知っている！？というか、その名で呼ぶな！ばかものー！！！」

こいつは、ほんとに油断ならん！！

「真面目なお話です。カイも聞いてください。これは最終決戦となります。おそらく、今までで一番大きな戦いとなるでしょう。そこで二人には、外で自動人形オートマタや召喚魔の相手をしてもらいたいです。それも本来の姿でね。」

ふっ、こいつはまた…。

「貴様は本当にマメだな。」

「いまさらこんなことで、俺達の懸賞金がなくなることはないともうがな。」

「ふっ、大事なのは大衆の印象ですよ。いまさら懸賞金目当ての人間に負けるあなた達ではないでしょう？では大衆を味方につけてしまえば、さて、どうなるでしょうかね？ふっふ。」

こいつは腹黒い…。

「せいぜい派手にいかせてもらっせ。ありがとうなアル。」

「フンッ、いままで私をおちよくってきたことを今のでチャラにしてやるっ。感謝するぞ。」

「では、御武運を。」

「ああ、そっちな。」

そうして戦いが始まった。

では、派手にいかせてもらっか！

まずは、全軍から見えるところまでカイと共に飛ぶ。

ふふふっ、全軍から歓声があがっている。私達も有名になったものだな。

さて、このドッキリの落ちをつけてやるぞ。

「我が名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル!!!」

そこまで言って、幻術を解く。私の名と姿を見て全軍にどよめきが走る。

「私こそが、”死の女神”の正体だ!!!」

そしてカイも私に続いて名乗りを上げる。

………なんか、ローブと仮面一気に脱ぎ捨てるのかっこいいな………
失敗したか………

「我ら2人がついている限り我が軍には敗北は無い!!!全軍我らに続け!!!!!!」

そこまで言うと一度は動揺が広がっていたものの、堰を切ったような大歓声が巻き起こった。

全軍の士気は最高潮だな。

あとは盛大に暴れるだけだっ!!!

「行くぞ！！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、契約に従い、
我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが
！！！！」

……

……

…

大戦は終結した。

ゼクトは死んでしまった。

私にとっては親しくなった者の初めての死だ。

……柄にもなく感傷的になってしまった。

私とカイは大戦を終結させたとして、世間から疎まれる存在から一躍英雄扱いとなった。本当に大衆とは現金なものだ。

私達は、戦争終結の記念式典を終えた後、紅き翼のメンバーと別れ再び旅を始めた。

また会うことを誓い合って……

S i d e O U T

大戦編（後書き）

ってことで、一気に大戦編終わらせました！。

正直あんましいじるところないし…

アルはなんか男前になったな。私の中では結構好きなキャラです。エヴァ様の新しい一面も引き出してくれましたからね（笑

さてと、どうやってエヴァに登校地獄をかけるか。それが問題だ。

カイの仮面と異名ですけど、思いつきり黒さんからパクってきました。DTBいいですね。あの鍋さばきにあこがれるう〜。

こんな駄文でも読んでくださっているかたありがとうございます！
まだ続くと思うのでまたよろしくおねがいます！

麻帆良学園（前書き）

えらい駆け足だなあとおもった。

正直下手に書くと、後で大変なことになりそうで…

では今回も脳内補完お願いしますね！！

麻帆良学園

結界を破り進入する。

おそらく中は、突然の緊急事態に慌てていることだろう。

だが、夜は侵入者達の世界、だれにもとめられることは、無い。

目標の地点に到着。あとは目的を果たすだけだ。

一気に進入。そしてターゲットの首筋に爪を突きつける。

「幸せになって随分とぬるくなったな。なあ、そうはおもわないか？」

ドタドタと慌しい足音の数瞬の後、

「「「「長!?!?!?!」」」」

部屋に入ってきた者たちが、一様に驚きの声をあげる。

殺気立つ部下を、長が手で制す。

「随分な訪問の仕方だね…。出来ればその爪をどかしてもらえると嬉しいんだけど、カイ？」

「このままでは話づらいしな、いいだろう。」

「フフン、ぬるくなったことを否定はしないのだな？詠春。」

「エヴァも手厳しいね、相変わらず。」

カイ・エヴァ 詠春
襲撃者と長との間に緩んだ空気が流れる。

「お、長！この者たちは一体！？」

状況がわからない部下達が長に質問を飛ばす。もちろんこちらは警戒を解いていない。

「この2人は私が招いた友人です。これは彼らなりのジョークでしょう。心配ありませんよ、もう下がっても大丈夫です。」

その言葉をきっかけに、納得をしていない部下たちが渋々といった様子で長の部屋から退出していく。

「まったく、私にも今は立場というものがあるんだ。こういうのは部下に示しがつかなくなるから勘弁して欲しいんだが。」

「ははっ、そう怒るな詠春。久しぶりだな！」

「私達が別れて7年だったか？久しぶりだな詠春。しかし総本山がこんな様では、日本の陰陽道の先は暗いな。」

「本当に遠慮がないなエヴァは。」

そういつて苦笑する詠春。

「それで？俺達を呼び出したんだ、なにか用があるんだろう？」

「娘を自慢したかっただけ、とかめかしたらクビリ殺すぞ？」

「ふふ、久しぶりに友人に会いたかった、というのではダメかい？」

「ふっ、及第点だ。それで、本当の理由はなんだ？」

「私のお義父^{とっ}さんが優秀な警備員が欲しいと言ってきてな。お義父さんは麻帆良学園の理事長であるとともに、関東魔法協会の会長でもあるんだが、いかんせん今は西と東があまり友好的とは言えない状況でな……。」

そこで一度ため息をつく詠春。10歳は老け込んだように見えるのは気のせいだろう。

「お義父さんとしては、これも西と東の仲を取り持つ戦略の一つな

のだろうが、私には逆効果としか思えないんだ。そしてまず第一に西には、東に行きたがる人間がない。私としてはお義父さんの顔もたてないといけない立場でな…。そこで心苦しいが2人に頼みたいと思つてな…。」

「まあ、その、なんだ…。お前も損な役回りだな…。」

板ばさみの状態の詠春に素直に同情するカイ。

「友を政治の駒にするとは随分だな。」

一方あっさり切り捨てるエヴァ。本当に鬼だ。

「まあ、いいだろう。カイも別にいいんだろ？」

「ああ、他ならぬ友の頼みだしな。無碍に断ることもできないさ。しかし、俺達は一応賞金首の身だぞ？そんなやつらが魔法協会の総本山に住み着いてもいいものなのか？」

「ああ、それなら大丈夫だろう。お義父さんは本当に狸ジジイだから。それに…」

そこで一旦言葉を切った詠春。

「少しは苦勞してもらわなくては、ね？」

――――後にカイとエヴァは語る。あ那时的詠春は真つ黒だつた。

その後、カイ達は詠春の子供をみせてもらった。

「ふつ、すっかり子煩悩な父親の顔だな。詠春」

「この子なら目に入れても痛くないさ」

そこで詠春は、”とてもいい笑顔”で

「ところで、二人は子供どうするんだ？」

爆弾を投下した。

「な!？」

「ぶっ!?!」

あからさまな狼狽を見せる二人を、詠春はニヤニヤと笑いながら眺める。

こういう話題には未だに初心なカイとエヴァだった。

そして「詠春はいつの間にか黒くなった」というのが二人の共通の見識となった。

「ところで、こっちは子はなんだ？見たところ鳥族のハーフのようだが？」

「ああ、その子はね…」

そこで詠春はすこし遠い目をして。

「その子羽が白いだろう？白い羽はね、忌み子として遠ざけられてしまうんだ。受け取り先の無いその子を私が引き取ったんだよ。」

「そうか…。」

そこで二人は沈黙してしまう。

『この子は詠春に拾われて幸せだな。』

『ああ、しかし苦悩の道を辿るのはどのみちさけられんだろう。』

『そうだな』

そうして、ふたりは西の総本山を離れた。

……

……

…

「おお、君達があのお有名な”闇の福音”と”黒の死神”か。待って
おったぞい。」

『おい！こいつはなんだ、カイ！』

『俺の記憶が正しければヌラリヒョンという妖怪だ』

念話でよからぬ評価を言い合う二人

「君達にはこの学園の警備員をしてもらいたいのだが、仕事は基本的に夜だけでのう。昼間は基本的にやる事が無いのじゃ。そこでじゃ、君達がよければじゃが学校に通うのはどうかのう？ここは一応学園都市じゃからの」

そういつてふおっふおっふおと笑う学園長ヌラリヒョン

『詠春が狸ジジイと言った意味がわかったぜ』

『ああ、これはたしかに胡散臭さが突き抜けているな』

「君達の正体を鑑みるに学校に通ったことなどないのじゃろ？こつ
いつのもいいと思うんじゃないのう？」

（学校か…俺も死ぬ前は高校生だったんだよな…。もう昔過ぎてど

んな生活だったか忘れちゃったけどな。」

「俺はそれで構わない。エヴァはどうするんだ？」

「ん…私は…。」

（エヴァは迷っているようだ。最近人間に対しても寛容な部分
がでてきたと思っていたが、まだまだ、か…）

『ここは魔法協会の総本山といっても、ほとんどの生徒は”こちら
の世界”を知らないそう。まあ例外もたしかに混じっていること
だろうが、魔法の秘匿もある。そうあからさまな輩はいないと思っ
ぞ？それに平和なぬるい世界ってやつも案外いいものかもしれない
ぜ？』

そう念話を送るカイ。

エヴァはそれでも少し迷ったようだが、やがて決心がついたのか

「ああ、わたしも学校に通うことにする。」

そう言ったのだった。

カイ達は中学校に編入した。ちなみに今は5月だ。

エヴァは普段の姿で、カイは年齢詐称薬を使っている。

新学期がはじまって1ヶ月という時期に編入してきた為無駄に視線
を集めてしまったが、暫くすればそれも収まった。

クラスといえは、もちろんエヴァとカイは同じだったが、そこにはタカミチもいた。

タカミチをクラスではじめて見た二人は揃って「あんの狸ジジイめ…」とつぶやいたという。

タカミチはエヴァに別荘の借用を申し出た。そして俺達に組み手の相手を。

「別荘なんか借りてどうすつもりだ？クックック、大方予想はつくな。」

「僕は魔法の詠唱ができないからね。咸卦法を修得したいんだ。」

「咸卦法なら俺が出来るぞ？教えてやろうか？」

「いや、咸卦法は自分との勝負だからね。カイも教えることが無いんじゃない？」

「おう、よくわかってんじゃないか。」

「それに僕の師匠はガトウさんだからね。あ、組み手はしてくれよ？」

「（組み手をすれば教えることにはなるがな）ガトウが聞いたら泣いて喜ぶセリフだな。」

「クックック、あのガトウが泣いて喜ぶなんてところ、カイには想像できるのか？私を笑いすぎで窒息させないでくれ！」

「師匠ひどい言われようだな…。」

……カイたちが高校1年になったとき

「ナギが死んだらしい。」

「!?!? そ、それは本当かカイ!?!? あのバカが死ぬなんてよっぽど
どことがない限りないぞ!?!?」

「詳細は良く分からない。ただ死んだ”らしい”と聞いた。」

「クツ…あいつのことだ、そのうちひょっこり姿を現すさ。」

「そうだな。」

カイは更に続ける。

「……………タカミチとガトウのほつも相当やばいことになってい
るらしい。」

「な!?!?あの2人もだと?そういえば最近タカミチを見ていなかった

たな。」

「あいつらは最近秘密裏に行動していて消息がつかめないんだ。おかげで助けに行くこともできない…。」

「待つしかないのか。」

「ああ。」

……結果は最悪だった。

「そうか、ガトウは死んだか…。」

「僕がもっと強ければ。師匠も死ぬことはなかったのに！」

「自暴自棄になるなよ、タカミチ。何もできなかったのは俺達も同じだ。それより、タカミチはガトウに頼まれたことをしっかりとやっつてやれ。」

「でも！それはアスナちゃんから今までの記憶を消す…師匠の記憶を消すっていう。」

「ガトウの最後の願いだ。叶えてやるのが弟子の務めというものだろう？タカミチがやらないというなら、私がやってしまっても構わんが？」

「……………僕がやります。」

「そうか。」

「アスナちゃんは、絶対に護りきる。その為にも僕はつよくなる。」

「ああ、がんばれよ。」

時は流れて、カイ達は大学も卒業した。

「なんだジジイいきなり呼び出して。」

「ふおおおお。なに、これからの君達についての話でもしておこうとおもったのう。」

そうして、カイ達と共に呼び出されていたタカミチをまず見て。

「タカミチ君は教師になるんじゃないよな？」

「はい。そうでもしないと麻帆良学園には居られませんからね。」

「別にそんなことはないんじゃないのう。それでカイ君はどうするんじゃない？」

「俺も教師をしようかと。」

「ほう！それはそれは、理由は気になるところじゃが。それにしても都合がいいことじゃ。」

「理由はただの気まぐれですよ。それより、都合がいいとは？」

「まあ、それはあとで話すこととしてじゃ。それでエヴァはどうするののう？」

「ちょっとまってジジイ！なんで私だけ呼び捨てなんだー！！」

「そりゃあ、お主わしに対しての尊敬が足りんし。老人は敬うもの

「じゃよ？」

「私は600年は生きているんだがな？まあいい！私は教師などせんど。教えるのは向いていない。」

(…そんなことはないんだけどな。ただ、教えるのはうまいんだけど、エヴァはスパルタ過ぎるんだよな…。これは言わぬが華だよな…。)

「かと言って日中一人で過ごすのも暇で仕方ない。ジジイ！何か楽で、退屈しないものはないのか！」

「わしは名前は似ているが、ドラ もんじゃないんじゃぞ！？そんなホイホイ出せるもんでもないわい！」

「ツチ、つかえねえジジイだ。」

「まあ、エヴァそう言うなって。とりあえずは、さつき都合がいいって言っていた件について聞きたいのですが、学園長？」

「カイ君は良識派じゃのう。実はのう、今年から中学にあがるクラスで、かなり個性的なクラスがあつての。そのクラスを抑えられるような教員が欲しかったところなんじゃよ。まあぶっちゃけ、わしが固めたのが原因なんじゃがの。」

そういつてふおっふおっふおと笑つ学園長。

「学園長、ふざけてると殺りますよ?」

「ふえ!? カイ君がグレた!? …真面目な話じゃが、強い力は互いに切磋琢磨させるのがいいとおもつてのう。そこで、そのクラスの担任はタカミチ君にまかせて、君達二人にはもう一度中学生をしてもらおうと思つておつたのじゃ。」

「なるほど、でも俺が教師になるのがどうして好都合なんですか?」

「君が教師になってくれるなら、副担任としてタカミチ君をサポ―トしてもらえるとおもつてな。ほれ、タカミチ君は出張が多くなりそうじゃからの。」

タカミチはそこで苦笑する。

「それに、そのクラス女子中じゃし。」

「ぶっ！？学園長、俺をそんなところに放り込もうとしてたんですか！？」

「ふおっふおっふお、どんな理由をでっち上げようか悩んでおったところなんじゃよ。わしとしては女装させるのも、おもしろいかなと思っておったのじゃがのう。ってカイ君！？なんじゃその魔力は！？わしそんな力で攻撃されたら死んでしまいかもしれんぞい！？」

「学園長、少し…頭冷やそうか…？」

「.....」

一人の老人の叫び声が学園中に響きわたったとき。

「ところで、私はまだ中学生をまたやることを了承していないんだがな……。まあ、カイが居るなら別にかまわんのだけねど……。」

エヴァは蚊帳の外で少しへこんでいた。

麻帆良学園（後書き）

登校地獄やめました。

普通に最強状態エヴァでいいやん！！！！ってなりました。

とりあえず、しばらくバトルが無いだろうからかなり安心しております。

タカミチ周辺の過去話って原作で語られていましたっけ？

エヴァと同級生だった〜っていうのと、アスナの記憶で垣間見たガトウの最期あたりから推測して今回はかきました。もし語られるぜばかやろう！！！！ってのがありましたら、優しくおしえてくれるととても嬉しいです。

あと刹那の部分もあいまいですけど、目を瞑って欲しいかも？

では、また次回！！！！

まぼらの日々（前書き）

感想、ご意見励みになっております！ありがとうございます！

野菜坊主はまだ出番がもらえそうではないですねー。

では、今回も脳内補完でおねがいします！

まぼらの日々

Sideカイ

今日は新学期だ。

要するに俺の教師としての第一歩だ。

今日はばっちりスーツで決めている！…といってもいつもスーツな
んだが。

タカミチは白のスーツだった。こいつもいつも通りだな。

「さて、学園長のいう”個性的なクラス”とやらはどんな具合かね。

」

「なかなか豪華なメンバーなんじゃないかな？カイも会ったことのある子はいるよ。」

「そうなのか？それじゃ行くか。こづいづのはまずは担任からだよな。」

「ふふ、僕だつてこれくらいのトラップには気が付くよ。」

そういって、ドアに挟まっている黒板消しに目配せするタカミチ。

(フツ、若いなタカミチ。その甘さを後悔するがいい！！！)

「そうか！んじゃ派手にいってこい！！」

そういつて、ドアを開けて背中を”かなり強く”押してやる。

「え？ちよ！カイ！？」

ガッ

ゴンツ ガボン ぐるぐるぐる どん！！！！

「あっはっは！傑作だぜ！タカミチ！！！」

S i d e O U T

S i d e ア ス ナ

なんだろうこの光景は。

今日は高畑さんが新任教師として私のクラスの担任になるって聞いていたから、すごく楽しみにしていたのに！

高畑さん、いや高畑先生はいま、畏に掛かったせいで、頭にバケツをかぶせて教卓に激突して転がっている。

ドアのところではそんな高畑先生の様子をみて大笑いしている男の人がいる。

男の人の格好は黒いスーツ、髪は黒、目は鮮血みたいな紅だ。爽やかなのに、どことなくやんちゃな感じがする所謂イケメンだ。

どうやら、あの人のせいで高畑先生は畏に掛かったみたいだ。それをあんなに笑うなんて！あの人は敵ね！！私の中のブラックリストに深く刻み付けておくわ！！

S i d e O U T

S i d e カイ

まさかここまで盛大に引つかかるとはな。

案外ウケ狙いに走ったのか？

と、タカミチが非難の声をかけてきた。

「ひどいな、カイ。知っているなら教えてくれてもいいじゃないか。」

「己の未熟を呪うんだな、タカミチ。それより自己紹介だ。」

「ああ。」

タカミチが改めてクラスを見渡している。

「締まらなくてすまないね。僕が今日から君達の担任になった高畑・T・タカミチだ。みんなよろしくね。」

クラスから「おお〜」と歓声があがる。

タカミチはなんか頼れるオーラがでているからな、貫禄ってやつか？

次は俺の番だな。

タカミチに習い、一度見渡してみる。

確かに見知った顔がちらほらいるな。

エヴァがニヤニヤしてやがる、そんなにおもしろいかよ。

「副担任になった坂本カイだ。担任のタカミチの補佐をすることになる。みんなよろしくな。」

そこまで言うところから、「かつこいいー!!」「とか「わかい

「!!」といった黄色い歓声があがる。こっぴつのも悪くないな。

「俺のことはカイと呼んでくれ。普段坂本と呼ばれることがなくてな、なんだかむずがゆいんだ。」

「はい」と元気よく応えるクラス。ノリがいいクラスだな。

そして俺達はすぐにクラスのみんなに取り囲まれ、質問の嵐にあつた。

「はいはい、インタビューならこの私、朝倉にお任せだよ!!」

一人の女の子がボイスレコーダーを片手に質問をしてくる

「まず先生達の年齢、趣味、特技、付き合っている人の有無からお願いします。高畑先生からで。」

「年齢は30前後かな、趣味はタバコ…、特技とは違つかもしれないが、人よりは体力があるよ。付き合っている人は居ないよ。」

またしても「おお〜」というどよめき。アスナちゃんはなんか狂喜乱舞している。

「次、カイ先生は？」

「年齢は秘密だ、各自勝手に想像してくれ。（だれも700歳のジジイだとは思わないだろうけどな）」

「おー、先生からはなにか重大な秘密のにおいがするよ？要追跡調査だね。それで次は？」

「趣味は、空を眺めること、武芸を修得すること。特技は散歩だ」

「先生は武芸やってそうには見えないのにね。それにしても特技が散歩って言うのも変だね！さて、それでは肝心な付き合っている人はいるのかな？」

「ふっ、それについてはノーコメントだ。」

一気にクラスが沸いた。自分の学生時代を思い出し、女子は本当にこの手の話題が好きなんだと再認識する。

この後もいろいろ質問され、いくつか回答したところで授業に入った。

ちなみに俺は授業していないが、タカミチの見学をしている。お手並み拝見といったところだ。

予想以上にタカミチは教えるのがうまかった。タカミチは教える才能あるな。

タカミチの授業を見学し終えて、廊下を歩きながらクラスの情報を整理する。

確かに、このクラスはかなり個性的だった。だが、暴走をするようには見えなかった。

力を持っているものは、それぞれに自分の力を自覚している。まず暴走することは無いだろう。

危ないとすれば、詠春の娘とアスナちゃんか…。

あれは自分のことを自覚していないからな。

といつても俺もアスナちゃんのこととはそんなに深く知っているわけでも無いんだがな。

詠春の娘については、詠春がこちらの世界にはかかわって欲しくないといつていたが、さて、どうなることやら。

「坂本先生」

噂をすれば影というやつだ、振り返ればアスナちゃんがいた。

「俺のことはカイって呼んでくれっていったら？」

「むっ、カイ先生はどうして高畑先生を畏にかけたんですか？」

ふっ、これは…。

「あんなのはじゃれ合いさ。それより神楽坂はタカミチのことが好

きなんだな。」

「え!?!あ!いや、その…!」

「神楽坂は分かりやすいな。でも素直ないい子に育ったみたいだな。」

「え?それはどういう?」

「俺なら神楽坂に協力するぞ。タカミチのことがんばれよ?」

そうやって、頭をなでてやる。

「は、はい!ありがとうございます!」

そう言って、駆けてどこかへ行ってしまった。

「やれやれ、無駄なことを言うものじゃないな。アスナちゃんが素直でよかった。」

「あれは”単純”っていうんだよ。あんな簡単な話題のすり替えに引つかかるやつなんて、まれに見るバカだな。」

今のやり取りを隠れてみていたのだろう、エヴァがそこにはいた。

「エヴァは容赦ないな。」

「ふふん、まあな。」

「んで?エヴァ、クラスの一員としてみた彼女達の評価は?」

「まあ、大した危険も無いだろう。クッククク、むしろ適度に刺激があつて退屈しないくらいだ。」

「というと？」

「超鈴音と葉加瀬聡美は中々興味深いな。いきなり私に協力を申し込んできたぞ？なんでも科学と魔法の融合だ！！とかなんとか言っていた。」

「それはまた、アレだな。まあ一応警戒くらいはしておくか。」

「そうしろ、せいぜい私はカイとタカミチが奮闘する姿をたのしんでいるぞ。」

「フツ、期待に添えればいいんだけどな」

無事新任教師としての1日目を終えた。

タカミチと一緒にクラスの感想などを言い合っていると、クラスの

糸目の子がやってきた、確か長瀬楓だったかな？

「先生たち2人にちょっとついてきて欲しいでござるよ。」

そう言われついていくと、クラスで歓迎会をやってくれるようだった。

ふふっ、嬉しいことをしてくれる。

思いのほか教師というのはいい役職かもしれないな…。

S i d e O U T

まぼらの日々（後書き）

教師始めました。

これが一番クラスに関わらせるにあたって、当たり前障りが無いかとおもいました。

ねぎ坊主はいつになったら出てくるんでしょうかね…

化物語 (前書き)

題名があれだな…。

とりあえず、書きたいこと詰め込んだら今までで一番長くなった!!

ちょっと作者の頭沸いてたかもしれない…。

今回も脳内補完でおねがいます！

化物語

Side 刹那

私は今年から麻帆良学園に通うことになった。

このかお嬢様を護衛する為だ。

幼い頃にこのちゃんを守れなかった。

しかし未だ未熟といえど、あの頃には比べようもなく私は強くなつた。

私はこの身を犠牲にしようとも、このちゃんを守りきってみせる！

クラスに入った私を迎えたのは、驚いた顔の このちゃんだった。

「せつちゃんやないか。せつちゃんも今年から麻帆良学園に通うことになったん？」

「おはようございます、このかお嬢様。お察しの通りでございます。」

「そんな、よそよそしくせんでええよ。昔みたいにこのちゃんつてよんでや。」

「いえ、そのようなことは出来ません。それでは私は授業の準備がありますので、これで。」

適当な理由をつけて、このちゃんの前から逃げるようにして離れる。

このちゃんは、さびしそうな顔をしてこちらを見ていた。

お嬢様を寂しからせるのは本望ではないが、私は陰ながらお嬢様を守るのがよいのだ。

席につき、クラスを観察してみる。

学園長から聞いていた通り、”こちらの世界”に属している者も少ないながらもいるようだ。

それにしても、あの人形のような少女はなんだ？

可愛らしい外見とは裏腹に、明らかにこの空間の中で異質な空気を放っている。

あの子はいつたい？

彼女のことについて分かったのは、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルという名前で、私と同じで中学になると同時に麻帆良学園にやってきたらしい。ただ、分かったのはそれだけだった。

あれだけ異質な雰囲気を放っているのだ、あとで刀子さんにも聞けばすぐにでも分かることだろう。いまは、警戒を怠らないようにするに留めよう。

なんだ、このクラスは？

教室に入るなり畏に掛かり転がった担任と思わしき人と、それを見て大笑いしている黒いスーツの男。問題は黒いスーツのほうだ。あの黒いスーツの男もエヴァンジェリンさんと同じくらい異質な雰囲気を漂わせている…。

一体なんだというんだ。

今はクラスで歓迎会をやっているようだ。

私は騒ぎの中心へは近づかず遠巻きにして観察している。

あの黒いスーツの男、もといカイ先生は、実に楽しそうにクラスの方々と談笑している。

そしてそれを、私と同じく遠巻きに眺めることを決め込んだらしいエヴァンジェリンさんがニヤニヤと眺めている。

あの様子からすると、あの二人は何かしらの関わり合いがあるのみ

てまず間違いないだろう。

ふと、私が見ていたのに気が付いたのか、エヴァンジェリンさんがこちらをみてニヤリと嗤わらった。

エヴァンジェリンさんが近づいてくる。私としてはあまり関わりを持ちたくはなかったが、仕方ないだろう。

「私の事が気になるのか？桜咲刹那」

わたしの名前を知っている…？

「いえ、エヴァンジェリンさんは歓迎会に参加なさらないのかと疑問に思っていただけですよ。」

「私にとってはこれはただの暇つぶしに過ぎんからな。このクラスにはあまり興味は無い。」

「それはどう…？」

「クッククク だがな、クラスには興味は持てんが、貴様は中々面白そうではないか？」

「はあ…。興味を持っていただけならば光栄ですが。私のどこが面白いのでしょうか？」

「フフツ、いろいろと、な？歓迎会が終わったようだな。それじゃ私はこれで失礼するよ。後でまた会おうではないか。」

そういつて、エヴァンジェリンさんは私の前を去っていく。後で会うというのは、きっと魔法関係者同士の顔あわせのことだろう。

と、そのまま去ると思われたエヴァンジェリンさんは

「ああ、そういえば綺麗な黒髪と黒い瞳だな、桜咲刹那？」

「！！！ッ」

そんな言葉を残していった。

あの人は明らかにわたしのことを知っている。でなければ、あんな

言葉を残していくことなどありえないだろう。
エヴァンジェリンさん…一体何者なんだろう…。

魔法関係者同士の顔合わせのために広場へとやってきた。時刻は5時半だ。

集合は6時という話だったが、私は自分が紹介される側ということもあって、早めにやってきた。

それでもちらほらと人影がある。
広場に入るとき人避けの結果があったことから、ここにいる以上はこの人たちはみんな魔法関係者なのだろう。

その中に、刀子さんの姿もあった。

「こんばんは、刀子さん。すこし聞きたいことがあるのですが。」

「あら、刹那。どうしたの？聞きたいことって？」

「私のクラスにいた、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという生徒について聞きたいのですが。エヴァンジェリンさんは今年からこの学園に来たという話ですし、詳しい話はきけるとは思っています。…どんな些細なことでもいいんです！教えてください！」

「ああ、あなた あのクラスになったのね。どうせ学園長が情報操作でもしたんでしょうけど…まず彼女は私より前からこの学園に

いるわよ?」

「…は?確か刀子さんは6年前に東に嫁いでいらっしやったのでは?エヴァンジェリンさんはどう見ても、10歳程度でしたが…」

「その話はやめてくれないかしら、刹那? 彼女と坂本カイ君は10年前からこの学園にいるそうよ。彼、あなたのクラスの担任でしょ?」

「(う…、この話は刀子さんの地雷だったか) やはりカイ先生もエヴァンジェリンさんの関係者だったんですね。」

「ええ、そして彼女達は吸血鬼よ、それも真祖のね。いわゆる最強種よ。」

「!!!…ッ なぜそんな危険な存在を放置しているんですか?」

「彼女達はこちらが手を出さない限り危険はないわ。それに事件を起こすならもうとつくの昔に起こしていると思わない?10年もこの学園にいるのよ?」

「し、しかし!」

「刹那、あなたは少し張り詰めすぎているわね。張り詰めた糸はすぐに切れてしまうものよ?時には余裕を持ちなさい。」

「…はい。」

…なんということだ、そんな化け物だったとは。

刀子さんは危険はないと言っていたが、やはり不安だ…。

カイ先生、高畑先生、そしてエヴァンジェリンさんが現れた。
3人は本当に仲がよさそうに談笑しながら歩いてくる。

- - - その様子が気に食わない。

高畑先生は、どう見ても普通の人間だ。なぜあんなに仲がいいのだ。
それに周りの魔法関係者だ。この人たちにも危機感というものはな
いのか？

ゾクッ…

悪寒がした。気が付けばエヴァンジェリンさんがこちらを見て嗤っ
ている。

- - - あの人に見られると落ち着かない。焦ってしまう。アレは危
険だ。

「それでは集会を始めるとしようかのう。」

その声でハッとした。気づけばいつの間にか学園長がやってきてい
た。

私の手は夕凧にかかっていた。

私は今何をしようとしていた？

「それじゃ今年から学園にきた者から自己紹介してもらおうかの。」
顔合わせが滞りなく進んでいく。

新顔の者が終わると、古株の者の挨拶がはじまり、それももうそろそろ終わるようだ。

「さて、自己紹介もおわったようじゃの。魔法関係の問題は互いに協力し合って解決してほしい。………これでおしまいというのも、ちと味気ないのう。」

なんだ？学園長が一瞬エヴァンジェリンさんを見たような……。

「新人の力をみるという意味でも、ちよつとした組み手でもしてもらおうかの。そうじゃのう……。新人からは刹那君がよいかの。そして……相手はエヴァでいいじゃろ。」

「なっ!?!?」

学園長は何を言い出しているんだ!

周りの古株の人間たちも騒いでいることから、これが異常な事態だということがわかる。

「ハツハツハ、指名されてしまったよ。私としては本意ではないが、学園長の言うことだ聞かないわけにはいかないよなあ?」

「……………」

エヴァンジェリンさんが本当に楽しそうに笑いながら、本意ではないと言う。

…これはチャンスかもしれない。この人はきっとこれから私の障害となる。しかし今乗り越えてしまえば恐れることも、無い!

「どうした、かかってこないのか?私のことが気になっていたのではないのか?気に入らなかったのではないのか?その刀で私という存在を試してみろ!殺して見せろ!桜咲刹那!」

敵は決して小さくはない。しかし私の剣は負けることはできないのだ。お嬢様を守るために。

「神鳴流、桜咲刹那。参る!」

私はいま持てる全力で刀を振るっている。しかし全てが避けられ、流され、いなされる。まるで柳に風だ、手にはいつの間にか鉄扇が握られている。
必死な私に対し、エヴァンジェリンさんはまるで余裕だ。始まって以来ずっと笑っている。

「クツクツク、初撃から本気でかかってこないとは、私もなめられたものだな。ところで貴様は進んでこの学園に来たそうだな？」

何を言っている？私とはとくに全力だ。それにその話が今なんの關係がある？

「幼い頃守りきれなかったお嬢様を守るためか。陳腐な美談だな。それに傲慢だ。」

そこまで言ってエヴァンジェリンさんは私を投げ飛ばす。

「クツ… お嬢様をお守りすることのどこが傲慢なんです！私にと

「つてはお嬢様を守る事が全てです！私はそのために強くなった！」

受身を取り、反論をする。

「フンツ、他人に依拠した強さなど本物の強さではない。それにしても、クツクツク、全てと言ったか。全ては重いぞ、なあそうは思わんか？」

エヴァンジェリンさんは攻撃をかわすだけで、まだ攻めてこない。攻めるならいまいかない。

先ほど以上の速度で剣戟を繰り返す。しかしそれも全てかわされる。

「そう慌てるな、桜咲刹那。貴様が近衛このかを守るのは自身の後悔からだろうか？貴様はお嬢様を守ると言いつつ、その実過去の自分の過ちを清算して、自分を守りたいだけなんじゃないのか？それに、貴様は守られる側の事を考えたことがあるのか？」

この人の話に耳を傾けるな。攻撃に集中しろ！

「無条件に何の見返りも求められず与えられる、人ひとりの”全て”という想い。そんな重いものを与えられた人間はどうするのだ？フフツ　あまりの重さに呆然とするかもしれない？　それに貴様のそれは”私が守ってやる”という押し付けなんだよ。これを傲慢といわねば、何が傲慢だというのだ？」

「わ、私はそんなつもりは無い！」

「ではなぜ近衛このかを拒絶した。ふふん、貴様は本当に傲慢だな。」

それはこのちゃんを陰ながら守るため…

「さて、それではそろそろ私も攻めるとしよう。本気でかかってこないならば命の保障はせんぞ?」

それから、組み手なんかではなかった。

ただ一方的な暴力。エヴァンジェリンさんは圧倒的な化け物だった。

全身ポロポロで、手足に力も入らなくなってきているが負けを認めるわけにはいかない。こんなことで負けを認めていてはこのちゃんを守れない。

「これだけ痛めつけてもまだ力を隠すか…。死にたいのか?」

「もうやめるエヴァンジェリン!こんなのはただの拷問じゃないか!…!」

私の状態をみて、他の魔法関係者が騒ぎ出す。

「もう見ていられない!みんな、止めるぞ!」

「やれやれ、外野がうるさいな。カイ!」

「わかってるって。…先生方、止めたければ俺を倒してからにし

てくれないか？」

カイ先生が止めに入ろうとした先生達をさえぎる。

「なっ！？桜咲君は君の生徒だろう！なぜ邪魔をするんだ！」

「これも大事な教育の一環ですよ。それに忘れているようですが、俺達は悪い魔法使いですよ？」

「クツ…」

それで先生達は黙った。止めに入った先生だけではどうすることも出来ないと思ったようだ。

「静かになったようだな。ところでさっき貴様は、私がカイとタカミチと楽しそうにしゃべっているのを睨んでいたな？何か気に障ることもあったか？」

また関係の無い話をするのか。もう止めてくれ…。

「普通の人間のタカミチが、私達みたいな化け物と仲良しだったのが気に食わなかったんだよな？クツクツク、その感情はなんだったんだろうな？怒りか…？それとも嫉妬か？羨望か？」

エヴァンジェリンさんがニヤニヤと笑っている。

「化け物は人間と仲良くしてはいけないと誰が決めた？ 化け物の力を恐れる人間、正義を気取った偽善者、そういった輩に私達バケモノは排斥されるものだがな、それでも共に在ることが出来る者もいるのだぞ？ 一般論的な正義など無視しろ！ 自分がどうしたいのかに素直になっってみせる！」

「ゴホツゴホツ…あなたに…何がわかる！」

クツ…しゃべるのもきついが、言わなければならない…！

「既に自らの望むものを手に入れているあなたに、自分が化け物だと知られることで失ってしまうかもしれないという恐怖が分かるのですか！！たとえ共にいる事が叶っても、私という化け物と共に居ることで不幸になってしまいかもしれないのですよ！！」

そう言つて、自らが化け物であるという証明でもある白い翼をだす。たとえ届かなくとも、次の一撃に文字通り全力を注ぐ！

「フンツ、やっと本気か。 それにしても貴様はバカだな、そして臆病だ。 全てをかけてもいいと思つている人間が、自分を化け物だと知つて離れていくような器の小さい人間なのか？ それに、不幸がなんだ。 そんなものを覆せるほどの強さを手に入れて見せる！ 押し付けの守りを為すための強さではなく、共に生きるための強さを手

に入れてみせる！！！！」

――全力をかけた攻撃を仕掛ける。

――そして自分の素直な気持ちを叫ぶ

「私はこのちゃんと共に生きていつ……!……!……!」

「フッ　なんだ、ちゃんと言えるじゃないか　刹那!」

そこで私の意識は途切れた。

S i d e O U T

化物語 (後書き)

ってことで刹那回でしたー。

途中で視点変更入れるはずだったのに、いつの間にか全部刹那視点でした。死にたい。

原作では、刹那に剣か幸福かの選択を迫ったエヴァですが、ここではカイとの出会いと紅き翼での経験などから、共存してみせる！と言っています。

しかし、このエヴァノリノリである。

書いている途中ずーっと悩んでいたけれど、”間”の取りかたをうまくしないと読みづらいし、作者が大事だと思っているところでも強調できないーというパターンになってしまっ。文才をどうかください。

では次回も読んでくださるとうれしいです！

踏み出す一歩（前書き）

10万PV&i万ユニーク達成!!

この話数でやっとかよって思った人、そっとしておいってください。
作者はデリケートです。

今回はフォローカイかな？（誤字にあらず）

踏み出す一歩

「…う…ん、あれ…ここは…？」

刹那は目を覚ました。が、意識は未だにぼやけている。

「おう、起きたか。」

「カイ先生…？あれ、私はたしかエヴァンジェリンさんに負けて…。

」

「ああ、あの後意識を失った桜咲をうちに運んだんだ。さすがにあれだけボコボコにされて、意識を失った娘を女子寮に放り込むわけにはいかないからな。ちなみにケガは大体治しておいたから心配するな。」

「そうですか…。ありがとうございます。」

「いや、元はといえはうちのエヴァが調子乗りすぎたせいだからな。これくらい当然さ。」

「……………」

しばし沈黙が世界を支配する。

と、その沈黙を先に破ったのは刹那だった。

「カイ先生にお聞きしたいことがあるのですが。」

「俺が話せることならば答えるぞ?」

「なぜエヴァンジェリンさんは今日始めて会った私のことをあんなに詳しく知っていたのですか?」

そこでカイは少し考える風をして

「ああ…、そりゃ自分がまったく知らない人間が、自分が秘密にしていることまで知っていたらホラーだよな。でもネタバレしてしま

えばそんな大したことでないんだがな。答えは単純、エヴァと俺は詠春の古い友達なんだよ。」

「長と…?」

「ああ、ついでに言うと 厳密には俺達は初対面ではなかったよ。実は桜咲が詠春に引き取られてすぐの頃に会っているんだ。まあ1歳やそこらの子供が覚えてるわけが無いんだがな。」

そこでカイは少し間をおいた。

「あのときに、桜咲の翼の意味を知ってな。少し思うところがあった俺達2人は、たまに詠春に桜咲の話聞いていたのさ。だから近衛が溺れたときのこととかも知っているし、その後のことや、桜咲が進んでこの学園にきたっていうことも知っている。」

刹那は別段驚いたということもなく話を聞いている。

「そうだったんですか…。その、言いにくいことなのかもしれないですが、”思うところ”というのはなんだったんでしょうか?」

「それについては詳しくは言うことはできないんだが…。俺はともかく、エヴァは当然享受できるはずだった幸せを奪われているんだ。そして不幸を背負って生きてきた。まあ少し状況が違うが桜咲も生まれつきの不幸を背負っているからな、俺達としては気になったっ

てわけだ。」

と、そこでカイは思い出したように。

「そうそう、大事なことを忘れていた。今日の組み手なんだがな、あれエヴァが学園長を脅してやらせたんだよ。なんでも今日の朝、桜咲が近衛を拒絶したとかなんとか言って結構エヴァが怒っていたな。『なぜすぐそこにある幸せを拒絶するのだ！』とかなんとか。

まああいつとしては、手に入れられる幸せを手放す奴が許せなかったんだろうな。そのことを伝える手段こそ相当乱暴だったが、そういう事情があったんだ、エヴァのこと恨まないでやって欲しい。」

そうしてカイは苦笑する。

「いえ…、私も悪かったのです。それにエヴァンジェリンさんのおかげで私はもう迷うことはないでしょう。感謝こそすれ、恨むなんてとんでもないです。」

「そうか…。ありがとう、桜咲はいい子だな。強くなれよ?。」

そういつてカイは刹那の頭をクシャクシャと撫でてやる。

「はい。」

そう答える刹那は頭を撫でられてどこか恥ずかしそうにしていたが、
憑き物がとれたような晴れやかな顔をしていた。

……

……

…

翌朝。

刹那は夜も遅いということでもカイの家に泊まっていた。
そしていまの時刻は7:30、ちなみに平日である。

「いつまで寝ておるか！このばかものが――！――！――！」

ドーン！！

突然の衝撃に未だ夢の中だった刹那は飛び起きる。

「ふえ！？なんだ？敵襲か？…エ、エヴァンジェリンさん？あれ…
確か私はカイ先生の家に泊まったはずでは？？」

大量の？を頭に浮かべる刹那に対して、エヴァは言い放つ。

「吸血鬼の私より惰眠を貪るとはいい度胸をしているな、刹那？
それにここはカイと”私”の家だ！勘違いをするな！！」

「カイと私の家」と言ったところでエヴァの顔が少し赤くなったの

封じてきた。おかげで今では超一流の腕前で、目の前には朝ごはんにあるまじき豪華さのごはんがある。

「っ／＼／＼ な、なんにも言っていないわ！この朴念仁があ！！さっさと食べて学校に行くぞ！！」

（これが最強種といわれる化け物の姿なんだろうか…。ふふっ、なんだか肩の力がぬけるな。）
自然と笑みがこぼれてくる刹那だった。

それから3人とも恐ろしい速度で身支度を整え、なんとか3人もギリギリとはいえ遅刻せずにすんだ。

そして教室に入った刹那を迎えたのは、このかだった。

「おはよう、せつちゃん」

一瞬時間が止まった刹那だったが、すぐに復活し

「お、おはよう…。このちゃん…。」

顔を真っ赤にして、ボソボソとだったが、少女は確かに一步を踏み出していた。

「うん、おはよう せつちゃん!!!!」

このかの顔は本当に嬉しそうな満面の笑顔だった。

「…ふん。やれば出来るじゃないか。」

教室の隅ではそんなことをつぶやいている人がいたとかいかなかったとか。

- - -
- - -
- - -
放課後

「はあ？私の弟子になりたいだとか？あれだけ一方的にボコられて良くそんなことがいえるな。」

エヴァは呆れた調子で言う

「はい！是非とも私を諭してくださいださった恩人であるエヴァンジェリンさんに師事したいとおもいました！」

一方刹那は大真面目である。

「嫌だ。めんどい。」

ばっさりである。

「なっ！！そんな事をいわずに！！」

「大体私は剣術は専門外だ。そういうのはカイに言え。あいつは担任教師だ、丁度いいではないか。」

「何が丁度いいんだ？」

「本当に丁度いい奴だな、カイ。刹那がお前の弟子にして欲しいそうだ。かわいい”生徒”の頼みだ、せいぜい頑張れ。私は超のころへ行く。ではな。」

そういつて、エヴァは行ってしまった。

「あいつ投げっぱなしにも程があるぞ…。」

「あ、あの…それで、カイ先生は私を弟子にしてくれるのでしょうか？」

「あ…。まあ、元はと言えばエヴァのせいだな。あいつの尻拭いは俺の仕事だ。まあいいだろう。ただし俺はスパルタだからな、引き返すならいまだぞ？」

「構いません。私はお嬢様と共に生きる道を選んだのです！なんでも耐え切ってみせます！」

「ふふ、そうか。それじゃ詳しいことは後でログハウスに来てくれ、そこで話す。」

そういつて、去ろうとするカイを刹那が呼び止める。

「あ、あの！カイ先生！…その、弟子になったことですし、私のことはこれからは刹那ってよんでくださいっ／＼／＼」

「お、おう…。（な、なんで顔をそこで赤らめるんだ？）」

.....

「なんですか、学園長？いきなり呼び出したりして。」

「少々困ったことになったみたいでう。」

カイは学園長に呼び出されていた。

「はあ…。と言いますと？」

「昨日のエヴァと刹那君の組み手のことでのう。やはり事情を知らん者からするとやりすぎだという意見が多数噴出しておつてのう。正直に言っ君達に対する不満がかなり溜まっておる。」

「そんなことですか。俺は自分の関係の無いところには興味はあり

ませんよ。かかってくると言つなら叩き潰すまでです。」

「ふう…。カイ君もツレないのう。まあいまはそういう意見があるということだけ頭に置いててくれ。」

「…わかりましたよ。俺も無駄に殺すのは嫌ですからね。それに存外ここは居心地がいい。何か手を打つときは協力しますよ。」

「ふおおおお。やはりカイ君は話がわかるのう。話はそれだけじゃ、もう行ってよいぞ。」

「はい、それでは失礼します。」

「はあ…めんどくさいことになりそうだな…。」

そうカイは一人こちた。

踏み出す一歩（後書き）

ってことで、刹那が弟子になりました。

さて…どうやって絡ませていこうかな…。

ネギはほんとにいつになったら…。

ではまた次回。

そうだ、森にいきつ。(前書き)

今回もやっちまった感が否めないが…

とりあえず、たくさん人数居た場合書くのがきついです。

一部かなりの手抜きが見受けられますが、気にしないで下さい。本
当に願います。

ではござい！

そうだ、森にいこう。

Sideカイ

学園長に呼び出されたせいで帰るのが遅れた。

ログハウスに戻ってみると刹那が家の前で立っていた。…エヴァはまだ帰ってきていないのか。

「悪い、遅くなった。そんなところに立つてなくても、入ればよかったのに。」

「いえ…、さすがに人の家に無断で上がりこむわけにはいきませんですよ。」

「それもそうか。でもこれからは俺達が居なくても入っていいから、鍵もかけてないしな。」

「はあ…。それはわかりましたが、鍵をかけないのはさすがに無用心すぎるのでは?。」

「うちに盗みに入るような輩がいるとおもつか?それに万が一そんな輩がいても、うちは大丈夫だよ。」

………
「コッ

そういつて、ドアを開けた俺に家の中から大刀が振り下るされる。それを人差し指と中指だけで受け止める。

「カ、カイ先生!!」

「大丈夫だよ刹那。それよりチャチャゼロ、お前俺だつてわかつてやっただろ。」

「ケケケ、バレタカ。久シブリニ獲物が来タカト思ツタノニ客人カヨ。」

「そういうことだ。紹介するよ、こいつはエヴァの従者の人形で、チャチャゼロっていうんだ。」

「よ、よろしくお願いします。桜咲刹那といます。」

「ケケケ、御主人ニ内緒デ女ヲ連れ込ムト八大キクデタナ、カイ」

「わ、私はそういう者ではないですっ／＼／」

「刹那、こいつの言うことは大体スルーしていいから。さてと、とりあえず別荘に行くか。ついでだからチャチャゼロも連れて行こう。」

「ナンダ？殺ラセテクレルノカ？」

「殺し合いではないが、闘わせてやる。」

「チッ」

「刹那、ついて来てくれ。」

刹那とチャチャゼロと連れ立って別荘に転移する。

刹那は別荘にかなり驚いていたようだ。簡単に別荘の説明もしてやる。

「よし、早速修行を始めたんだが、改めて刹那の闘いを”視たい”。チャチャゼロと少し闘ってくれないか？」

「わかりました。」

「チャチャゼロには遠慮しないでいいから。あと、闘っている最中ちよつと嫌な感じがするかもしれないが、我慢してくれ。俺と修行するには慣れてもらうしかない。」

「？ とりあえずは、わかりました」

ちよつと分かってない感じだったが、まあいいか。

これは慣れてもらうしかない。

直死の魔眼を開放し、闘っている刹那の”気”を”視る”。

刹那は魔眼を開放した瞬間こそ動きが鈍ったが、すぐに本来の動きを取り戻した。

もう少し長い間鈍るものだとおもったが…素晴らしいな。

「もういいぞ。大体分かった。」

魔眼で”視た”刹那の闘いを評価する。

「その歳にしては素晴らしい気の扱いだ。だがまだ気の流れが不自然なところがある。それにまだ気の練りが足りないな、まだまだできるはずだ。戦技については基礎が固まってからにしよう。」

「そんなところまでわかるんですか？それに、さっきの眼は何だったのでしょうか？すごく嫌な感じがしたのですけれど……。」

「あれは、視えちゃいけないものが視えてしまう眼なんだよ。だから普段は使わないし、刹那との修行でもたまたまに出すか出さないかだから安心してくれ。」

「そ、そうですか。」

あからさまに安心しているな……。まあ死を視られるなんて誰だって嫌だろうがな。

「さて、それじゃ修行といくか。基礎訓練からだ。……とりあえず、俺の攻撃をかわし続けろっ！」

「！……！……！」

いきなり襲い掛かる俺に驚く刹那。

..... 地獄の訓練が始まった。

side OUT

.....
.....
今日は新学期が始まって初めての土曜日。つまりカイが教師になって初めての休日である。

本日晴天なり。そしてカイは今日も散歩まじいしていた。

「エヴァは超と葉加瀬のところ、刹那は近衛と遊ぶとか何とか言っていたな。対するおれは森で一人で散歩……。気にしたら負けだよな?」

「おや、カイ先生ではござらぬか。何をひとりつぶつぶ言ってるでござるか?」

かけられた声は長瀬楓のものだった。

「あれ?長瀬なんでこんな森の中にいるんだ?」

「拙者は、休日になると森に修行にくるのでござるよ。ちなみになんかの修行かは秘密でござる。ニンニン」

「ああ、長瀬忍者だもんな。おれも暇なんだ、一緒に修行してもいいか?」

「せ、拙者は忍者なんかじゃないでござるよ!?!修行といっても主に食材あつめでござるよ?。」

「ああ、構わないよ。よろしく頼む。」

「あいあい」

「とりあえず、岩魚でも取るでござるか。まずは拙者からいくでござる…」

そういつて楓はクナイで岩魚を3匹捕まえた。

「やるじゃないか、さすが忍者だ。(こいつ隠す気ないだろ…)」

「なんの」
「」

「それじゃ俺もやってみるか、長瀬クナイ貸してくれ。(ふっ、生

徒に負けるわけにはいかないな」

カイは5匹岩魚を捕まえた。

「驚いたでござる。カイ先生は忍者でござるか？」

「ふふつ、自己紹介聞いていなかったのか？俺は武芸を修得するのが好きなんだよ。」

「そうでござったな。カイ先生はなかなかの達人でござる。しかし拙者も甲賀中忍として負けるわけにはいかないでござる！！」

(甲賀中忍とかいってるし…。こいつやっぱ隠す気ないな…。)

その後カイと楓は岩魚に始まり、山菜、キノコ、蜂の巣などを勝負にかまけて乱獲した。

「ちょっとやりすぎたでござるな…。」

「ああ…次からは気をつけよう…。」

2人の前には山となった食材があった。

「しかし、カイ先生はデタラメでござるな。あの密度の30分身とか人間業じゃないでござる。」

「そりゃ、人間じゃないからな。俺は吸血鬼だ、長瀬は知らなかったのか？」

そのとき、普段は糸目の楓の目が驚きに広がった。

「驚きでござるな…吸血鬼ってほんとにいるんでござるな。」

「…あれ？長瀬それだけの力持っていて”こっちの世界”のこと知らないのか？」

「こつちとはどつちでござるか？拙者は忍術だけを鍛えてきた人間でござるからな、世事には疎いでござる。」

「そうか…。まあその話は飯でも食いながらするか。料理は得意なんだ、手伝ってくれるか？」

「あいあい」

カイは晩御飯を食べながら楓に魔法の世界のことを話して聞かせた。

「ファンタジーの世界でござるなあ。まこと世界は広いでござる。」

「フフツ、そうだな。少し長瀬が気に入ったよ。これも何かの縁だ、俺と一緒に修行をしないか？まだまだ長瀬は伸びるぞ？」

「（気に入った、でござるか。拙者も気に入ったでござる）唐突でござるなあ。そうでござるなあ…拙者もカイ先生の話聞いて世界に興味が湧いてきたでござる、世界を旅する力をつけるためにも、

そのとき、刹那が教室へ入ってきた。

「あ、せつちゃんや〜。なあアスナ、直接聞いてみるのがいいんちやうんかな?」

「そうね、それじゃ早速」

「おはよう、せつちゃん!」「おはよう、刹那さん。」

「おはようございます、このちゃん、アスナさん…。」

(やっぱり生氣というか、覇気がないわね)

(そやね、気になるわあ)

「あの…どうかしたんですか?おふたりして、そんなヒソヒソと話して。」

「なんでもないえ〜。それよりせつちゃん最近疲れてへん?なんかあったん?」

「そうよ、刹那さん。最近カイ先生と仲いいみたいだけど、それが関係してるの?」

刹那は困った顔をする。

「いえ…、その…カイ先生が激しくて…」

「「…！！！！」」

なにがとは言わない刹那。

(こ、このか！これって！これって！！)

(い、いや…流石に先生やし生徒に手をだすのはないんとちゃうかな？…多分。)

「普段は優しいのに…あの時だけは、人格が変わっているとしたか…はあ…」

(ね、ねえ！これってやつぱり！)

(だんだんうちもそう思えてきた…)

「おはよう。どうしたんだ？人して浮かない顔して？」

「「カ、カイ先生！？お、おはようございます！」」「おはようございます。」

ハモったのがアスナとこのかである。

「お、おう。朝から元気がいいな。あ、刹那は今日も学校おわつたらうちに来てくれ。あと楓にも伝えておいてくれな。」

「わかりました。今日もよろしくおねがいします。」

(な、なんだってー！！)

(呼び捨てだったよ！しかもうちに来てくれて！！それに長瀬さんも？もうわけがわからないよ！)

(落ち着いてやアスナ。とりあえずこれは要調査やね！！)

………

……

…

- - - 放課後

「ってことで3人の後を追っているわけだけど…」

アスナとこのかは、カイ達3人を追跡していた。

「なんであんた達がいるのよー！ー！」

「え？だってアスナたちが面白そうなことしてたし。これはクラスメイトとしてほっておけないよね？」

「『イエッツァー！』『』『』」

そこには、パパラッチ朝倉を筆頭に1-Aの面々がいた。

「どづいうノリよ。…まあいいわ。とりあえずは真相の究明ね。」

カイ達はログハウスの中へ入っていった。

「あそこがカイ先生のうちね。」（アスナ）

「それにしても、ほんとに3人で入っていったアルネ」（クー）

「ふっふっふ、禁断の恋の匂いがするねー。スクープするよー！」

（朝倉）

「そ、そんな不純なもの委員長として認めるわけにはいきませんわ

！」（委員長）

「くくくわくくく」（その他）

「みんなノリノリやわ〜。」（このか）

「でも、家の中に入られちゃうとどうしようもないわね。突入する

？」（アスナ）

「さすがにそれはばれると思うえ〜。」（このか）

「くくくう〜ん」（一同）

「貴様らは人の家の前でなにをしておるのだ…。」

1・Aの面々が振り返れば、そこにはこめかみを微妙にヒクつかせたエヴァンジェリンがいた。

「え？エヴァちゃんの家って…ここってカイ先生の家じゃないの？」

（アスナ）

「フンツ、当然だろう。私とカイは2人暮らした。」

「くくく……………」

「「「「なんだってー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」」」

（刹那さんや長瀬さんだけじゃなくって、エヴァちゃんとも…？てかもっほんとにケダモノじゃない！！）

「騒々しいやつらだな。その様子ならカイに用事なのだろう？とりあえずあがれ。」

エヴァについて1・Aの面々は家にはいる。

「カイは”別荘”か。おい、カイは1時間は戻ってこない。それまで適当に時間をつぶしてる。ただしうちの中をつろちよろするなよ。」

「「「「はい」」」」

「まったく、なんで私がこんなことを…。」

そして1時間後…

「拙者もつだめでござる…」

「私ももう無理です…。」

「なんだ情けないな…。まだ基礎体力の増強が必要だな。」

「「げっ!!!」」

そんな声がしてきた。

「カイが戻ってきたようだな。さっさと用事をすませて帰ってくれ。」

「

「そんなあからさまに嫌な顔しなくてもいいじゃない。」（アスナ）

「あれ、どうしてみんながいるんだ？」

「どーしたもこーしたも!!!カイ先生こそどういふことなのよ!
!生徒3人にも手をだして!人としてどうなの!!!」

「は?いや、なんのはなし?」

「まだしらばつくれるの!?刹那さんと長瀬さんそれにエヴァちやんに、…そのノノノ、こやうしつ…ことしてたんでしょ!!!」

「良く聞こえなかったけど、おれはただ一緒に修行していただけな
んだけど…。」

「はい…?修行?えっと、刹那さん本当なの?」

「はい、カイ先生は私達に武芸を教えてくださいださっているのですよ。まああれは指導と言つよりしごきですが…。」

「そうでござるな…。」

「お前らそんなこと言つて、後で覚えてるよ?」

ガクガクブルブルツ

「なんか、2人がすごい勢いで震えてるけどいいの…?」

「いいんだよ。それよりそんなこと聞くだけにこんな大人数できたのか?」

「うう…、エヴァちゃんについてはまだ聞いて無いわよ! 2人暮らしてどういふこと!」

「なんでもなにも、エヴァは俺の家族だ。家族は一緒に住むものだろ?」

「うう…、まあそうね。(これは気まずい…、誰か話題変えてくれないかしら…)」

「カイ先生ってそんなに強いん? せつちゃんもかなり剣道強かったとおもつんやけど?」

「(ナイスこのか!…さすが私のルームメイト!) そうよ! カイ

先生って強いのか？」

「うーん、いきなり強さの証明とか言われてもなあ（まさか素手で木を握りつぶしたりするのはまずいし…）」

「それなら、ワタシが勝負したいアルネ！」（クーフェイ）

「…んまあ、それでみんなが納得するなら。それじゃ外いこうか」

「フッフッフ、先生とは一度手合わせしたかったアル。」

結果はクーフェイがひたすら投げられて終わった。

「いやー、まったく歯が立たないアルネ。」

「ふっ、生徒に負けてるようじゃ教師なんかしてられないさ。」

そんな会話をしている2人以外は、ありえないものを見た後で、
（知ってた？人って宙を舞うんだよー？あははー）
といった感じで現実逃避をしていた。

……

…

…

「カイ先生ほんまに強かったなあ、うちびっくりしたわ〜。」
とは、このかの言葉。

「ちょっと異常だったわよねー。クーだってかなり強いのに、あんなに簡単にあしらって…。」
これはアスナ。

「ハハハ、あの人が異常な強さなのは、同意しますね…。」
苦笑する刹那。

3人はログハウスから女子寮に向かって帰っていた。

「成り行きで弟子になった私ですが、それでもいまはカイ先生は憧れの人になっています。目標の為に私も私はある人に近づいてみせる。」

アスナは刹那の決意を感じ取って黙る。

一方のこのかは、

「ほえ、せつちゃんカイ先生のこと好きなん？」

天然だった

「へっ…？え、いや。そうじゃなくてですね！私は弟子としてです
ねっ／＼／」

「真っ赤になってかわいいわ、せつちゃんががんばってなあ、」

「こ、このちゃん…？」

…騒々しくも、麻帆良の夜は更けていく…

そうだ、森にいこう。(後書き)

楓はどうしてもだしたかったです！

だって好きだし！

最後のほうのくだりはちょっと意味不明になった感が否めない。
そこは脳内補完でお願いしたいです…。ああ文才がほしい。

読者の想像力に頼る作者ですが、次回も読んでもらえると嬉しいです！

ではまた！

べたな日（前書き）

読み返していて死にたくなつた。

でもべたは最強！！！！

キャラの改変が見られますのでご注意ください。

べたな日

「さんぽに行くでござる。」

「はい？いきなりすぎて状況についていけないのですが、カエデさん。」

「拙者はおさんぽ部、そしてカイ先生の趣味も散歩。このふたりが揃ったら散歩に行くのが当然だとはおもわぬのか！？」

楓の目が「クワツ」という擬音と共に開かれる。

「いや、俺のは趣味じゃないし…。それになんでそんなに力説…。まあ散歩ぐらいなら付き合ってもいいが…。」

「決まりでござる！それじゃ早速街に繰り出すでござるよ、カイ先生！！（デート成立でござる）」

一方その頃、刹那は

「はあ……、この前このちゃんに言われてからどうもカイ先生が気になってしま……。しかし、私には恋にうつつをぬかしている時間などないのだ！こういうときこそ心頭滅却して修行に打ち込まねば！……ん、あれは？」

刹那の視線の先には、2人で歩くカイと楓が居た。

「カイ先生と楓……？2人揃ってどこへ行くんだろ……？ハッ！！まさかあれはデート？ということは楓もカイ先生のことか……、って”も”ってなんだ！私は違うぞ！！クツ……気になる……。追うか？しかしそんな出歯亀のようなまねは……。いや、これは後学のためだ！後学のためだから仕方ないんだ！そうと決まれば善は急げだつ……！」

自分を無理やりに納得させて、刹那は2人の後を追い始めた。

S i d e カイ

なぜか楓に引つ張りまわされている。

それに誰かにずっとつけられているな…。あれは刹那か？
どうでもいいがあのサングラスはなんだ、めっちゃめっちゃ似合っ
てないぞ…

なんだろう、2人して…

普段しごいているからその鬱憤を晴らそうとしているのか？つまり
ドッキリ？

別に引つかかってやるのはいいが、ただ引つかかるっていつのも面
白くないな…

なにか考えておくか…。

S i d e O U T

S i d e 刹那

尾行といたらサングラスだ。

これで万が一振り返られたとしても私だとばれることは無いだろう。

しかし、改めてみるとあの2人は普通にカップルに見えるな…。

カイ先生は見た目18歳だし、楓は中1にあるまじき発育のよさだ。それに比べて私は…
やめよう、むなしくなるだけだ。

今度はアクセサリーショップか。

こういう店は苦手だが、尾行の為だ仕方ない…。

…初めて入ったが、すごいものだな。

カイ先生と楓もなにか選んでいるようだな。

あ…このネックレスかわいい…／／／

！！！！ッ 今、カイ先生に見られていたか？

き、気のせいだよな。それに今はサングラスをしている、ばれていくはずがないっ！

結構長い時間居た気もするが、結局なにも買わずに出たみたいだな。

次はアイスクリームを食べるのか。

ふむ、2人でベンチに座って。…カイ先生は空を見上げているのか？
そっいえばカイ先生の趣味は空を見ることだったか。
確かに澄み渡った青空は心が落ち着くものだな…。

カイ先生が一人で席を立ったな。トイレだろうか？

それにしても、2人がアイスを食べているのを見ていたら私も食べ
たくなった…。

すぐどこかへ行くこともなさそうだし、私も買ってこよう。

うん、おいしい！思わず頬もほころんでしまう…

ハッ！！また見られていた？というかいつの間に戻ってきていたん
だカイ先生。

………

………

…

むう、あれから長い時間つけまわしていたが、2人は楽しそうだな
というか、そんな2人を見ているのはひどくつまらない。

女子寮前か…これでデートも終わりのようだな。

あ…

カイ先生が楓にプレゼントを渡しているようだ…。
あれは、ブレスレットか？アクセサリーシヨップでは何も買って
なかったはずなのに。

いや、それよりも…なんだかすごく面白くない…

こんな気持ちになるのは、私がカイ先生のことを好きだったっていうことか…？

なんだか道化になった気分だ。一日中尾行してバカみたいだ。

「はあ…私も帰るか…。」

そのとき、後ろから肩をポンッと叩かれた

「よっ 刹那！ こんなところでどうしたんだ？」

振り返れば、カイ先生がいた。

「な！？カイ先生！なんで私がここにいてわかったんですか？」

「いや、そりゃー尾行バレバレだったからな。サングラスはかえって目立つてるだろ、それに似合ってる無いし。ああ、そういえばアイヌおいしかったのか？」

そう言っつて、ニヤリと悪そうに笑うカイ先生。

「くくっ／＼／＼ み、見ていたんですかっ！」

「それはもう、バツチリと。ふふっ、かわいかったぞ。ああそれと…はい、これ刹那に。」

そういつて手渡されたのは小さな箱だった。

「なんです、これ？」

「いいから開けてみるって。師匠から弟子へのささやかなプレゼントだ。」

「は、はあ…。…こ、これって！」

そこには、アクセサリーショップで私が見ていたネックレスがあった。

「刹那そのネックレスみて、ぼけーつとしてたからな。気に入ったんだろ？」

この人は本当にずるい。

「カイ先生には敵かないませんね。…それにすごくずるいです。」

「だてに歳はくってないってことさ、吸血鬼なめんなよ？」

カイ先生が頭を撫でてくる。

「これからもよろしくな、刹那。」

「…はい。それに、この仕返しはいつか必ず。」

「ははっ、せいぜい楽しみにしているよ。それじゃまたな。」

そういつて、カイ先生は行ってしまった。

わたしは、このちゃんが言うとおりカイ先生が好きみたいだ…。

SideOUT

- - -
- - -
- - -

- - -夜、ログハウスにて。

「ふはははは！ついに出来たぞ、カイ！！」

バーーン！という音と共に開かれた扉から現れたエヴァが、高笑いをしながら言い放った。

「なにができたって？」

「こいつだ！！」

「坂本カイ様とお見受けしました。はじめまして、ガイノイドの絡繰茶々丸といます。以後お見知りおきを。」

「ろ、ろぼ？」

「はい。正確にはガイノイドです、カイ様。」

「こいつはすごいぞ！炊事洗濯掃除の家事はもちろん、格闘戦もこなすんだ！もちろんロケットパンチとか足から火を噴いて空も飛ぶんだぞ！？」

「エ、エヴァ…ちょっと興奮しすぎだから…」

「カイはこの夢のようなロボに心が躍らんのか！…ロケットパンチだぞ？ここは漢おとこのロマンだっ！！…とか言って小躍りする場面だろっ！？」

「い、いや…俺もうそんな歳じゃないし…。それよりエヴァのテンションがあまりに高すぎてちょっと引いたってどうか…」

「ああ、これだから歳はとりたくないよな…。はあ…世知辛い世の中になったものだ…、そう思わんか茶々丸？」

「はい、マスター」

「茶々丸はいい子だな。どこかの朴念仁に爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだ。」

(め、めんどくせえ…)

カイの率直な感想だった。

「それじゃ、エヴァも帰ってきたし飯の準備するか。」

「お手伝いします、カイ様。」

「そういえば家事万能なんだっけか。それじゃお願いするよ。」

「了解しました。よろしくお願いします。」

「おおーほんとに料理できるんだな。すごい技術力だ。」

「褒めていただきありがとうございます。味付けはどうなさいますか？」

「せっかくだから茶々丸にしてもらおうかな。それにしても、こつやって誰かとキッチンに立つのは初めてだけど、案外いいものだな。」

「!?!?!?!ッ」

エヴァは驚愕した。

（そ、そういえば私の夢の一つだった”カイと2人で料理”を、ロボとは言え従者である茶々丸に奪われているではないか！こんなことを認めてしまっただけいいのか!?!いや、いいわけがなかるう!?!）

「な、なあカイ？料理の手伝いなら私がするぞ？だから茶々丸はテレビでも見て休んでていいぞ？」

「いえ、マスターの手を煩わせるわけにはいきませんので。」

「（ぬっ…エヴァに料理させるわけにはいかないっ！）　そ、そうだぞ？いつもみたく飯が出来るの待ってればいいぞ？」

「い、いや　そういわずにだな？たまには私もカイの役に立ちたいと言っかだな？」

「（今日はやけに粘るなっ…）　大丈夫だよ、エヴァは充分俺の役に立っているから。俺が作った料理をエヴァが本当においしそうに食べてくれるのが、俺はなにより嬉しいんだ。だから、な？」

「そ、そうか？／／　そうまで言うなら仕方ないな！今日も楽しみにしているからなっ！」

（久しぶりに顔を赤くしたエヴァを見たな…、やっぱりかわいい…。）

「カイ様の誑たらしこみの技術に脱帽いたしました。これが既存知識にあるロリコンというものですか？あるいはペドフィリアですか。」

「え…？いまなにか言った、茶々丸？」

「何も。それよりマスターがお待ちです、仕上げに取り掛かりましたよう、カイ様。」

「あ、ああ。（いまなんかさっさとひどいこと言われたような気がするんだけど気のせいだよ…？）」

・・・食事中

「ん、茶々丸を俺達のクラスにいれるのか？」

「ああ　一応従者でもあるし、こいつの開発者はハカセだ。できるだけハカセに近い環境においてやるのがいいだろう。」

「それもそうだな。学園長には俺から言っておくか？」

「いや、わたしが行こう。あのジジイはカイが相手だとあからさまにほっとしているからな。たまにはいじめてやろう。」

「さすがマスターです。」

「……………。まあ　あんまりいじめてやるなよ？　老い先短いんだから。」

・・・茶々丸の編入はあっさり決まった。

・・・そして時は流れ…

「3学期からナギの息子が学園で修行をはじめらしいぞ。」

今はクラスも進み2・Aとなり、冬休み真っ只中である。

「ほう？確かネギといったか？アリカとナギの息子か、一体どんなやつか、クククツ　楽しみだな。」

「アリカのことについては秘密らしいけどな。予定では俺達のクラスで担任をやるらしい、んで俺が副担任。」

「ふむ…。私たちのことは黙っておこうか。ガキがあかく姿を外から眺めるのは楽しそうではないか？」

そう言つて、悪人笑いを浮かべるエヴァ。

「あまり良い趣味ではないが、ナギとアリカの息子だ、自分の力で何とかしていくことが出来なければ苦勞することになるだろう。黙っていることについては賛成だ。」

「ふふつ、楽しみが一つ増えたな。せいぜい楽しみにすることにしよじ。」

……もうすぐ3学期!!!

べたな日（後書き）

さて、茶々丸についての文句は受け付けます。
ごめんなさい、先に謝っておきます。

茶々丸は原作では1 - Aの4月1日に起動なんですけど、都合により
変えさせていただきました。

とりあえず、次回からはネギ坊主登場です!!!

長かったよほんと…。

そういえば、キーワードいじったらちょっと読者数増えて嬉しいで
す。もっと色々追加したらいいのかな？グフフ

ではまた読んでくれるとありがたいです!!

期末考査（前編）（前書き）

今まで書いてきた文章を読んで死にたくなりました。

どうも作者です。

今回からネギ坊主参戦です！。

期末考査（前編）

S i d e カイ

今は学園長室前で待機している。

扉の向こうでは、ナギの息子、アスナちゃん、近衛、刹那が学園長と話していることだろう。

ナギの息子はあのバカを小さくして可愛げをプラスした感じだった。

おっと、学園長の声がかかったな

それじゃナギの息子にご挨拶するのでしょうか。

S i d e O U T

「はじめまして、副担任の坂本カイです。カイと呼んでくれればいいですよ、ネギ先生。」

「は、はじめまして ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間ですがよろしく願います。（紅い目だ…めずらしいなあ）」

「カイ君にはネギ君の補佐をしてもらう。分からないことがあったら彼に聞くといい。」

「あ、ハイ。」

「それとじゃが、このか アスナちゃん、暫くはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？まだ住むところが決まっておらんのだよ。」

（狸ジジイめ、ナギの息子を詠春の娘とアスナちゃんのところに戻すか…。なにか起こらないほうがこの場合おかしいな。だってナギの息子だし…。）

カイがそんなことを考えている間アスナは学園長に抗議をしていたが。

「仲良くしなさい。」
の一言で片付けられてしまった。

学園長室を出た一行は2・Aを目指していた。

（ネギ君とアスナちゃん反発しあってるな！。これはこれで中々おもしろい。）

「あんななんかと一緒に暮らすなんてお断りよ！！それじゃ私先に行きますから先生！」

「あ、まってーなアスナー。」

「あの、あまりお気になさらないで下さいネギ先生。それでは私もこれで。」

ネギ君に啖呵きつたアスナが先に教室に向かい、それを追いかけて

このか、刹那も行ってしまった。

「なんですかあの人は……？」

「まあ、普段は元気で素直な子なんだけれど……。ネギ君　なにか神楽坂にやらかしたんじゃないのか？」

「ん……、僕はただ失恋の相が出てますと教えてあげただけなんです……。」

「きつとそれが原因だと思うが……。まあ　そのことは追々解決することにして、とりあえずクラス名簿を渡すよ。そしてここが君の教えるクラス、2-Aだ。」

「うつ……なんだか緊張してきました。そ、そうだクラス名簿……。」「ネギは渡されたクラス名簿を開き見た。

「うわ……いつぱいいますねえ……。」

「お、タカミチの書き込みがされているな。あいつも中々マメなやつだなあ。」

「あ、ホントだ。助かるなあ、タカミチに感謝しなきゃ。」

「ふふ、早くみんなの顔と名前覚えられるといいですね、ネギ先生？それじゃ、そろそろ教室に入りましょうか。」

「は、はい……よし、やるぞー！」

そう意気込んで踏み出した教師の第一歩は見事に躓すまっいた。

ガツ　ゴロゴロ　どーーーーん!!!!

その畏にかかって転がる姿はおよそ2年前の誰かを彷彿とさせ、

「「「「「で、でじゃびゅー……」「」「」「」

図らずも、新任教師ネギ・スプリングフィールドがクラスを一つにした瞬間だった。

（これは見事に畏にかかったなー。それにしても障壁を発動させているのはまずかったな、危うく一発でオコジョ決定だったぞ。）

……

……

…

起き上がったネギ君が自己紹介をした後、もみくちやにされたり、アスナちゃんが詰め寄ったりで色々あったが授業が始まったようだな。

ふむ、10歳とは思えない分かりやすい教え方だ。
ホントにあのバカの息子なのかと疑いたくなるな…。
エヴァも同じ意見なのかちょっと驚いてる風な顔だな。

…アスナちゃんは消しゴムをぶつけて、一体何がしたいんだろう。
多分さっきの黒板消しをとめた障壁を怪しんでいるんだろうが、いまは切っているから無駄なだけだな。まあそんなこと分かるわけが無いか…。

クラスが騒ぎ始めたな…これじゃ授業にならないじゃないか…
フフフ、みんなしょうがないなあ。

「クククツ…」

「「「「ビクウツツ!!!!」「」「」

シーーーーーン…

俺が少し笑いを漏らしたただでクラスは静かになる。
2年間の俺の教育はしっかりと行き届いているようだな、ふふふ。

時には尊い犠牲も伴ったがな。主に刹那と楓だが。
フフフ、2人共そんなに怯えなくていいじゃないか、俺は笑っただ

けだぞお？

ネギ君はあれだけ騒がしかったクラスが水を打ったように静まり返ったせいで、かえって混乱しているようだが問題ないだろう。

授業が終わったようだな。

どうしたらネギ君みたいな子が、あのナギから生まれるんだろうか。世の中は不思議でいっぱいだ。

この後は歓迎会だったな。
特にやることも無いし、それまでネギ君でも観察しておくか。

S i d e O U T

S i d e ネギ

うう…教師って大変かも…。

いきなり罨にかかるし、自己紹介をしたらもみくちゃにされるし…。

それにあの神楽坂明日菜さんだ。

なんで僕にあんなに意地悪するんだろう。
おかげで授業もめちゃくちゃになっちゃったし。

でもあの時なんで急に静かになったんだろう？
それに、桜咲刹那さんと長瀬楓さんが、涙目ですごく震えていたよ
うな…。

うーん、なぜだ…。

「ん、あれは…27番の宮崎のどかさん…、たくさん本を持って危
ないなあ…。」

って、やっぱりバランスを崩したよ!!

「危ないっ!!!!」

ふう、思わず魔法をつかっちゃったけど宮崎さんが無事でよか…っ
て神楽坂さん!?!
もしかして、今の見られていた？

バ、バレタ!どうしよう、何とかしないと!!
そ、そっだ記憶を消そう!!

あわわわ…記憶じゃなくて服をけしちゃった!アスナさん素っ裸だ
よ!!!!

「おーい、そこの2人なにやってるんだ?」

これタカミチの声!?

アスナさんはタカミチのこと好きで……ってこれはまずいよ……!

「へブウツ……!!」

気が付いたら目の前にはカイ先生が立っていた。

タカミチは遠くに吹き飛んで気絶しているようだし、アスナさんには黒いスーツがかぶせられている。

「神楽坂……、子供に露出する性癖だったのか?」

「ち、ちがいます!!というか、カイ先生も見ないで下さいよ!!」

「はっはっは!それじゃ俺は神楽坂の着替えでも持ってくるぞ。ネ

ギ君は傍についてやってくれ。そこで伸びているアホみたいに誰かが来るとも限らないからな。」

「は、はい！わかりました！」

そういつてタカミチを引きずってカイ先生は行ってしまった。

…ところでなんで足のほうを引つ張っているんだろう？あれじゃ頭を打つちゃうような…。

それにしても助かったあー、カイ先生頼りになるなあ…。

でも、今のタイミングって…だ、大丈夫だよな？魔法ばれてないよね？

S i d e O U T

「クッククク、まさか初日から魔法バレとは。授業を受けたときはとんだ真面目君だとおもったが、やはりあのバカの息子ということか。」

「そうだな。本当に予想の斜め上を行ってくれるよネギ君は。それにしても、アスナちゃんが魔法を知ったか…。」

「ふむ、いつ思い出すともわからんなこれは。しかし、それはそれ

ネギはあからさまに安堵した表情を見せていた。

いまは学園がネギを正式採用するかどうかを左右する最終課題を、ネギが受け取ったところだ。

「そつおもつかい、ネギ君？」

「はい。もっとひどい課題を想像していましたよ！」

「そうか。ところでネギ君は2・Aのいままでの成績を知っているかい？」

ニヤリと笑うカイ。

「課題が最下位脱出ってことですから前回は最下位だったんですよ？」

「そうだね。正しくはクラス発足以来ずっと最下位だ。」

「え…？この学校はクラス替えが無かったと思うんですけど…？」

「そう、つまり1年の最初からずっとビリだ。もう彼女達はビリが当然と考えているからな、単なる学力の問題じゃなくメンタル的な問題でもあると思うよ？」

ズーーンという効果音とともに落ち込むネギ。

予想通りのリアクションが得られたことで満足なカイ。

（本当にイジリがいのある子だ、さて次はどうやってあそぼうか…）

「落ち込んでいてもしょうがないよ。とりあえず対策を練るといいよ。ネギ君生徒の成績表もってたよね？」

「は、はい。えっと…これです！」

ネギが成績表を広げる。

成績表には各教科ごとの点数と平均点がびっしりと書き込まれている。

「学年トップクラスが3人も居るじゃないですか!!」

「ネギ君、現実逃避はよくないよ。」

「うう〜…。平均以下の人の人数が多すぎます…。それにこの5人が特にひどいです…。」

「その5人はクラスではバカレンジャーと呼ばれているね。」

「バ、バカレンジャー…。と、とにかく正式な先生になる為にはなんとかしなくちゃいけませんね!!とりあえず今日のHRは大勉強会にします!!」

「がんばれよ、ネギ君」

……

……

：

- - - 勉強会が失敗したり、ネギが魔法を封印したりと、モロモロあつた後の夜。

バカレンジャーに、このかと刹那を加えたメンバーは図書館島の深部へと向かっていた。

そして行方不明になった：

S i d e カイ

朝教室に入ると委員長が叫んでいた。

「なんですって？2 - Aが最下位脱出しないとネギ先生が首に！？」

どうやらネギ君の最終課題の情報が漏れたようだな。

「カイ先生本当ですの！？」

「ああ。2 - Aが最下位脱出できなかつたらネギ君は首だよ。」

さて、この情報で2 - Aはどう出るかな？

俺としてもネギ君がここで首になるのはおもしろくないんだが。

「とにかく、テストまで必死に勉強して最下位を脱出しますわよ！
…しかし問題はアスナさんたち5人組ですわね、とにかくテストに
出ていただいて0点さえ回避していただければ…。」

「みんな大変だよー！ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に…！
！」

「……やっぱだめかも……」

話を聞けば図書館島に調べものに行つたつきり連絡がつかなくなつ
たそうだ。

早乙女と宮崎はなにか隠している雰囲気があつたが今はいいだろう。
しかし行方不明とは…。本当にネギ君は素晴らしい星の下に生まれ
ているようだな。
さて、どうするか…。

………フツ、いい案が浮かんだ！！

「ネギ君たちは俺が探しに行こう。そして2 - Aの授業はテストま
で期末考査対策集中講義とする。教員だが心配するな、すぐに特別

講師をよんでやる。多少問題があるかもしれないが、腕はあるから安心しろ。じゃ、そういって。」

一方的にそうクラスのみんなに告げると、さっさと図書館島に向かう。

「と、その前に念話を飛ばしておかないとな」

『そういうことだから、後よろしく！期待しているぞエヴァー！』

『は？ちよつとまで！！特別講師って私のことか！？』

『大丈夫。大人バージョンになれば誰も気が付かないって、がんばれー。』

『ちよつ、カイ！！流石にちよつと無責任すぎるぞ！？』

さて、無視無視。どうせやり始めたらノリノリでやるのが目に見える。

宮崎たちが言っていた地下11階にきたが、いかにも落とし穴ですって感じの穴があるな…。

あー…落ちたんだろうなあ…。
かなり高さがあるが楓と刹那がついているし大丈夫だろう。

なんだこのだだっ広い空間は…
図書館島、なんでもありだな。
そしてネギ君たち発見つと。

「よう、助けに来たぞ？」

「……カイ先生！？」「……」

俺の顔を見て嬉しそうにする子供たち
ふふ、かわいいものじゃないか。

「よかったー。これで外にでれるわねー。」

「カイ先生は頼りになるアルネー。」

「…カイ先生、何か忘れていません（ござらん）か…？」

ん…？

「良かったわ〜。でもカイ先生手ぶらやけど、どつやって出るん？」

「あ……」

魔法つかっちゃまずいんだっとな……。

「」「」「……」「」「」

無言での視線がとても痛かった……。

いざとなれば気絶させて外に運び出すか。

その場合どつやって出たか突っ込まれると困るが、言い訳を考えておこつか……。

S i d e O U T

期末考査（前編）（後書き）

中途半端ですが、ここまでです。

前書きでも書きましたが、読み直して死にたくなりました。

やっぱり思いつきで書くところなことにならないようです。

でもまだ続けていくので生暖かい目で見守ってくださいとありがたいです。

次回も読んでくださると嬉しいです!!

期末考査（後編）（前書き）

後編となります。

今回も想像力で補いながらお願いします。

ではどうぞ

期末考査（後編）

Sideカイ

「ゴーレムにここに落とされたのですが、そのゴーレムが限りなく学園長でしたね。」

刹那と楓に話を聞いてみると、どうやらこの行方不明自体学園長の仕込みらしい。

まったくあの狸ジジイめ、狸鍋にしてやるのか？

学園長はここにバカレンジャーたちを缶詰にして学力を上げるつもりのような。

自分で課題を出しておいて、ここまでお膳立てするって…そもそもこんな課題だすなよ。

「まあ、学園長の狙いはバカレンジャーの学力向上だろうな。どうせテストに間に合うようにここから出す算段だろう。とりあえず、ネギ君のところに帰るか。」

3人連れ立ってネギ君のところに戻ってきた。

丁度ネギ君が期末の勉強をしましょうと叫んでいたところだった。

「それじゃ手分けして教えようか、ネギ君。」

「あ、ハイ そうですね。どう分けましょうか？」

「そうだな…。」

人数は7人だが近衛はまず問題ない成績だ。

問題はバカレンジャーと刹那だ。丁度3対3に分けられるな。

佐々木はネギ君にお熱だったか、これも情けだネギ君チームにしてやろう。

あとは、アスナちゃんと綾瀬もネギ君チームにして、補佐として近衛についてももらうことにしよう。

残りは、クーフェイ、楓、刹那か。

ふふ、意図せずに肉体派が残ったものだな、遠慮なくやらせてもらおう。

「ネギ君には、佐々木、神楽坂、綾瀬、近衛をお願いしてもいいかい？残りは俺が面倒見るよ。」

「ハイ。それで構いませんよ！」

「というわけで、お前達3人は俺が担当する。」

(カイ先生とほぼマンツーマンでござるか。これはいい)

(カイ先生にいいところを見せなくてはっ…!!)

(な、なんか刹那と楓が妙に燃えているアルネ…)

「さしあたって、苦手科目から強化していく。もともと高いものより伸びしろがあるからな。それぞれ苦手科目は？」

「」「強いて言つなら全部…?」「」

「…………それは強いてとは言わないんだぞ。」

S i d e O U T

S i d e 茶々丸

目の前では、幻術で大人になったマスターが自己紹介をしています。普通のロリボディからは想像できないほどの妖艶さです。

「今から貴様らの臨時講師をしてやる、ありがたく思え。名前はそうだな…山田でいいぞ。」

その姿で山田とは、さすがですマスター。ハイセンス。

「な、なんですかのあなた！？その言い草といい、名前も明らかに偽名ではありませんか！クラス委員長としてあなたのような人は容認できません！」

当然委員長様はマスターに噛み付きます。

「クツクツク、気の強い女は嫌いではないぞ？しかし、それも時と場所を考えなければならんな。」

マスターは委員長様の手を糸で拘束して吊り下げてしまいました。舌なめずりをしながら近づくとその姿は、さながら女王様と言ったところでしょうか。

鳴滝姉妹あたりには刺激が強すぎるようです。2人で肩を抱き合って震えています。…あれはあれで…ジユルリ。

「いまこのクラスのヒエラルキーの頂点にはだれが居座っているのかということを教えてやる必要があるようだな？クツクツク、なに、優しくしてやるから安心しろ。」

「ちょっと！なにをするんですか！！解いてください！！い、いや…やめてっ…いやぁー…」

放送コードに引っかかりそうですね。

周りからはどう見えているかわかりませんが血を吸っているのだけ

です。

ええ、断じてアダルトなことはありませんと。

すっかり大人しくなった委員長様にマスターは問います。

「さて、簡単な問いだ。このクラスの主はだれだ？雪広あやか。」

「はい、山田様でございます。山田様こそクラスのルールでございます。」

そう答える委員長様の目には光が灯っていません。俗に言うレイプ目ですね。

「ふふふ、いい子だ。わたしの言うことをしっかりと聞くんらば、あとで褒美をやるわ。」

「ああ…山田さまあ…。精一杯尽くさせていただきます…。」

すっかり心酔しきっている、という様子でしょう。

周りの人間の大部分はその様子に恐怖し、震えています。…本当にいい眺めで。

「さて、と…。」

そう言い、マスターがクラスを一瞥します。

その視線がこう告げています。「逆らえば次は貴様だ。」と。

クラスの皆さんが震えています。2・Aはいただきます。

恐怖政治とはこうやるのだ、といういい見本ありがとうございますマスター！。

「超、ハカセ、雪広、宮崎、那波、朝倉、椎名は私の助手をしる。」
超、ハカセ様のお二方は恐怖政治には屈しませんからね、味方に引き入れるのが得策でございますね。あと一人屈しない方がいますが…。マスターはどうされるのでしょうか？

「まず雪広、那波、朝倉は勉強を教えて回れ。」

「山田様ため、がんばりますわ…。」

もともと面倒見の委員長様、那波様に加え社交的な朝倉様の人選でございますね。

「それから、勉強の進捗具合を見るためと、重点項目の確認のために確認テストを度々実施する。作成は超、宮崎、ハカセでやれ。なお、このテストでは常に前回のテストの点数を上回ってもらう。もし出来なければ、私直々にペナルティーを加えてやるわ。」

ニヤリと笑うマスター。本当にノリノリです。

「あ、あの…私は何をすればいいんでしょうか…？」

「椎名は、テストのヤマを張れ。期間は2日しかないからな、全体を満遍なくカバーとはいかない。ヤマを張った部分を重点的に学習させる。」

桜子様の勘は神懸かっていますからね。

「そして、私は貴様らの監督が仕事だ。クックック、真面目に勉強

するんだぞ?」

こうして2 - Aの期末対策が開始されました。

S i d e O U T

S i d e カイ

刹那はおもったより出来る子だった。

もともとバカレンジャーよりは成績がいいが、ただ単に勉強をしていなかったというだけで、そこまで頭が悪いということがないようだ。

「刹那、やれば出来るじゃないか。この調子で頑張れよ?」

そういつて頭を撫でてやる。

「あ、ありがとうございます。(カイ先生に褒められたノノノこ

の調子で頑張ることにしよう！」

それに比べて…楓とクーフエイだ。

こいつらは、ひどい…。流石はバカレンジャーといったところか。

なんとというか頭の回転はいいのだが、理論的に考える為の材料となる知識が圧倒的に足りない。簡単に言えば基礎が壊滅的だ。

普通ならばじっくり教え込んでやるところだが、今は時間が圧倒的に足りない。路線変更決定だ。

「なあ2人とも、こんな話を聞いたことはないか？曰く、強烈なインパクトをもった情報は強く心に残る、と。これは、情報そのものがインパクトが強い場合、情報を手に入れたときにインパクトの強い出来事があったという場合が考えられるな。」

「なんの話でござるか？」

「今は関係ないように思えるアルヨー。」

ちよつと遠まわしすぎるか。

「いや、これをお前達の勉強に取り入れようかとおもってな。これならすぐに覚えられるだろう？」

「それはいい…。試してみるでござる。」

「是非取り入れるアルヨ！」

ふたりの同意も得られたな。

「それじゃこれから問題間違えるたびにボコリながら答え教えてやるから。嫌だったらしっかり勉強しろよ？」

「「へ…？？」」

「これならかなりインパクトのある情報になるだろ。われながらいい案だ。決してお前らに教えるのにストレスが溜まったせいとかじゃないから。」

「「最後本音漏れてる（アルヨ）でござるよ！！？」」

「はっはっは、がんばっていこー！」

（（修羅がいるっ…！これは死ぬ気でやらないと命がまずいっ…！
！…！）

…楓とクーフェイの地獄のレッスンが始まった。

SideOUT

おいおいおい！なんだよあの山田とかいう臨時講師！！
いきなり現れたとおもったら、噛み付いた雪広を操り人形みたいに
してしまうし！！あれはやばいつ、本能がやばいと絶叫している！
普段能天気なこのクラスもあれがやばいと悟ったのか、カイ先生の
授業以上の静けさだ。それに監視されているプレッシャーのせいか
ギスギスともしていやがる。

それにしても、確認テストで点数を上回れなかったときのペナルテ
ィーだ。

幸い、私はまだくらっちゃいねーが…。

一体何をしているかは分からないが、ペナルティーが決定した奴ら
は決まって山田に「私の目を見る」と言われている。

しばらく見詰め合っていたかと思うと、ペナルティー食らったやつ
はいきなり泣き出したり、ガタガタ震えだしたり、この世の終わり
みたいな顔しやがる…。そして山田は決まって楽しそうにニタリと
笑ってやがるんだ…。

あれは絶対ヤバイ。なんと少しでも回避しなきゃなんねえ…。

やったぜ、なんとか今回も点数を上回った。

それで今回の犠牲者は……… 龍宮か。あいつが感情を動かすところなんか私には想像できないんだが…。

山田のやつが今までで一番楽しそうにしてやがる。何かやるつもりか。

「クツクツク、やっと貴様の番か。待ちわびたぞ?」

「残念だったね、”闇の福音” 私にはその手の心理攻撃は効かないんだ」

は? 闇の福音ってなんだ? それに、それを聞いたときに春日が吹き出していたようだが…。

「今は山田だ。貴様については少し意趣を変えてみようと思っ
てな。おい、茶々丸 例の物をもってこい。」

命じられて、あのロボがもってきたものは…

ぶっ…ランドセルにゴスロリ服だと…!?

「…これを私に着ると?」

やばい、龍宮がこめかみをピクピクさせている…

それにつれてもともとギスギスしていたクラスがますます殺伐となつていくじゃねえか…

「そうだ。だがそれだけで終わると思うなよ？ 言っておくがペナルティは絶対だ。拒絶しても貴様じゃ私を排除することはできないぞ？」

本当に楽しそうにニヤニヤ笑っている山田が手渡したのは、本か？

ちよっ！渡された本に目を通し始めた龍宮がプルプルしだしたぞ！？
もうクラスの空気は氷点下だぞ…。

「さあ、早くしろ…！」

ん…、いまにもキレそうな龍宮が何か言つみたいだな…。

「わたし たつみやまな14歳、大学生に間違われたりしちゃうくら
い老けてるけど、本当はこんな格好が大好きな乙女なの (ニコ
ッ)

や、やべえええええ!!!最後の笑顔、マジで殺されるかと思った
ぞ…
いまやクラスの雰囲気は復旧のめどが立たないくらいひどいことにな
っている。

そんななかで山田だけが笑い転げてやがる。

「あはははは！！龍宮！！貴様私を窒息死させる気か！　これは傑作だ！！」

こういうのを外道というんだな…。

「ククツ、ああそうだ　クラス全体にもいえることだがな、ペナルティーを加えるのは一度だけではないからな？嫌ならせいぜいあがくことだな。」

いま、確かに空間にヒビが入った音が聞こえたぞ。もうバツチリ、「ピキッ」という音が。

・・・いつ誰がストレスで倒れるかも分からない環境の下2-Aの面々は死に物狂いで勉強した。

S i d e O U T

予想以上に楓とクーに対する教育がうまくいったな。
これならかなりいい成績が望める。
刹那もかなり頑張った、こちらも心配は無いだろう。

「よく2日でこれだけ伸びたな3人とも。これならテストも心配ないだろ。刹那にはあんまり教えてやれなくてすまなかったな。でもよくがんばった。」

そついつって刹那の頭を撫でてやる。
最近なで癖がついたなあ…、刹那小さくて丁度いい位置に頭があるしなあ。嫌がってないしいいよな？

「あ、ありがとうございます／＼／」

「し、死ぬかと思ったアルー」

「途中から勉強じゃなくてイジメなんじゃないかとおもったでござる…。」

「後は今まで詰め込んだことの復習をしっかりとすること。それじゃおれはみんなの朝飯を作ってくるから、それまでは自由時間でいいぞ。」

そう言い残して調理をしにきた。さて、朝飯なんにするかなー。

「カイ先生お手伝いします。」

刹那がやってきた。せっかくの自由時間だからゆっくりしてればいいのに。

「ん、自由時間だからゆっくりしてればいいぞ？疲れているだら？。」

「いえ、そんなに疲れは感じませんので。それにカイ先生一人にここ2日の食事の準備を全てしてもらって良かったです、少しは手伝いたいとおもいました。」

「そうか、それは助かる。ところで、刹那は料理できるんだっただか？。」

「うっ…。あまり得意とは言えませんが…。食材を切るのならば得意ですが。」

「なら、味付けは任せてくれ。そのかわりほかの事は頼むな。」

「はい！」

うむ、刹那はいい子だ。

「さっきも言ったが本当に刹那は頑張ったな。」

「いえ…、日ごろ勉強していなかった私が悪かったです。」

「ふふっ、そう謙遜することはないさ。楓たちはケツをひっぱたいてやっとな勉強しているのに、刹那はしっかり一人で出来ていた。かなり大きな違いさ。普通、普段勉強しないやつは、やるって口では言っても結局はしないってやつが多いものなんだぞ？刹那は出来る子だよ。」

「あ、ありがとうございます／＼」

他愛もない話をしながら調理をする。

「それにしても、そろそろここから出たほうがいいと思うんだが、学園長はいつ来るんだか。」

「そうですね…。大丈夫だとは思ってますけどね。」

「いざとなれば、俺が運び出すつもりだが言い訳がめんどくさいのが難点なんだよな。っと完成だ、盛り付けてみんなのところに運ぶぞ。」

「はい。」

…いない？

「どこにいったんだ？」

「滝のほうに大きな穴がありますね…。」

……

「「学園長」ですね」か…」「

思わず刹那とハモった。

「はあはあはあ……」

「いつまでおっってくるのよあのゴーレム！」

「しつこいアルネ！」

ネギー一行はゴーレムに追われ、果てしなく続く螺旋階段を昇っていた。

「あ、また問題よ!!！」

「うーん、X＝46かな。」

「開いた！正解みたいよ。」

「おお、長瀬さんまで！バカレンジャーなのに……。」

「これ、ほんとに読むだけで頭よくなる本アル!!！」

螺旋階段には所々問題が載った門があった。

(うーむ、明らかに学園長でござるなー。ゴーレムを破壊してもいいでござるが…。どうせ地上に出す算段だろうし、このままみんなと一緒に昇るのが自然でござるな。)

「携帯の電波が入りました！地上はちかいです！助けをよぶのでみんな頑張ってください！」

「あ！見てください！地上直通のエレベーターですよ！！」

そこには地上直通エレベーターと、デカデカと書かれていた

「ほ、ほんとだ！みんな急いで乗って！！」

「でも僕達がエレベーターを使っちゃったら刹那さんとカイ先生はどうするんですか!?!」

「ネギ坊主の心配はいらないでござるよ。あの2人なら大丈夫でござる。」

「えっ？どれはどっいつ…?」

「さあ、乗るでござるよ!！」

ブブブブブブツツ 重量オーバーデス

「「「ええ〜〜〜〜〜〜!?!」」」

「スペース余ってるやん、根性なしのエレベーターやな!。」

(確かにこの大きさのエレベーターが女子供を乗せただけで重量オーバーなわけないでござる、とすると魔法の本か。この雰囲気では本を捨てるといっても無駄そうでござるな！)

「みんな！持っているものとか着ているものを捨てて！ほら片足だけでブザーとまる！！」

(都合のいい重量設定でござるな！。学園長拙者たちが脱ぐとおもってこういう設定にしたのでござるかな？)

その場のネギ以外が服を脱ぎ捨てるが、ブザーは止まらない。

「もー捨てるものないよ〜〜っ あと少しなのにー！」

『ふおっふおっふお、追い詰めたぞよー、観念するのじゃー』

捨てるものもなくなったネギ一行に、ゴーレムが迫り追い詰める。万事休すと思われたが…

「僕が降ります！皆さんは先に地上に行って明日の試験を受けてください！！」

そういつてゴーレムの前にネギは躍り出る。

「ゴーレムめ！僕が相手だ！！」

『ふおっふおっふお、いい度胸じゃ くらえーい！！』

迫るゴーレムの手。ネギは目を瞑って衝撃を覚悟する。

「いい度胸はどっちな、見知らぬゴーレムさん？」

しかしその手はカイによって止められていた。

「え…、あれ？カイ先生？って素手でゴーレムをとめてる！？」

驚くネギ。

「ネギ君ちよつと無謀すぎだね。まあそういうのは嫌いじゃないけどな？…それにしても、お前ら露出狂だったのか…？」

「「「ちよ！？みないてください！！」「」」

「はっはっは！ 刹那、俺はこの見知らぬゴーレムにお話があるし、エレベーターには乗れないから、ネギ君連れて先に行ってくれ。」

「わかりました。」

「えっ？でもエレベーターは重量オーバーで！」

「ちよつと失礼するでござるよ。」

そういつて楓が魔法の本をエレベーターの外にだしてしまっ。

「ああ！魔法の本が！…あれ？なんでブザー鳴らないの？」

魔法の本を出したおかげで、刹那が増えてもブザーがなることはなかった。

「それじゃ、拙者たちは先に行っているでござる。」
「ああ、すぐいく」

その会話を最後にエレベーターは地上に昇っていった。
残されたのは、カイとゴーレムと魔法の本だけである。

「さて、見知らぬゴーレムさん。この茶番でちよつとイラついてるから壊していいかい？」

「ちよ、ちよつと待てカイ君！？分かっててやってるじゃろ！！それに今は、ゴーレムと感覚を共有しとるから痛みとかもフィードバックしてくるんじゃないよ！？」

「へえ…、それはいいことを聞きました。じっくり痛めつけてあげますよ、見知らぬゴーレムさん？」

「おや……」

……

……

：

結局、2 - Aはダントツの成績で学年首位になった。

2 - Aの面々はネギが首にならなかったことを泣きながら喜んだ。泣きながら喜んでくれることにネギは素直に感動するだけだったが、あのもノリノリで授業をしていたエヴァが「ネギ先生が首になったら私が担任になってもいいな」とつぶやいたせいというのは生涯知ることはなかった。

・・・この期末考査は、2 - Aに一人の担任教師、学年首位トロフィー、多くのトラウマを残したとき。

期末考査（後編）（後書き）

龍宮をいじりたくてやりました。

後悔はしていません。むしろやりきった。

茶々丸のキャラは崩壊ってレベルじゃありません。むしろ作り変えている。

さて、ここまで書いてきましたが、全然おもしろくないことに絶望したので書くのやめようかなっておもっています。

気が向いたら復活するかもしれないが…

一応今後の展開も考えてはありますけどね。

では、次書くことがあったらまたよろしくおねがいします！。

桜通り（前書き）

書くのを止めるといいつつまた舞い戻ってきました。

では今回も読んでもらえるとうれしいです。

桜通り

・・・曰く、桜通りには仮面をかぶった怪人がでるらしい。

・・・曰く、怪人は吸血鬼らしい。

そんな噂が麻帆良学園で流れていた。

.....

.....

...

「はぁ...桜通りの怪人、ですか？」

ネギはアスナから怪人についての噂を聞いていた。

今は登校中だ。このかは学園長に呼び出されたとかで先に行ってしまうっている。

ネギは噂話にあまり食いついたような様子を見せてない。といったもその噂を聞かせているアスナ自身真意を測りかねているといった様子で話しているのだから無理も無いだろう。

「そうそう、噂ではそいつは吸血鬼なんだってさ。アンタみたいな魔法使いがいるんだから吸血鬼もいるのかなーって。まあなんにせよ火の無いところに毛虫は寄らないっていうし、なにかあるんじゃない？」

「アスナさん…それを言うなら火の無いところに煙はたたないだと思えますけど…。」

「あれ…？そうだったけ？ガキンチョの癖に細かいわね！」

「あうっ！」

間違いを指摘されて赤面したアスナは照れ隠しにネギの背中をバシーン！と景気よく叩いて先に行ってしまった。

（いたた…。アスナさんは乱暴じゃなければいい人なただけどなあ。それにしても吸血鬼か…。まさか本物がいるとも思えないし、吸血鬼を模倣した通り魔とかなのかな…？とりあえず今晚にでも桜通りに行ってみようかな。）

めでたくネギが正式な教師として採用されることが決まったあの期末考査は既に前年度の出来事となり、いまではめでたくネギは3-Aの担任として教鞭を振るっている。ネギはあのぶつちぎりの期末考査の成績を褒めたがっていたのだが、期末考査の話をする決まって教室中が負のオーラを発し始めるので、触れたくても触れられない状態だった。

3-Aとなつてからは、カイ自体は未だ副担任という位置づけではあったが肩書きだけの役職のようなもので、実質3-Aはネギ一人

で担当していた。もちろんカイの授業自体はあったが、もうすでにいつものこととなった、朝のHRが始まっていた。

「…今日もエヴァンジェリンさんはいないんですか…。(うーん3
- Aになつてからエヴァンジェリンさんが急にサボりだしちゃった
なあ…。なんとかしなきゃ。)」

エヴァは最初こそおもしろがって、ネギの授業を普通に受けていたが、最近ではついに飽きてしまったのか大体はサボっている。カイが担当する授業だけは普通に出ているのはご愛嬌だったが。

「最近桜通りで不審者がでると言う噂がありますが、皆さんも充分気をつけてくださいね。下校する際は出来るだけ複数の人と一緒に帰るように心がけてください。それと夜も出来るだけ外出は控えてくださいね。」

ネギとしては、一応の注意を促したに過ぎなかったが、そこは中学女子だ。噂話は大好きであり、その話を担任がネタ振りしたということもあって一気に盛り上がってしまった。

「それって桜通りの怪人だよね！」

「吸血鬼でしょ？ほんとにでるのかな！」

「出るらしいよ！実際みたーって子もいるらしいし！」

「えー！怖いなー！ネギ先生守ってよ！」

キヤイキヤイ

あっという間にお祭り騒ぎになったクラスにネギはオロオロしていたが、それと同時に噂の広まり具合から見ても何かあるかもしれない、という疑念を深めていった。

- - -夜。

ネギは昼間に決めたようにパトロールをする為に桜通りへと向かっていた。

桜通りは中々に長い通りで、春の桜が咲き誇っている今の時期はとても幻想的な道になっている。

ネギは初めて見るその長く続く桜並木をかなりの感動を持って見ていた。

「日本の桜はすごいって聞いていたけど、これはほんとにすごいなあ。こういうのは夜桜って言うんだっけ？」

素直に桜に感動するその姿は10歳の子供相応の姿だった。

そしてその姿は、パトロールに来た先生ではなく、ただの桜を見物に来た子供としか客観的には映らないものだった。

「夜に1人で出歩くのは関心しないことだね。おかげで俺みたいな人間に襲われることになるんだから。」

「だ、誰だ!!」

慌てて声のしたほうへ振り向いたネギ。

そこにいたのは、白い仮面をかぶり全身を黒いローブで包んだ人型だった。

性別は一概には判断できなかった。意図的に声は変えられていたし、全身が隠されているということもあった。

その姿は、桜の並木の中にあつてとても違和感があり、不気味さを助長しているようでもあった。

「おや、どこの子供かと思えばネギ・スプリングフィールド君じゃないか。これは中々に都合がいいかもしれないな。」

「なんで、僕の名前をつ！あなたは最近噂されている桜通りの怪人ですね。都合がいいとはどういうことですか！」

ネギは宝物である杖を怪人に向けながら問いただした。先ほどの襲うと言う単語、それに怪人から感じられる全く友好的ではない雰囲気にくるくなことではないとは分かっていたが。

「君はかの有名なサウザンドマスターの息子だからね。それと都合がいいと言うのは、少し目的があつてね。悪いけど君には痛い目を見てもらうことにするよ。なに、命まではとらないさ。」

「父さんのことを知っている？あなたは魔法使いなんですか？どうして僕を襲うんですか！」

「本来ならば脅かして血を吸うだけだったんだが、君がサウザンドマスターの息子だったのが悪いのさ、あきらめてくれ。」

そういつて怪人は呪文詠唱に入った。魔法使いなのか？という問いはそれによってネギに答えをもたらした。

(ツク… 父さんの息子だから襲われる？どういうことだ。それよりも今はあの人の魔法を何とかしなくちゃ…)

目の前に迫った魔法の射手をレジストする。

怪人はレジストされたことを気にせず魔法を続ける。

怪人が魔法を放ち、ネギが打ち消す。そんな構図がしばらく続いていた。

ネギからの反撃は、ない。

ネギは震えていた。

(こ、怖いっ…。どうしてこんなに怖いんだっ…。)

ネギは、6年前の村のことがあったとしても、まともに自分を害する為に放たれる攻撃というものに晒されたことが無い。魔法学校主席卒業といっても所詮10歳の子供。その攻撃が怖い。その害意が怖い。そして理由も分からないうちに晒される理不尽な暴力というものに怯えていた。

一種の恐慌状態に陥りかけているネギには、反撃はおろか、もう幾許かも敵の攻撃を防いでいることは出来ない状態になっていた。

「こらー！！なにやってるのよ！！」

と、そこへ^{アスナ}第三者が現れた。

「まずい、一般人かつ…。ネギ先生、また日を改めて会おうじゃないか。それではな」

そんな言葉を残して桜通りの怪人は去っていった。

……

……

…

「ということがあったんじゃない。」

「で、ジジイはそれがカイの仕業だと言いたいのか？殺すぞ？」

ネギが襲われてから数時間後カイとエヴァは学園長室に呼ばれていた。

「そ、そんなこといつとらんわい！いちいち脅すの止めてくれんかのう…。」

「それで、そいつが去った後はどうなったんですか？」

脱線しかけた会話をカイが元に戻す

「うむ、ネギ君は精神的にかなりきていたみたいでの。すぐに気を

失ってしまったんじやが、今は気が付いてはおる。」

「ほう、含みのある言い方だな。大方べそでもかいているんだろ？」

「むう……。大体そんな感じじや。まあいろいろと10歳の子供にはシヨックが強すぎたんじやろ。」

「ククツ、本当にあのバカの子供とは思えん奴だな。」

「まあ、そう言ってやるなって。それで？わざわざ呼び出したからには学園長は俺達に何かして欲しいんでしょう？十中八九そいつは俺達をこの学園から排斥したいと思っている魔法関係者でしょう。速やかに粛清するくらいなら働いてあげますよ？」

暗い笑みをこぼすカイ。大戦期の自分の紛争を真似て、悪事を働いた相手のことを完全に排除すべき敵と認識しているようだ。

「いや、今回はお前達には動いて欲しくないから呼んだのじや。」

「は？ジジイ、その桜通りの怪人とやらは私たちに喧嘩を売っているのだぞ？放っておけるわけがなからう。」

「すごみをきかせて言うエヴァだが、いつものように学園長がひるむことはなかった。」

「お前達が動けば確実に殺すじやろうが。そんなことを見逃すわけにはいかん。幸いまだネギ君が襲われたことは他の魔法関係者にはばれておらん。このことは限りなく穩便に済ませたいという思いもあるし、ちょっとばかり利用させてもらおうとも思っておるんじや。」

「よ。」

内心、「またかこの狸ジジイ」と思いながらカイは先を促すように相槌をうつ。

「聞くだけ聞きましょうか。」

「うむ、どうもネギ君は綺麗に育ちすぎたようじゃ。そのくせナギのことを追いかけてようとしておる。ナギを追いかける以上は、世界の裏を知り、渡っていく必要があるじゃろう。当然のことながら、甘い理想論を抱いているだけのお子様ではすぐに死んでしまうのである。今回のことはネギ君自身に解決させることにする。彼には精神的にも、肉体的にも強くなってもらわねば、な？」

「フンツ、ジジイが考えそうなことだ。ぼーやが強くなることには私も賛成だ。しかしその計画に対して条件を出させてもらおうか。」

「ほう、なんじゃ？」

「気づいてはいると思うが、今回の”桜通りの怪人”の事件の詳細、特に大戦期のカイの格好を模している、という点が私たち2人の排斥派の耳に入ったならば、それだけで排斥派は一気に活動を活発化させるだろう。たとえカイが犯人ではないということが明らかでもな。そういう奴らは、今回の事件が私たちが存在していることで起きたことだと主張することだろう。そもそも居なければいいんだとな。私たち2人としては、他人がどう喚こうと一向に構わんし、実力で排除しに来た人間も簡単に斃すことができる。しかし、それではジジイが困るのだろうか？」

「うむ…、そうじゃ…。」

「ならば、今回の事件については絶対に学園の魔法関係者に漏れないようにしろ。漏れたと判断した場合は権力でもなんでも使っても消すんだな。」

「了解じゃ。」

「次は、ぼーやが事件を解決した後の犯人の処遇についてだ。即刻クビのうえ追放だ。ジジイとしても無駄に騒乱を起こすような人間、それもこんな子供だましもいいところの無能者を雇っていたくはないだろう？ククツ、こんな茶番が最後までばれずに、なおかつうまくいくと思っている能天気さを少し分けて欲しいくらいだよ。」

「致し方ないじゃろうな。」

「最後だ。どうせジジイのことだ、とつくに犯人は特定しているんだろう？私の監視下に置くから、教える。もしもこれ以上上下劣な行為をカイを装って為すならば、即刻私が粛清する。異論は無いな？」

「異論はあるが、どうせ言っても聞かんじゃろう。ここまで譲歩してくれただけでもよしとするわい。ただしその粛清が行われるとしても、妨害はさせてもらうからの。」

「ふん、構わん。止められるものなら止めてみるがいい。」

「それで名前はなんていうんですか？」

「うむ、名前じゃがな。サイモンという高等部の美術教師じゃ。詳細はレポートにして後で送るから今日は帰っていいぞい。」

「そうか、早く送れよジジイ。」

「では失礼します。」

・・・そうして夜は更けていった。

翌朝。

ネギは引きこもりになっていた。

「先生が遅刻してちゃ、生徒に示しがつかないでしょうが！それに昨日の怪人だつて昼間はでないわよ！」

「うう…、そんなのわからないじゃないですかあ…。」

「もう！めんどくさいわね！もう担いで学校行くわよ！！」

「うわ〜ん！！！」

結局授業中も負の空気を撒き散らしていたネギだった。

そんなネギをみて2・Aの面々は散々心配していたのだが、一向にネギが立ち直る気配は無い。

放課後、そんなネギを見たカイとエヴァは話し合っていた。

「あれじゃ、勝負以前の問題だな。なんとかして焚きつけないとま

「ずいか？」

「そうだな…。それと、ジジイは動くなと言ったが何もしないのもやはり癪だ。その辺もうまい手がないものか…。」

「そもそもサイモンという教師はまたネギ君の前に姿を現すかすら怪しいところだな。学園長のレポートを見ている限りかなりの小物っぷりじゃないか。」

「まあな。そもそも小物でなければこんな事件を起こしたりしないさ。さて…となると問題は、ボーヤのやる気とサイモンに再びボーヤを襲わせること、そして私たちの鬱憤晴らしか。」

「とりあえず、ネギ君とサイモンをもう一度戦わせることについてなら月並みな手だが思いついたぞ？ネギ君のやる気については正直思いつかないがな。」

「ふむ、その辺はめんどくさいし刹那と楓にでも押し付ければいいじゃないか。弟子とは案外便利なものかもしれんな。」

「…いや、弟子は小間使いじゃないからな…？まあ、その案には反対ではないけど。」

「しかし鬱憤晴らしとなると、やはり直接的な暴力に訴えたくくなるな。」

「その気持ちは分かるが、手をだすなよ？大体こんな小物は別に構わなくていいじゃないか。今回は裏で糸を引いていればいいさ。それじゃ刹那と楓に言うてくることにするよ。」

「ああ、分かった。」

2人の打ち合わせは終わった。あとは決戦のときを待つのみとなった。

- - - - -

カイとエヴァの打ち合わせから3日が経過していた。

その間、ネギの元には故郷で知り合ったオコジヨ妖精のアルベール・カモミールが来ていた。

カモはしきりにネギにパクテイオーを勧めたが結局ネギは誰とも契約を結んではいなかった。

そして、カイにネギの焚きつけ役をいつかつた2人はなんとかその使命を果たしていた。

なかなか苦労したようでも終わったあとは2人ともくたびれた顔をしていた。

後は2人が戦うステージを用意するだけとなった。

夜、サイモンを監視していたエヴァが行動を開始したことを確認した。それと同時にカイへと念話を飛ばす。そして自身は自らの姿を変えてサイモンへと近づく…。

エヴァからの念話を受けたカイも行動を開始していた。顔には仮面、全身は黒いローブで覆っている。かつての大戦での格好であり、サイモンが模倣した格好である。そしてその格好で、怪人の影を求めてパトロールをしていたネギの前に姿をさらす。

「こんばんわ、ネギ先生。懲りもせずにもた夜に出歩いているようだね？」

「ッ！ 現れましたね桜通りの怪人！今日の僕はあなたに負けません！！」

「あいつが怪人つか？聞いてたより強そうっすね…。やっぱり姐さんと呼んできたほうがいいんじゃないっすか？兄貴。」

気合充分といった感じのネギと、早くも情け無い発言をしますカモ。しかし、カモの言葉には答えずにネギは既に攻撃に移っていた。その攻撃を苦もなく避けるカイ。

「おっと、血気盛んなのはいいがそんな見え透いた攻撃は誰にも当たらないぞ？」

言いつつ、カイは目的の位置へと移動を開始する。ネギには単なる逃走に見えただろうが。

「逃がしませんよ！どうしてこんな事をしたのかを捕まえて聞かせてもらいます！」

目論見通りに追ってくる単純なネギに内心苦笑しつつもカイはネギを誘い込む。

ネギを誘い込むのはカイ、エヴァ、刹那の3人が警備を担当している区域である。

丁度ログハウスがある近辺となる。

基本的に他者の警備担当エリアには救援要請でも無い限りは魔法関係者は夜立ち寄らない。更には、いい意味でも悪い意味でもこの3人のエリアには誰も近づこうとはしない。

良い意味では、このエリアでは侵入者が来たとしても応援が必要ないくらいの戦力が揃っているから。悪い意味では、カイとエヴァに関わるのが嫌だから。カイの弟子である刹那についても最近では関わるのを嫌う人間が増えてきている。

更に今日は、楓とタカミチも動員し魔法関係者が近づかないようにし、学園長の目もあるために多少ドンパチャったとしてもばれることはない態勢にあった。

カイはエヴァと念話をやり取りしながら誘導を続ける。そろそろ鉢合わせる頃合のようだった。

エヴァはエヴァでサイモンのほうを誘導していた。

カイの前方にネギの姿をしたエヴァが現れた。そのエヴァの後ろには大層ご立腹の様子で喚き散らしている自分と同じ格好をしたサイモン氏がいた。

(ネギ君の姿で挑発するとは言っていたけれど…、きっとあれは憂さ晴らしも兼ねてかなり罵倒したみたいだな…。ネギ君の顔ですげえ黒い笑みしてるし…。)

予定通りにネギとサイモンを誘導した2人はエヴァの魔法による目くらましを使い主役を残し離脱した。

「お疲れ様。それにしても随分サイモン氏を煽ったみたいだな。かなり怒っていたじゃないか？」

苦笑しつつねぎらいの言葉をかけるカイ。

「クックック、小物なやつほど身に見合わないプライドを持っているものだからな。私は10歳の子供の姿でちよつと逆撫でするようなことを言っただけさ。」

「ノリノリだな……。さてと、ネギ君は勝てるかな？」

2人の視界の中ではネギとサイモンが戦いを始めていた。前回と違ってネギも攻撃を繰り出し、サイモンは怒りのままに力の加減なしに攻撃を繰り出していた。

「ボーヤは経験こそないが、素材としては一級品だ。それにあのサイモンは3流もいいところだ。苦戦はするだろうが才能の差でボーヤが勝ってしまうだろう。クックック、才能とは残酷なものだな。」

楽しそうに笑うエヴァ。

カイとしてもその見立てに異論はなかった。

そもそもの計画の発案者が学園長であるのだ。ネギに危険が及ぶようなことをあの学園長が言い出すわけが無い。

少しの時間の後、勝負は決した。

魔法の技術ではサイモン氏にまだ軍配が上がっていたが、もともとの魔力量が違いすぎた。

籠められる魔力の力と持久力の差でネギが最後には圧倒する形となっていた。

小躍りしながら喜んでいたネギだったが、急にまじめな顔になってサイモンに問う。

「さあ、僕が勝ったのですからこんな事をした理由を教えてくださいますよ！魔法使いは人のために魔法を使うのが正しいんです！」

その声は、カイ達にも届いていた。

「おっと、ここでサイモンが喋ると俺達のことをネタバレしてしまうな。」

「うむ、それはおもしろくない。ここは私が行ってこよう。」

言いつつ、先ほどと同じように幻術でネギに化け、ネギのほうへ飛んでいく。

「こんばんわ、ネギ先生。ご苦労だったな。」

「え？…僕がもう一人いる…？」

「これは幻術さ。それよりもその問いには私が答えよう。」

「お、お前はもしかして…ガフツ！」

エヴァの正体に察しがついたサイモンが口走る前に蹴りつけて黙らせる。

その様子を見たネギが思わず飛び出そうとするが、エヴァが発した殺気と魔力に威圧され思いとどまった。

「賢明な判断だよネギ先生。先生じゃ私には絶対に敵わない。さて、続きだがこの男の目的はおそらくこの学園にいる特定の人物の排斥だろう。今の情報としてはこれだけで充分さ。詳しく聞きたければ明日学園長のところを訪ねるがいい。この男の身柄は私が預かる、ではまた会おう。」

一方的に話をして早々に去ろうとするエヴァ。

「ま、待ってください！あなたは一体何者なんですか！？」

「悪い魔法使いさ。ナギの後を追うつもりなら、世の中には汚い部分もあることを知るんだな。」

そういい残しエヴァは影の転移魔法を発動させ、ネギの前から姿を消した。

……

……

…

翌日、エヴァに言われた通りに学園長を訪ねたネギは事件の真相を聞かされていた。

といつても、カイとエヴァのことについて触れないように適当にでっち上げられた内容も多分に含んでいたが。

「学園長。最後に現れた僕に化けていた人物は誰なんですか？」

事件の真相なんかよりもネギにとってはこちらのほうが気になっていた。

「あの者については、わしから語らずともそのうち分かるじゃろ。少なくとも敵ではないから安心するといいぞ。」

「あの人は、父さんのことを”ナギ”と呼んでいました。もしかしてあの人は父さんのことを知っていいいるんじゃないですか？」

「確かに知っておると思つが、彼らとて居場所は知らんはずじゃ。あまり有益な情報を得ることは出来んと思つぞい。」

「そうですか…。しかし、学園長は”彼ら”と言いました。父さんのことを知っている人が複数いるということが分かっただけでもいいです。」

「ふおっ！？失言じゃったのう…。さて、話はもう終わりじゃ。とりあえず今は教師の仕事に集中するんじゃないぞ？」

- - - こうして桜通りの怪人事件は終わった。

- - - しかしこの事件はカイとエヴァの排斥派が確かに存在して、爆発する危険も孕んでいるということも露呈していた。

桜通り（後書き）

桜通りの事件でした！。

別におもんなくてもいいかー！という開き直りでまた書き始めたわけですが、更新は気が向いたときにする、というスタンスにしようと思います。

ほぼ自己満足なので、こんな駄文でも読んでくださる方には本当に感謝します！ありがとうございます！次回からは修学旅行編に行こうと思っています。

ではまたです！

修学旅行始めました。(前書き)

修学旅行編にはいります。

今回は導入部分といったところでは、

では、どうぞー。

修学旅行始めました。

「お呼びですか、学園長？」

修学旅行も差し迫ったある日のこと、ネギは学園長に呼び出されていた。

「おおネギ君。今日呼んだのは、修学旅行について話があったからじゃ。」

「なにか問題でもあったんですか？」

学園長の雰囲気から、あまり良い話ではないことを察し身構える

「うむ、ネギ君のクラスは京都への修学旅行じゃが、先方がかなり嫌がっておつてのう。」

「…えつと、先方ってホテルか何かですか？」

わけが分からないといった感じに首をかしげるネギ。

「おお、すまんすまん、説明不足じゃったな。実はワシは関東魔法協会の理事もやっているんじやが、こちらに関東魔法協会があるように、関西にも関西呪術協会というものがあるんじや。そしてその総本山が京都に置かれている。別にここまでなら問題は無いのじやが、いかんせん関西と関東は昔から仲が悪くてのう。今回は魔法先生が一人いると話したらものすごく嫌がられたのじや。」

「それって…僕のせいですか…？」

遠まわしに自分の責任を追及されているようでネギは多少衝撃をうけたような顔をしていた。

「いやいや、それは別にいいんじゃない。ワシとしては、そろそろくだらないがみ合いをやめて西とも仲よくしたいと思っておるんじゃない。そのための特使としてネギ君に西へ行つてほしいというのが今日呼んだ理由じゃ。」

「ええ！？そんな重役を…！」

「そんなに心配しなくても、この親書を長に渡してくれるだけでいい。ただ道中向こうからの妨害があるかもしれない、魔法の秘匿のこともあるから生徒や一般人に迷惑の及ぶようなことは無いと思うが…。ネギ君この仕事請けてくれるかの？」

「はい！任せてください！」

快く二つ返事で返すネギに、学園長は微笑をかえす。

「あの事件で一皮むけたようじゃの。男子三日あわざれば刮目せよ、ということじゃな。そうじゃ、京都といえば、孫のこのかの生家があるんじゃないが…このかに魔法はバレておらんじゃるな？ワシは別にいいんじゃないが、あれの親の方針でな、できるだけ魔法はばれないうように頼む。」

「は、はい。わかりました。」

・・・コンコン

話に一区切りが見ついたところで、学園長室の扉がノックされた。

「丁度良いところに。入ってよいぞ。」

その声を聞いてから扉が開かれた。入ってきたのはカイだった。

「なにか用ですか学園長？」

「あ、それじゃ僕はこれで失礼します。」

「いや、ネギ君にも関係ある話じゃからその必要はないぞい。」

「は、はあ...?」

カイが入ってきたことで話の邪魔になるだろうと気を使ったネギを学園長が呼び止める。

「実は、修学旅行の間カイ君には出張に行ってもらおうと思っておる。」

「...はい?」

カイに出張など今までであった試しがないため、本当に気の抜けた声で返事を返してしまった。

「まあ、その話はあとで詳しくするとして。それとは別件で、ごく短期間でこちらの学校を体験したいという留学生の話があつてのう。」

聞けば、日本の文化に触れ合わせる機会を持たせたいという話で、それならば丁度修学旅行で京都に行くクラスがある。という話をしたらえらく喜ばれたんじゃ。」

ここまでの話を聞いて学園長が何を言いたいのか分からないほど、カイはこの学園長と短い付き合いではなかった。猛烈に頭を抱えた衝動に駆られたが、グツとこらえたのは大人な証拠である。

「…というわけで、その留学生はネギ君のクラスに入れることにした。これは決定事項じゃぞい？」

本当に楽しそうに笑いながら告げる学園長。

「えっ！そんな急に！！」

「大丈夫じゃ。聞けばその子は素晴らしい秀才らしいぞ。むしろAの子達のほうが手が掛かるくらいだと思っぞい？話はそれだけじゃから、ネギ君はもう退出してもよいぞ。」

なにか言いたそうにしていたネギだったが、学園長がやんわり出て行けという意志を示したことにより渋々といった感じで出て行く。こつという面では10歳にして空気の読める、よく出来た子だった。

ネギが退出し、扉が閉まったとたん学園長は言い放つ。

「と言うわけで、カイ君留学生役ね」

「とか気持ち悪いんで止めてください。あと無性に殴りたくありません。」

「ふお！？老人は大切にするものじゃぞ？」

「というか、修学旅行だけの留学生ってどれだけ無理のある設定ですか。さすがにこれはおかしいでしょ。」

「それは3 - Aだから大丈夫じゃろ。」

「……………」

その一言で納得できてしまった自分が無性に情けなく思えてしまうカイだった。

「それで、外見はどうするんですか？年齢詐称薬を使えばいいんですか？」

「よくわかっておるのう。その通りじゃ。ただし年齢は10歳前後でお願いします。」

「…一応聞きますけど、なんですか？」

「ネギ君のサポートとして行ってもらいたいからの。年齢が近いほうがネギ君も話しかけ安いじゃろ？」

「それにそのほうが面白いから。とか思ってませんよね？」

かなりすごみを効かせて問うカイ。

「そ、そんなことおもっておらんぞい！？」

微妙に上ずった声で答える学園長。ごまかしきれしていない。

「そ、それに10歳前後ならエヴァと普通に話しておっても全然違和感がないとおもっぞ？中学生くらいの男子がエヴァに積極的に話しかけに行っている姿を想像してみるんじゃ！！ロリコンの匂いがぷんぷんするぞい！」

そんな事を言っつて墓穴を掘る学園長。カイの外見は高校三年生時点で止まっている。言外に、いまのお前はロリコンの匂いがぷんぷんしている！！と言われたようなものだ。

「一度学園長とは深く語り合う必要があるようですね？………とりあえずはその条件でいいです。まあ学生として参加するならば、働かなくていいし、気が楽ですからね。」

「受けてもらえるんじゃない。ほっとしたわい……。」

「俺も雇われている側ですからね。よっぽどのがない限り学園長の命令には逆らいませんよ。…それに、俺の勘では俺とエヴァが学園にいないうちに排斥派に対してなにか手を打つつもりでいるんでしょう？」

「っつ…、カイ君は鋭いのう。桜通りの事件は全容こそバレてはおらんが、やはりいきなりの解雇・追放処置には裏があると勘ぐる連中がいるんじゃない。本気で調査されたらさすがにバレそうじゃし、適当にでっち上げてごまかしておくわい。2人がいないほうがいちいち口裏を合わせないで済むから楽じゃしのう。」

「お手数料をかけます。別に排斥派が爆発したところで構わないですが、めんどくさいことには変わりないですからね。」

カイが多少の学園長の無茶振りにも従うのには、こういう裏工作を自分達に隠れてしてくれていることに義理を感じているということも関係していた。

こうして、カイが学生という立場で修学旅行に行くことが決定した。

……

……

…

「というわけで、修学旅行限定で3 - Aに来た坂上リク君です。みんな仲良くしてあげてください！」

今日は修学旅行前日である。クラスでは、年齢詐称薬で小さくなったカイがネギに紹介されていた。

ただ、姿を小さくしただけで紅い目を隠そうともしていないあたり、いい度胸であった。

「坂上リクです。短い間ですがよろしく願います。」

愛想もなにもない、ぶっきらぼうな自己紹介だった。

しかし、容姿が10歳の子供であるために、ただ突っ張っているだけの思春期の男の子にしか見えないのは仕方ないことだった。

それがウケタらしい。

女子中学生にもみくちやにされるカイは、初めてネギの苦勞を知ったという。

(これからはネギ君に少し優しくしよう…。)

事態が沈静化してようやく本題に入れることになった。

「では、リク君が入る班を決めたいのですが、どこか立候補してくれる班はありませんか？」

この言葉を皮切りに、せっかく静まった教室はまた騒がしくなるのだが、今度は無秩序というわけではなく、まっとうに根回しがおこなわれている。

(サポートという目的を考えればネギ君と行動を共に出来る班がいどころだが…。ネギ君はアスナちゃんの班と一緒に行動する可能性が一番高い、か。)

「ネギ先生。個人的に入れてもらいたい班があるのですが。」

騒いでいたクラスが静まる。

「はい。どこがいいですか？」

「神楽坂さんの班をお願いします。」

クラスが再びお祭り騒ぎとなる。

「ちょっとアスナ！あんたおじさん趣味じゃなかったの！？ネギ君といいリク君といいどういうこと！！」

「そうだよ！いつもガキは嫌いだー！って言うてるくせになんでこんなに手がはやいのよー！」

名指しでアスナを指名したことに問題があった。いま初めてクラスに連れてこられたことになっている人間がアスナの名前を知っているというのはおかしいだろう。

「し、知らないわよ！なんであんなガキが私のこと知ってるのよ！」

ギャーギャー

収集がつかないくらい騒がしくなっているクラスで、プルプル震えている少女がいた。

エヴァとしては、当然一緒の班になって京都めぐりをすると思っただけに、このカイの突然の裏切り行為はかなり腹に据えかねるものだった。

（クツクツク、この裏切りは高くつくぞ、カイ？）

もう一人、カイの発言にショックを受けている人間がいた。

楓である。

楓はてつきりカイが普通に引率の先生で参加するものだと思っていたので、班での自由行動時に約束を取り付ければ一緒に京都・奈良めぐりが出来ると思っていた。しかし、生徒として参加するカイが他の班に居るのでは手がこの上なく出しづらい。

（うゝむ、修学旅行というイベントを逃すのは痛すぎるでござる…。なにか考えないと…。）

楓は焦っていた。

その一方で、刹那は歓喜していた。

カイが10歳の子供の姿で現れたときは、何で子供…？と首を傾げていた刹那だったが、カイがアスナの班に入ると言ったときからそ

予想では自分が最初に到着することになると思っていたカイは予想以上に姿の多い生徒に驚いた。…ついでにはしゃいでいるネギを生暖かい目で見ていた。

「おはようございます、ネギ先生。随分早いですね。」

「あーリク君、おはようございます！僕京都なんて初めてで、すごく楽しみなんです！」

こういうところは歳相応なんだなと思うと同時に、3・Aをこの先生一人で抑えられるのが不安に駆られるカイだった。

「リクさんおはようございます。」

「リクくんおはよー！」

「……………」

カイとネギが話しているのを見つけたのか、いつの間にか刹那・このか・アスナが近くに来ていた。アスナは昨日カイのせいでえらい目にあつたせいが無言でジト目である。

「おはようございます、随分はやいですね。」

「ネギ君がはしゃいでてねー。わたしらまで起こされてしもたんやー。」

「ああ…、すぐはしゃいでますもんね…。」

「………」

いまさら自分ののはしゃぎように気が付いたのか、顔を赤くしてうる

たえるネギ。

「リク君は落ち着いてて大人やねー。」

「いえいえ、ネギ君がいなかったら代わりにはしゃいでいたかもしれませんよ？反面教師ってやつですかね。」

「うう…リク君ひどいです…。」

更なる追い討ちにネギのテンションがガクツと落ちた。

「それより、なんで敬語なん？堅苦しーてしやーないよ？」

「一応会って間もないものですし、距離感を測りかねているといった感じですかね…」

（普段どおりの喋り方だといろいろボロが出そうで怖いんだよ…。
坂上リクが知るはずの無いことをポロつと口走ったら面倒なことになるからな…。）

「そうですね、少し堅苦しいと思います。」

「……………、刹那が言ってもものすごく説得力がないな…。」

「うう…敬語しか喋れないんですよ…。」

「ってちよつと待てい！！なんで刹那さんだけ名前で呼び捨てなのよ！！敬語じゃないのよ！！」

沈黙ジト目だったアスナがいきなり吼えた。バカの癖に細かいとこ

るに気が付くアスナである。
完全に予想外のところからツッコミをいれられたカイは少し困った。
とりあえず適当に話を振ってみる。

「あー、神楽坂さんも名前がよかったですか？これからはアスナちゃんって呼びますね。」

「なんでそうなるのよ！！あんたみたいなガキンチョにちゃん付けされたくないわよ！」

「しょうがないな。じゃ、アスナで。」

「ウガー！！やっぱこのガキむかつく！！！！」じゃ””ってなによ””じゃ””って！！！！”

「まあまあ、抑えてアスナ。リク君もあんまりアスナいじめたらあかんえ？」

「はい。」

「なんで このかにはそんなに素直なのよっ！！」

アスナは既にカイに追求することを忘れたようだ。ついでに、敬語をやめる云々の話も終わったようでカイとしては思いがけずいい結果となった。

（なんとかボロださずに済んだか。まあその代わりに完璧にアスナちゃんに敵認定を受けてしまったみたいだけど、喋らなくなる分にはむしろ大歓迎だな。）

集合時間までの間の時間に、カイは刹那と楓に事情説明をしていた。自分が、学園長の西に送る魔法先生は1人という屁理屈のせいで子供の姿になっていること、ネギ君が親書を届ける仕事をしていること等々。

「俺としては、過保護すぎると思うんだけどな。親書だって正直必要ないだろ？相手は詠春だぞ。」

「それですが、おそらく学園長の思惑は別のところにあるのでは無いでしょうか？」

「というと？」

「西になにかきな臭い動きがあるそうです。狙いはおそらくこのちゃんかと…。」

「初耳だぞそれ。要するにネギ君の修行のもしものときの保険か、俺は。普通に頼めばいいのにあの狸ジジイ…。」

「まあ、カイ先生がいるのは私としても心強いです。楓にも期待しているぞ。」

「それは構わんでござるが、西の者たちはそんなに過激な手段にでるでござるか？」

「それはわからない。しかし警戒しておいた方がいいだろう。」

「ふむ、わかったでござる。」

「ネギ君の修行のこともある。俺は極力目立たない裏方でいくつもりだ。なにかあれば連絡してくれ。」

「はい。ではそろそろ点呼のようですし、みんなのところへ戻りましょうか。」

気づけば、集合時間までもう数分の時間となっていた。カイ達3人は点呼の為にそれぞれの場所へ戻っていった。

・・・修学旅行が始まる。

修学旅行始めました。(後書き)

さて、身体は子供、頭脳は大人のカイの修学旅行編です。

おもしろく出来たらいいな…

ご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

ものすごく独りよがりな2次創作なので、切にお待ちしております。

では、また！

修学旅行の狩猟犬にご注意を（前書き）

修学旅行編はじまりましたー。

最近結構長く書けるようになってきた気がする。

最初の頃に比べれば、文章もうまくなってるのかな？

怖くて読み返すことができませんけど…

ではどじごぞー

修学旅行の狩猟犬にご注意を

カイは新幹線の最後部に一人でいた。

なぜそんなところに一人で居るのかというと、最初のうちはカイも普通に3-Aの乗り込んでいる車両に居たのだが、女子中学生達に次第に絡まれ始め（特に楓のアタックがひどかった）段々おもちゃにされ始めた。そこまではまだいいとして、その様子をエヴァがご機嫌斜めに殺気を籠めた目で眺めているせいでカイとしては生きた心地がしなかつたのである。遂にいたたまれなくなつてここへ逃げてきたというわけである。

「エヴァがヤバい。なんであんなに機嫌が悪いんだよ……。」

カイのは思い当たる節がなかつたため、対策も打つことができなかった。36計逃げる如かず、今は逃亡の一択しかなかった。

憂鬱に呻いているカイだったが、前方の車両で妙な気配を感じ、そして騒ぎが起こっていることにも気がついた。

（まさか、もう西が仕掛けてきたのか？しかし、そんなに強い存在を感じることはできないな……。小手調べか？なにせよ、俺が出るまでも無いだろう。）

そう断じて、カイは介入を控えた。

が、そんなカイのほうへ妙な気配が移動してくるのが感じられた。

（妙な気配は式紙か。これで西の仕業つてことはほぼ確定的か。

……あれはネギ君の親書か？）

式紙で作られたツバメは手紙を啜っていた。

カイはそれを見て、頭を抱えたくなつた。修学旅行が始まつてすぐに手紙を奪われるネギの失態を見てしまったからである。とりあえず、カイはその式紙を捕まえ親書を取り返した。式紙は握りつぶした。

（さて、あとはこれを返すだけだが…どうしたものか。）

カイとしてはネギの目には出来る限り映りたくないのである。

しかし、ネギは既にすぐ近くまで迫ってきていることにカイは気が付いていた。

ここは新幹線の最後尾。一本道のうえ行き止まりである。

（万事休すつてやつか。さり気なく返すことにしよう。）

「待てー！ー！！…つて…えっ？」

追いかけてきたネギがカイの姿をみて驚く。

「これ落ちていましたよ、ネギ君。」

「え？あ！それは大切な親書…！」

「落し物には気をつけたほうがいいですよ？では俺は戻りますね。」

「は、はい。」

カイはネギの前から逃げるように去っていった。彼に安息の地はない。

3-Aの車両に戻ったカイはまたおもちゃにされ、エヴァの殺気に胃をキリキリさせるのだった。

「兄貴！あいつめっちゃめっちゃ怪しいじゃねーか！..」

「リク君が？」

「そうだぜ！親書を持っていない手みたか？握られていたけれど、ちよつとだけ紙がはみだしてたぜ？あいつは西の回し者に違いないぜ！」

「そ、そんなことないとおもっけど..」

「大体、なんで親書が兄貴のものだと知ってた？3-Aのメンツは気にして無いようだけどな、修学旅行限定の留学生なんておかしすぎるぜ！..」

「っつ..、それは確かに..。リク君が敵、か..」

「おう！見張っておくのがいいぜ！」

そんな会話がカイの去った後された。

思いがけず敵を作りまくっているカイだった。

...京都、清水寺。

「京都——！！！」

「これが噂の飛び降りるあれ！」

「誰か飛び降りろ——！！！」

「拙者と回るでござるよ。」

3-Aが馬鹿騒ぎしている中、唐突に楓がカイに言った。

「ん……。ちようどいいな、楓一人なら悪ノリもさせなくて済むからな。」

いい笑顔で答えるカイ。新幹線の中での楓の悪ノリにすっかりご立腹である。

「た、たまには拙者が反撃するのもいいでござる。ああいうときしか無理なのだから多めに見て欲しいでござるな。」

「まあ、いいだろう。修学旅行は2回目だからな、有名どころなら俺が案内できるぞ？」

「おお、流石はカイ先生でござる。頼りになるでござるな。」

「年の功ってやつだ。あとどこで聞かれているか分からないから、リクで呼べな？」

……

……

…

「ここが音羽の滝だ。右から学業、健康、縁結びにご利益があると
いわれている水だ。っていうか、刹那は京都出身だから珍しくもな

いだろ？護衛はいいのか？」

カイと楓にいつの間にか刹那が加わっていた。

「むっ…京都出身だからといって観光名所めぐりをしているというのは偏見ですよ？むしろ近づかない人のほうが多いのではないのでしょうか？だから、私もカイ先生と回ります！護衛も今は大丈夫です！」

思いがけない刹那の力説に若干引いたカイ。

「そ、そうか？ならいいが…。あと楓にも言ったけどリクで呼んでくれよ？」

「それより縁結びの滝でござるな！。早く飲むでござる！」

「なっ！抜け駆けは許さん！リクさんもはやく！」

「え？俺もか？」

…結果

「ZZZZZZZ…」

「あはは…なんか世界が回っているぞ…かえで…どこだ？」

「滝に酒が仕込まれていたようでござるな。しかし一口でつぶれるとは2人とも弱すぎでござる…」

カイは飲んですぐに眠りの世界へ旅立ち、刹那は典型的な絡み酒だった。

「楓さんどうしたんですかー？」

「とそんなところへネギたちがやってきてしまった。」

（カイ先生はともかく、刹那の状態はまずいでござるな。とりあえず眠っていてもらうでござる。）

刹那の意識を刈り取る楓。

「いや、2人ともはしゃぎすぎて疲れてしまったようで。拙者が責任を持ってバスまで運ぶでござる。だからネギ坊主は心配せずに京都を楽しむでござるよ。」

もっともらしい嘘をついてごまかす楓。

「そ、それは大変ですね。それじゃお願いしますね！」

「せつちゃんもリク君もかわえーなあー。」

「な、なんかお酒臭いような……。」

「アスナ。それは気のせいではござる。もしくは甘酒の匂いでござる。」

「妙に鋭いアスナに大真面目に嘘をついて楓はバスへと2人を担いでいく。」

その後2人は夜になっても目を覚まさなかった。

.....

「うっ……頭いてえ……。」

目を覚ましたカイは二日酔いの頭痛に悩まされていた。吐き気もちよっとあるが、頭痛のほうが深刻だ。

「音羽の滝からの記憶がない…。酒でも盛られたか…。」

頭痛、吐き気、そして自分の酒の弱さを自覚しているカイは記憶のなくなった原因を正確に推測した。

周りの風景から、ここはもう既に宿泊予定の旅館であることがわかった。部屋の中にはカイひとりだ。

「とりあえず、水…。」

状況把握を終えたカイは、とりあえず頭痛と吐き気から逃れたい為に水を求め旅館に備え付けてあるだろう自販機に向かった。

「ぷはーっ… うまいっ！」

「あら、リク君起きたんですか。丁度いいですね。」

「あ、しずな先生。ご迷惑をかけたようで、すみません。」

「いえいえ、それよりもお風呂に行行ってほしいのよ。いまは教員の時間だけど、まさか年上の女の子達と入りたいわけでも無いでしょうっ？」

フフフと笑うしずな先生。良く見れば風呂上りだと良く分かる。

「そ、それはもちろんです！じゃ、行ってきます！！」

今は身体が子供だが精神は年齢詐称薬の影響を受けていない。一緒に入って、反応でもしてしまつたら目も当てられない。そんなことを考えてカイは少しげんなりした。悪い大人ならばこれはいい役得と喜んで入りそうなものだが、70年生きても未だに初心な少年のようなカイには無理な話だった。

「ふう〜。いい湯だー。」

風呂に浸かってしみじみとするカイ。教員の時間だが、他の先生達はみんな入り終わった後なのか広い露天風呂にはカイ1人だった。

「大抵の毒は効かないくらいの耐性あるのに、酒はどうしてもダメだな…。」

カラカラカラッ

「ん…、誰か入ってきた？」

独白をしているカイだったが、そこで風呂の戸が開く音がした。

「ああ、ネギ先生もお風呂ですか。」

そこにはネギがいた（カモもいたが大人しくしている）。カイを見たネギは驚いた顔をしていた。

「えっ…リク君！？なんで！今は教員の時間じゃなかったの！？」

リクにはどうしてそんなにネギが過剰に驚くのか分からなかった。ネギとしては、敵と思われる人物に待ち伏せされたような格好になるわけで驚いていたのだが。

「いえ…、さすがに3-Aの人と入るのは勘弁してほしいところで…。」

「あ、ああ…そうですよね。」

「……………」

そこで会話が途切れ、無言が世界を支配する。

カイは別に話すこともあまり無いし、風呂をのんびり楽しみたいという沈黙だが、ネギのほうは余裕の無い沈黙だった。

（カモ君、どうしよう。）

（ここはもうはつきりさせるのがいいんじゃないっすか？お前は敵なのか！って）

（ええー…、それで襲われたらどうするの…）

（大丈夫っす。見たところあいつは丸腰っす。風呂場には式紙を持ち込めないんじゃないっすか？紙だけに。やるなら今がチャンスっす！！）

（う、うん…）

「ネギ君どうかした？」

ネギが不審な挙動をしていた為、カイが声をかけた。

「ふえ！？あ、あの…（よし聞いてやる！）」

カラカラカラッ

「ん？また誰が入ってきたな……………ぶっ…！」

ネギがせっかく決意したのに、話の腰を折るようにまた風呂の戸が開いた。

「どうしたんですか、リク君？　って、ちよつと!？」

振り返った先には、このか、アスナ、刹那がいた。

「まさか、お酒で酔いつぶれてたなんてねー。」

「気いつけなあかんよ？　せつちゃん。」

「め、面目ないです…。」

あちら側は、まだカイ達の存在に気が付いていないようだった。

(まずい！ネギ君！早く逃げるぞ!!！)

(な、なんで入り口は男女別なのに中はおんなじー?)

(それは混浴っていうんだ！クツ予想外だ…まさかこんな罠があるとは…。とにかくこういう場合、どっという事情があるうとも男が悪くなるものだ。早く逃げるぞ!!！)

(う、うん…)

コソコソと逃げ始めるリクとネギ。

カイ1人ならば逃げることで自体そう難しくない。しかし、特殊な人間だとネギにはれたくないカイは普通に逃げることを選択した。だが現実はその甘くないものだった。

ネギの頭に乗っていたカモはしっかりとアスナたちのほうを見ていた。それはもう穴が開くほど。

「ッ！邪な視線を感じますっ！そこに居るのは誰だ!!!!！」

刹那の鋭い感覚をこの時ばかりは呪いたくなるカイだった。

(ば、ばれちゃいましたよ！ど、どうするんですか！)

(クッ…こうなったら誠心誠意謝るしかないのかっ？いや…まだ道はあるはず！！)

「大人しく降伏しないならば、こちらにも考えがあります！このちやんのあられもない姿をみた罪…万死に値しますっ！！！！！」

(処刑宣告！？まずいぞネギ君！！捕まったら最後命はないぞ！こっとなったら逃げ延びるっ、徹底抗戦だ！！)

(な、なんでこうなるのー！！！)

「逃がすかつ！神鳴流奥義、斬岩剣！！」

刹那の技で丁度カイとネギを隠していた岩が切り裂かれる。

(まずいっ…姿を見られるだけでもアウトだっ！かくなる上は…ネギ君、君の犠牲は忘れないよっ！！デコイ射出！)

(へっ？ちょ、えええええ！！！)

コソコソ話していたカイがネギを掴むと、そのまま刹那に向かって投げつける。そしてネギの視線がカイから外れた。カイは投げたすぐに全力でこの場から脱出した。

「向かってくるか、不埒な輩め！！！」

「(ま、まずい！斬られる！？) ツ風花武装解除！！！」

「甘いっ！そんなことでは私は止まらない！貴様には生まれてきたことを後悔させてやる！！！」

ネギを簡単に組み伏せた刹那は、そのままネギの急所を握りつづす姿勢に入る。

つとそこで、ようやく相手が誰か気が付いた刹那。

「ね、ネギ先生？」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……………」

「せ、せつちゃん過激やわ……………」

「いやいや…………過激で済ますにはちょっと…………岩斬るってどうなの…………？」

アスナとこのかの言葉に自分のしていたことをようやく自覚して狼狽する刹那

「あ、いや…………これは急所を狙うのがセオリーでしてね…………岩は気合で切れます…………！」

「む、むちゃくちゃね…………、それよりなんでネギがこんなところにいるのよ…………！」

「僕は普通に入ってただけなんですけど…………混浴っていうところらしく……………」

「え？こことってそうなの？…ってか修学旅行先の旅館が混浴って…………学園長の仕業としか思えないわね……………」

「帰ったらちゃんと説教しとくから堪忍なあ……………」

「まあ不可抗力みたいだし、許してあげるわよ。でもなんで逃げる

「よ、ちゃんと理由説明すればよかったのに。」

「それは逃げろって言われたし…、桜咲さんが万死に値する！って叫んでたし…。」

「そ、それはわすれてください！私も相手がネギ先生だとは思わなかったんですから！」

掘り返すネギに刹那がヒートアップして反論する。

「ちょっと、刹那さん落ち着いて！それより、逃げろって言われたって言ったわね？他に誰かいたのね？」

「へっ？」

ネギとしてもうっかり口走ってしまったことなんだろう、間の抜けた声をだしてそれから必死にごまかそうとする、が

「いたのね？」

「はい…。」

アスナの剣幕に縮こまってあっさり自白してしまうネギ。一度喋ってしまったネギは、罪悪感を覚えながらアスナの質問に洗いざらい答えてしまう。

「事情はどうあれ、仲間を売り飛ばすその性根が気に入らないわね。ちょうどあのガキンチョには恨みが溜まっていたし丁度いいわ。とっ捕まえて説教してやるわっ！」

「アスナ後半が本音やる？」

「あ、アスナさん？それは止めといたほうがいい、というか無理だと思えますけど…。」

「ああいうガキンチョには一度身の程を教えてやるのが年長者としての勤めよ！！刹那さんも協力してね！」

「ま、まあ手伝いくらいなら…。」

「そうと決まれば、善は急げよ！早速搜索開始ね！」

風呂場から出たアスナたちは、自由時間を利用してカイを探していた。

「あ、エヴァちゃん！坂上リクみなかった？」

搜索途中に、エヴァにあつたのは偶然だった。

「ん？神楽坂明日菜か。坂上リクがどうしたのだ？」

「それがねー、あのガキンチョときたら風呂場覗いた上に、その場にいたネギを囷に逃げたのよっ！これはとっ捕まえて説教しなくちゃ！ってことで探してるのよ。」

「ちょっと、アスナさん…その説明はどうかと思いますが…。」
いろいろ端折った説明をするアスナに刹那が苦言を呈する。

「え？どういうこと？」

「一応あれは不可。ほう、坂上リクがそんなことをしたか。つてエヴァンジェリンさん…？」

そこには妙にいい笑顔を顔に貼り付けたエヴァがいた。

その笑顔は坂上リクがカイだと知らない人間には、ただの笑みに見えることだろうが、刹那にはこう見えた。

”私怒っています”と。

「わかった、お前に協力してやるとしよう、神楽坂明日菜。ちょうど私もあいつには少し灸を据えてやらねばならないと思っていたところだ。」

「そう？ありがとう！」

「なに、礼には及ばないさ。お前も気をつけるよ？」

協力を確約してくれたエヴァにアスナは満足して、また搜索に戻っていった。

「さてと、茶々丸。少々準備して欲しいものがある。」

「はい、なんでしょうかマスター。」

「それはな……。」

風呂場から離脱してからとりあえず服を着て部屋に戻ってきた。いまさらながら部屋を観察してみる。この部屋には自分の荷物ともう1人分の荷物しかなかった。特徴的な杖から、ネギ君と相部屋だとすぐに分かった。

「はぁ…とりあえず、ネギ君が戻ってきたら謝るとしよう。」

ネギ君が戻るまで待機することにして、部屋でボーっとしている。普段なら、エヴァと話したりするんだけど、今はなぜか機嫌が悪いからそんな選択はしない。

「大人しく捕まりなさい！坂上リク！！」
威勢のいい掛け声と共にドアが開かれる。

いきなりドアを開けるとはなんと非常識な…

それよりも、捕まりなさい？

見れば、威勢のいい声と共にドアを開けたのがアスナちゃん。

その後ろには、申し訳なさそうな顔をしたネギ君が従っていた。

…ネギ君が口を割らされたか。

困にした俺が言うのもなんだが、そこは黙っておくものじゃないか？

「捕まれとは穏やかじゃないですね。大体さっきはまだ教員の入浴時間だったんじゃないですか？事故ですよ。」

とりあえず正論でかえしてみる。

「私は、仲間を囮に逃げたあなたの根性が気に食わないのよ!!! その性根を叩きなおしてやるわっ!」

これは話しても無駄だ…。入り口は塞がれている。逃げるなら外だっ!

「待ちなさいっ! にげるなあ!!!」

「そういわれて逃げない奴はいないっの!」

窓から外へ飛び出した。ここは一階だし、怪しまれることも無いだろう。

後ろからアスナちゃんの叫びが聞こえてくるが、追いつかれるほどのろまでではない。

アスナちゃんに姿を見られて無いのを確認するほどの余裕を持って旅館敷地内から脱出する。

とりあえず、ほとぼりが冷めるまで外でぶらぶらすることにした。浴衣は好きじゃないって理由でジャージだったのが幸いして、そこまで目立つことは無いだろう。…見た目が10歳ってことで補導される危険があるが、警察の目から逃げるくらいいたやすい。

さて、とりあえず状況を把握しよう。刹那は当事者だ、連絡を取るなんてのはもつてのほかだ。となると楓か。

『楓、聞こえるか?』

『ん…。カイ先生でござるか?』

『そうだ。いまちょっと事情があつて追われていてな、アスナちゃん達の様子を探つて欲しいんだが。』

『ふむ。事情というのは、風呂を覗いて逃げた、であつてるでござるか？』

へっ…楓がなんで知つているんだ…？

『なんで楓が知つているんだ？つというかそれは誤解だぞ！？』

『いやあ、現に被害者がいるでござるからなー。拙者としてはカイ先生をかばいたい気持ちもあったが、少々収まりのつかない人もいるようだし、気をつけたほうがいいでござるよ？』

『いや、それはどういう…？』

『すぐに分かると思つてござるよ。』

楓の言葉が終わると同時に、足元に魔方陣が浮かんだ。

これは強制転移魔法か！？

まずいつ…！

………

気が付けば、目の前には修羅エウァが立っていた。

「さて、貴様はなぜここにいるか分かっているか？」

「いやー強制転移させられてかなあー…？」

「ふふん、そんな事を聞いているのではないのだがな。まあいい、なぜ転移させられたのか分かっていないのだから？」

「ちょっとぼけてみたら、案外のつてきてくれた。

よし、このままうまくいことエヴァの怒りを静める方向でいこう。

「そ、そうだな！さすが闇の福音！他人を強制転移させるなんてすごいな！」

「とりあえずおだてる！全てはそれからだ！」

「クツクツク わたしも、カイでなければ他人の位置も掴まずに強制転移なんて真似できないさ。」

「えっと…それはどういう…」。

「お前は私のパートナーだからな、答えは簡単さ。これだ。」

「……………パクティオカードだっ！？」

「私との契約がある限り、何度でも強制転移させてやるさ。つまりカイは私から逃げることはできない。ここまではわかったか？」

「怒りを静められる！ってだれが言ったんだよコンチキショー！！
完璧お仕置きコースじゃないかこれはっ！」

「は、はい…。」

「ふふふ…、私も鬼ではない。カイに弁明の機会も与えずに制裁を加えたりはしないさ…。」

この人制裁って言ったよ！なにされるの！！

「えっと、話が良く見えないのですが…。」

「ふふん、ちょっとしたゲームをしようじゃないか。なにちょっとしたレクリエーションさ。いまから指定する旅館内に設置された3つのチェックポイントを巡ってもらっただけさ。」

ゲームだと…？エヴァのことだ、絶対に一筋縄でいくようなゲームではないはずだ…。

「チェックポイントには指令が書かれた紙が置いてあるから、そこに書かれていることを実行してもらおう。ああ、これだとお使い競争になるのか」

ニヤニヤと嗜虐的な笑みを浮かべながらエヴァが説明してくる。断言できる、絶対ろくな指令ではない！

「さて、これだけだとカイには簡単すぎるよな？もう少し難易度を上げてやろう。3・Aの面々にはカイの妨害役になってもらおう。あいつらにはこれを渡してある。」

いいつつエヴァが投げてよこしてきたものを受け取る。

…銃か？

「その中には魔力を籠めた特殊弾が装填されている。見た目はBB弾だがな？その弾にあたると魔力がはじけてその残滓が残るように

なっている。まあ塗料弾だともおもってくれ。カイはその弾に3発当たった時点でゲームオーバーだ。」

「ちよつと待ってくれ。そんなもん旅館内でぶっ放しても大丈夫なのか!？」

「大丈夫だ。邪魔になりそうな連中は既に気が付かないうちに夢の世界に旅立っている。それにその弾にしても、私の意志で爆破させられて片付けの手間もいらぬ。」

説明しながら、実際に弾を爆発させるエヴァ。…本当に綺麗に消えている。

「魔法はいいのか?ネギ君にはさすがにばれるぞ?」

「ああ、それは問題ない。カイはその姿だし、私にしても幻術をつかう。バシても構うものか。ふふふ、山田とよんでくれよ?3-Aではその名で通っている。」

幻術で大人ボデイになるエヴァ。

ツク…どンドン外堀を埋められている…。なんとかして回避できないのか?

「さて、そろそろルール説明も終わりだ。カイはこの旅館から出てはいけないぞ?出た瞬間制裁決定だ。制限時間は就寝時間の10時までということにしよう。今は8時だから後2時間だ。3つ目の指令をクリアした時点でカイの勝ちとする。これがチエックポイントの地図だ。説明はこれで終わりだが…さてなにか質問はあるか?」

「その銃の装弾数は?」

「8発だ。弾倉も補給拠点にいかないと補給できないようになってる。良心的だろう?」

どうせ弾倉の補給は無限だろうに…。

「俺本体に当たらなければノーカウントだよな?」

「それでいいだろう。こちらから力の制限は行わないから安心しろ。」

「分かった。質問はこれでいい。」

「クツクツク、健闘を祈っているぞ? よし、やれっ!!!」

エヴァの掛け声と共に龍宮が押入れから飛び出してきた。

「カイ先生に恨みはないが、私にも事情があつてな。大人しく負けてくれ。」

龍宮まで動いているのか?あの守銭奴で金以外には動かない龍宮が?

「クツクツク、頑張れよ龍宮真名。」

「約束をたがえるなよ、闇の福音っ!!」

「ああ、任務達成の暁には、まなちゃん14歳人形を全て廃棄した上にマスターテープも破壊してやろう。」

エヴァの手には、ゴスロリ服を着てランドセルを背負った人形がい

つの間にか握られている。

その顔がどことなく龍宮に似ているのは気のせい…だよな？

つとそこでエヴァがその人形のおなかを押すように手に力を入れた。

『わたしがつみやまな14 「バキユンッ」 ピーガガガッ…』

その人形が喋りだしたと思ったら、龍宮の撃った弾で沈黙した。

…ただの塗料弾で人形ってあそこまで大破するんでしたっけ…？

「おや、もつたいないことをするな龍宮。」

「クッ…白々しい…。地獄に落ちろ！外道め！！！」

あー…龍宮も脅された口だな…。

さっきの人形のこととは忘れてあげよう…。

「私は負けるわけにはいかないんだよ、カイ先生。というわけで死んでくれっ！！！」

「おい！いつの間にか俺を殺すことになっているぞ！？」

「問答無用だっ！！！」

…カイのちょっと洒落にならない追いかっこが開幕した。

SideOUT

修学旅行の狩猟犬にご注意を（後書き）

怒れる狩猟犬・龍宮です。

エヴァを怒らせたカイはその時点で負けだとおもいます。

エヴァは無茶振りしてなんぼだ！！！！

ご意見、ご感想を書いてくれたら作者は喜びます。
ではこの辺で。また読んでくれるとありがたいです！

おいかけっこ(前書き)

五月病にかかりました

全てにやる気が起きない今日この頃。

書いた量もすくないですがどうぞ。

おいかけっこ

Sideカイ

龍宮の早撃ちが俺を襲う。

8発しか装填できないはずの拳銃が弾倉の異常な交換スピードのせいでまるでマシンガンだ。どうでもいいが、2丁拳銃で弾倉交換とは器用だな…。

対する俺は弾を防ぐことすら許されていない為に、ひたすらその弾を避ける。限られたスペースしかないせいで、かなり厳しいものがある。

現在地は旅館の一室。そして俺は部屋の中央部にいて、押入れから出てきた龍宮は廊下につながるドアの前に陣取っている。

ルール上、窓から外へ一旦逃げるという選択肢は無い。

こうなると、龍宮を物理的に排除しなければ、この部屋から出ることも難しい。

制限時間は2時間しかない。この後なにが待っているか分からない以上ここで手間取るわけにはいかない。

分身を2体作り出し、一体を自分自身を守る壁にし、もう一体で龍宮を押さえに掛かる。

龍宮相手であれば、俺は負けることはない。これで拘束して終わるだ。

急に龍宮が目の前から消えた。
後ろからの殺気を感じ緊急回避をとる。
振り返れば龍宮が俺の頭があったところを撃っていた。

「転移魔法？モーションもなしとは…」

「転移魔法符さ。一枚80万もするものだが… 勝ったら代金を請求させてもらおう。」

「なんでさっ！なら使つなよ！」

「言っただろう、私は負けるわけにはいかないんだ。」

「それと代金請求は関係ないなろうがっ！」

返答は弾丸で返ってきた。

龍宮は本気で勝ちに来ているようだ。

そして、負けたら俺は破産しそうだ。

何とかしようと龍宮に分身を差し向けるが、転移魔法符のせいに向に捕まる気配が無い。

というか、捕らえてもすぐに抜け出される。

これでは埒が明かない。

龍宮が出口から遠い場所に転移した瞬間に廊下へと飛び出し逃走を試みる。

「出てきた！みんな撃てーっ！！！」

廊下へ飛び出したとたん、明石の号令と共に一斉射撃を浴びせかけられた。

焦って上にとび弾丸をやりすこす。

「あぶねー…！」

思わずつぶやいてしまう。

廊下は一直線のうえ、遮蔽物も無いため人海戦術の一斉射撃は素人の3-Aであろうとも危険だ。

「うわっ！あれを避けるのか少年っ…。みんなひるむな！撃てー！」

一般的には非常識な、天井に張り付くようにして弾を避けるという芸当をしてのけた俺に対して、一瞬ひるんだ3-Aのメンバー。

その隙を見逃すほど俺も甘くない。

飛び出した部屋は角部屋だったようで、逃げるには正面突破しかない。距離は10メートル強。

その間を一瞬で駆け抜ける。

「はやっ！」 「人間の動きじゃないよ…！」

追撃の弾丸も驚きの声さえも後ろに置き去りにして逃げる。

逃げながら、現在地とチェックポイントの場所を確認する。

飛び出した部屋は227のようだ。今は角を右に曲がり階段に向かって走っている。

チェックポイントは2階に1つ、1階に2つのようだ。

都合のいいことに、2階のチェックポイントに向かって走っていたようだ。

そのまま指定された部屋に俺は飛び込んだ。

つと入ると同時に声を掛けられた。

「良かった、無事みたいね。私は山田さんにチェックポイントで指令を渡すようにって言われたのよ。」

そこには那波がいた。

「そ、そうですか…。」

確かにその手には指令と思われる紙が握られていた。

「私は中身をみるなって言われていたから見てないのよ。はいどうぞ。」

「あ、どうも。」

那波に指令を手渡される。

なぜか那波には安心させられるオーラがある。それになぜか敬語になってしまう。

あふれ出る母性のせいだろうか…？

指令にはこう書いてあった。

『那波をほめる。以上』

案外簡単そんな指令だった。

もっとひどい指令を想像していたから拍子抜けと言ってもいいだろう。

時間も無いことだから、さっさと済ませよう。

「那波さんはすごいですね。」

「あら？いきなりどうしたのかしら？」

「いえ、素直に感じたままの意見です。」

「どこら辺がすごいのかしら？」

唐突すぎる言葉だったが、やっぱり褒められることは誰でも嬉しいものらしい。まんざらでも無い様子だ。

「えーっと、なんとというか安心できます。頼れる母親のような…そんな感じですかね？」

「へえ…。それは私が老けているといたいのかしら？」

……なんだろう、700年生き抜いた俺の生存本能がすごい勢いで警告を発している。いまずぐ逃げろ、と。

「いえ、そんなことは言っていないですけれど。とても中学3年にはみえないほど落ち着いているというか、大人だなあっと。……あの那波さん？その笑顔が怖いのですけれど？」

「ホホホホ。リク君とはじっくりとお話したいわ。どの辺が中学生に見えないとか…ね？」

これだけは分かった。地雷を踏んだらしい。

そして、いまやるべきことはすぐにこの場を離れることだ。今の那波なら得体の知れない力で吸血鬼すら殺せそうだ。

「え、遠慮させていただきますっ！！！」

そして脱兎のごとく逃げる。

部屋を出た瞬間3-Aメンバーに見つかってしまったが、今は構っている暇は無い。

後ろには目が怪しい光に輝き、口から煙を吐いている那波が迫っている。

3-Aのメンバーも那波の様子に恐怖を感じたのか仲間を呼ぶことも忘れて震えている。

とにかく早く終わらせなければ…

次のチェックポイントはロビーだ。

まばらに撃ちだされる弾丸を避けながら、階段へと疾駆する。

そういえば、龍宮をあんなに簡単にまけるなんて思わなかったが…。不気味なものがあるな…。

階段を降りればすぐにロビーだ。

階段を飛び降りて1階に到着。

降りると同時に襲い掛かってくる影があった。

「くーふえ足止めよろしく！」

「わかったアルヨ！」

クーフエイだった。残念だが、クーフエイでは相手にもならない。

襲い掛かってきたのをそのまま階段へと投げ飛ばし、追手への障害物にする。

距離があると油断していたネギに一瞬で距離を縮めて、手から指令を掠め取る。

ネギ君とアスナちゃんからしたら消えたようにしか見えない移動速度だったため、呆然といった感じである。

「ちょっと！あんたやっぱり普通じゃないわね！！」

アスナちゃんの叫びをBGMに聞き流し、指令を確認する。

『いまから神楽坂明日菜に対しては、”うるせーパパン”のみで応えること。以上』

んな！？なんだこの指令は。

でもこれを実行しないと俺がひどい目にあう！

…なんかもものすごく情けない…

「ちょっと待ちなさいよ！！」

「う、うるせーパパン。」

どもったことは責められまい。こんなこと言いたくは無い。

「んなつ！！！！」

アスナちゃんも絶句だ。っていつかそうなのか？

「風呂場でどこ見ていたのよー！！！！このませガキ！女の敵！！！！」

断じて俺は見ていない！でもこれじゃ、説得力皆無だよな…

確かに風呂場にいたんだし…。

「うるせーパ パン」

これも指令だ。きつちりこなす以外に俺に選択肢はない。
…まったく不本意だが。

「パ パンいうなー！ばかー！ー！！」

不憫だが仕方ないんだ。

さて、最後の指令は自室のようだ。
この茶番を終わらせるために、走る！

自室の前には龍宮が陣取っていた。
そつだよな、あれで終わるはずが無い…。

「最後の壁は私だ。刹那と楓は不干涉だそつだ。さてと、クッククック、こんな手は使いたくなかつたんだがな…。」

不敵な笑いをこぼした龍宮の構える銃は先ほどのものと違う。
なんというか、妙にリアリティがあつてとてもおもちゃには見えな
い。

…ガキユン

発射された弾は、今までの銃の比較にならない速度と威力。
壁には穴があいている。

これは普通の人間が当たったら結構やばいんじゃないかなー…

「っておい！！それ本物だろうが！！！」

「そうだが？珍しくもないだろう？」

……………しれつといいやがりましたよこの人。

「そしてこれをこうするとどうなるかな？」

その銃口は俺ではなく、そのさらに後ろを狙っている。

「へ？」

「まっってくださいー！！！」

後ろにはアスナちゃんと少し遅れてネギ君
っておい！

龍宮はわざとらしく引き金をゆっくりと引く。
鳴り響いた銃声は2つ。

その銃弾を、2人の前で両手を振るって防ぐ。銃弾程度では”気”
を咄嗟にまとわせた俺の身体は傷つけられないが

「洒落になっただけぞ！？」

「これはあなたが必ずかばいに入ることと、それに間に合うことを
前提とした作戦だ。600年姫を守り抜いた騎士様は伊達じゃない
ね。私はあなたのことを信用しているんだよ？」

「そ、そんな信用いらねえー…。」

「なににせよ、これでチェックメイトだ。この銃弾も特製だからな、塗料はきっちり手に付着しているさ。」

言われて気が付いた。

手には魔力の残滓が残っている。

そして、この戦法を取られた時点で俺の負けは確定したも同然。

悔しいが、龍宮の打算は素晴らしく的を射ていた。俺は確実に2人をかばいに入る。

「むう…、俺の負けだ。好きにしろ！」

少し自棄になり胡坐で座り込む。

「潔いな。ではこれでおしまいだ。」

龍宮はなんの慈悲もなくヘッドショットを決めて、俺は敗北が確定した。

ヘッドショットをくらって仰向けに寝転んだ俺が見たのは、俺を見下すエヴァ。

「ふふっ、がんばったようだが勝負あったな。お前はなににも心配しないで眠るといい。あとは私がなんとかしておこう、クッククク…。」

元はと言えばあなたのせいでしょうが…

そんなツッコミは口に出来ず、不思議と眠くなり視界は暗転していた。

翌朝、目が覚めたカイ。

仰向けに横たわっているのだが、妙にいいにおいと腕にくつついて
いるやわらかい感触に違和感を覚えて右を向けば、エヴァが寝てい
た。

「なんでぞ。」

「ん……。目が覚めたのか。」

「いやいやいや、なんで一緒に寝ているのさ。寝るときとは別々
って決めていただろう?。」

600年近く一緒に居る2人だが、主にカイの主張により就寝や風
呂などのことは別々ということになっている。

「クツクツク、何をいつているんだ。カイが自分から一緒に寝てく
ださいと言ったんじゃないか。」

「な、何をばかな。そんなことあるはず無いだろう。」

ニヤニヤと笑いながら告げるエヴァにカイはそんなことは無いと反
論する。

「ちゃんと証拠もあるんだぞ？茶々丸。」

「はいマスター。」

壁際に控えていた茶々丸が映像をモニターする。

それはカイが気を失った場面の後だった。

ゲームの終結とともに、3-Aのメンバーは終了地点に集まってきたように、カイとエヴァを中心に人だかりが出来ている。ゲーム終結では収まりのきかないアスナと那波は喚き散らかしたり、見るものを震え上がらせる笑顔でカイの身柄の引渡しを要求している。

「さあ！そのクソガキをこっちに渡して！エヴァちゃん！」

「リク君とお話がしたいので、少しお貸しいただけませんか？」

「それはできないな。見る、こんなに怯えているんだぞ？」

「うっ……ひぐっ……こわーいおばさんたちにおいかけられて、すごくこわかったの……」

「まで、この甘ったるい喋り方はだれだ。」

「そんなもの見れば分かるじゃないか、坂上リクもとい坂本カイだ。」

「……………」

「そんな喋り方してなかったでしょう！気持ち悪いからやめなさい

よ……」

「あらあら、だれがオバサンなのかしら？おほほほほ。」

すくむアスナと那波。

『こんな、らんぼうなひとたちといっしょにいたくないよう』

『よしよし、明日からは私が一緒にいてやるからな。』

『あ、あしたから？いやだよ　きょういっしょにねてもいいですよ？』

『あつはつは、リクは甘えん坊さんだなあ。そこまで言うなら仕方ないなあ！』

「ということだ。」

「ということだ、じゃないだろ。いろいろおかしいだろ。」

「なにがだ？カイがあんなに甘えん坊さんだなんて知らなかったよ。」

「あきらかに俺のこと操っていたよな！？」

「照れるな。あれが本心だろ？それにあの後あんなことやこんなことも言ってる……」

「まだなんかやったのか！！」

「……………」

「そこでだまるなあー！！！！」

「大丈夫でございますよ、カイ様。たかだかその歳で幼女偏愛者で鬼畜とかその他もろもろな設定が追加された程度でございますから。」

「なにをしたんだあああああ！！！！」

それからカイは3-Aにあからさまに避けられていたので結局エヴ

アと一緒に修学旅行することになった。

「なあ…一体なにをしたらこんなに避けられるんだ…。」

「そんな細かいことを気にするな。ほら、次はあの店に入るぞ！」

白い目を向けられることにげんなりとするカイだったが、エヴァの機嫌が直ったことだけはいいことだった。

おいかけっこ(後書き)

全然盛り上げれない!!

どうしたらおもしろくなるのか…。

ご意見感想等ありましたらよろしくおねがいしますー。

3日目(前書き)

かなり開きましたね…。

申し訳ないです…。

もう一つの方が楽しくって…。

ではどいづー。

3日目

修学旅行2日目が過ぎ3日目。

2日目には西からの妨害もなく、ネギがのどかに告白されて再起不能になった以外は誰かに魔法バレするとかそういったことはなかった。

「京都の菓子はいつ食べてもいい。今度詠春に言っつて学園に送っつてもらおう。ほら、カイ何時までしょぼくれているんだ？」

「いくら子供の姿だからって…。死にたい…。」

「原因をつくつたマスターがそんなこと言っつてもダメだと思います。」

「ふ、ふんっ、あれぐらいしれないと思ひ知ることはないのだから仕方ないだろう。」

「そんなことを言いつつ内心ではやりすぎたと思っつているマスター。かわいいですね。」

「お前実は私のこと内心で馬鹿にしているんじゃないか？」

「そんなことはありません。あ、マスターあんなところに八橋の試食コーナーが。」

「なにっ！行くぞカイ！！」

「フッ…。マスターの扱ひはもう完璧です。」

「わかりました。」

「んで、どこに行けばいい？」

「総本山の麓まで。転移よろしく。」

……

……

…

「西洋魔術師なんて詠唱させへんかったら屁でもないなっ！！」

「…っぐ。」

「ちょっと！アンター一方的にボコって楽しいわけ！？」

「女は黙っててや。これで終いやっ！！ネギ・スプリングフィール
ドー！！」

ガシッ…

「はい、ちょっと待ってね！」

決めに入った小太郎の拳を受け止めるカイ。

「なんや？援軍か？邪魔せんといってくれや！」

「犬の分際で調子に乗りすぎだな。しつけが必要か？」

「はいそこいきなり喧嘩売らない。うーん、俺達がやると面白くないから一回引こうか？」

「回りくどいのが好きだな…。まあ構わんが…。」

「いきなり出てきて、何を「ちゃ「ちゃと…。」

「ちょっと態勢立て直すから待っててくれ。」

「はあ？そんなことさせるわけ… クソツ目くらましかつ！」

小太郎に目くらましを食らわせて、一行は一時退却した。

.....

「世界がゆがめられているな、呪術の結界の類か。」

「うーん、呪術はわからないな…。」

「エヴァンジェリンさんの言うとおり、これは無間方処の呪法です。要するに閉じ込められました。」

「まあ、結界の類なら問題ないが…。なあ、あれどうする？修羅場ついているんだけど…」

「カイがいう”あれ”というのは、アスナが、小太郎にボコられてボロボロのネギを問い詰めていることだった。」

「魔法の世界ってこんな危険なことばかりなの！？アンタもしかして私に黙ってこんな事今までもしてきたんじゃないでしょうねっ！」

「あ、あうう。こついうこと自体は僕も2回目なんですけど…。」

「やっぱり危険なことしてたんじゃない！」

「い、いえ…。前は僕1人で解決できましたし…。すごいと言っても一般人で、それに無関係なアスナさんを巻き込むわけには…。」

「なに言ってるのよこのガキンチョは！ここまで巻き込んでいて無関係だつていうの！？」

「まあ落ち着くんだな神楽坂明日菜。クツクツ要するに、ネギ先生のことが心配で仕方ないのだろう？」

「な、なに言ってるのよ！こんな事で知り合いが死なれたら寝覚めが悪いっただけよ！っていうか、そのクソガキリッパはともかくアンタ誰よ！」

「ああ…、お前と顔を合わせるのは初めてだったか。私は山田だ、もちろん偽名だがな。それより、心配で仕方ないネギ先生を助けたいならば手立てがないわけでもないぞ？」

「…なによ？」

「魔法使いには従者が必要なものだ。神楽坂アスナ、ぼーやハクテイと仮契約しろ。」

「ばくていおー？」

「おっと、ここはおれっちの出番だな！姐さん、パクティオーって言うのは魔法使いとその従者の契約のことで、契約した従者は魔法使いの盾となつて戦つて、詠唱の為の時間を稼ぐんだぜ！！つまりだ、さっきの狗族と姐さんが戦っているうちに、兄貴が魔法でズバーツと勝負を決めちまつつて言う寸法さ！！」

「えっと、理屈はわかつたけど、私があの人間離れた子と戦えるわけないでしょ？」

「ちつちつち、そこがパクティオーのすごいところだ。パクティオーしたら、姐さんは兄貴から魔力の供給を受けることができる。姐さんも人間離れた動きの出来るスーパー人間だぜ！！」

「！！ それはすごいわね！やるわ！！パクティオーツ！！」

「ア、アスナさん！？」

悲鳴に近い声でアスナの名前を呼ぶネギ。

「…姐さん言つたな。」

「ああ、言つたなあ…。」

「言つてしまいましたね…。」

「クツクツク、女に二言はないぞ？神楽坂明日菜？」

そして、その宣言を生暖かい目で見える3人と一匹。

「それを言うなら男に一言はじゃ……。っていつかみんなしてなによ！パクティオーってなにをするの!？」

「……キス」「……」

「ぶつつつ!?!」

「さあ！魔方阵の準備はバツチりだぜ！ぶちゅーっといくんだ姐さん!」

「ほっぺとか、おでこにしたらクビリ殺すぞ？マウストウマウスだ。」

「なんで!」つなるのよ!?!?!?!?!」

……

……

…

「うう…、ファーストキスだったのに…。」

「クツクツク、ぼーやは将来有望だぞ？逆光源氏だ。よかったじゃないか。」

「私は高畑先生がいいのよ!?!」

「まあまあ、それよりアーティファクトを出してみてくださいね。」

「アーティファクト？」

「アデアットって唱えるんだぜ。姐さんの場合ハマノツルギって武器が出てくるはずだぜ。」

「なんかすごいわね！よし、アデアット……！」

「……………」

「…ハリセン？」

「ハリセンですね。」

「剣が出てくるんじゃないの？」

「修行が足りないということだな。使えんやつだ。」

「バツサリと言う擬音が聞こえそうなくらい、遠慮なく言うエヴァ。」

「なんとなく、空気がゆる〜い感じになったそのとき、刹那の式紙……
……チビ刹那が慌てだした。」

「ッ……！まずいです……！本体の方も襲われ始めたよう……す……。」

「襲われ始めた、という情報のみを残してチビ刹那は消えてしまった。
刹那本体は、相当に余裕のない状態にあるのだろう。」

「ッ……。こっちは陽動だったようだな。」

「刹那さんが襲われているってどういうことですか！？た、助けに行かなくちゃ！！」

ネギは先生としての義務感からか、正義心からか分からないが自身の状態を顧みずに飛び出そうとする。

「へブウツ！？」

とそれを、エヴァ、もとい山田が転ばせて止める。

「な、なにするんですか！」

「ぼーや、どこに行こうとしている？」

「それは、もちろん刹那さんをたすけ「行っても邪魔だ。ぼーやは自分のやるべきことをやるんだな。目の前の敵を無視して助けに行くことができるほど、ぼーやは強いのか？」…でもっ！」

「残念だけど、ネギ君に出来ることはない。君の今の実力だと刹那が慌てるほどの状況に放り込まれれば瞬殺されるのがオチだ。」

エヴァと、カイは2人揃ってネギの蛮勇を止める。しかしネギはそれでも行こうとする。

「放っておけというんですか！？僕にはそんなことできません！！僕はいきます。」

「死ぬと分かってもいくのかい、ネギ君？」

「死ぬのなんて怖くありません。」

その目は本当に死ぬのは怖くない。ということをお話していた。

「君はそうだとしても、刹那は死ぬのを恐れている。そしてもしネギ君が今行けば、刹那は君の事を庇いながら戦うことになる。それがどういふことか分かるかい？自分のせいで人が死ぬのはネギ君だつて嫌だろっ？それに…。」

そう言つて、カイは一度目を閉じる。

そして、再び目を開いた。

「ッ！！！」

「君はまだ『死』というものを全然分かっていない。死ぬのが怖くないなんて言うのは、もう壊れてしまっているやつか、意味が分かっていないバカ野郎だけだ。…大人しくしている。」

カイは直死の魔眼を発動させていた。

ネギはその目を向けられた瞬間からガタガタと震えている。

少しの殺意を混ぜて見据えたカイの直死の魔眼は、自分の死を想像させるには充分すぎた。

「エ…ごほんっ、山田さん。あつちは俺が行く。こつちは任せる。」

「ああ、任せておけ。といつても、本当に危なくならんと手はださんながな。」

「ああ、それでいい。それじゃ、この結界も壊しておくから、終わったら念話くれ。」

言うや否や、カイは地面に自分の爪をつき立てた。それだけで、結界という世界を殺した。

そして、カイは空へと飛び立った。

残されたアスナとネギとカモはカイが去ったことでようやく震えがとまった。その様子をニタリとエヴァは見ていた。

空へ飛んだカイは、まずは探査魔法を発動させ、魔力と気がぶつかりあっているところを探した。

かなり派手にやっているようで、探査魔法にはすぐ引っかかった。そして転移した先では、刹那が1人残され膝を屈していた。

「おい、刹那！大丈夫かっ!?!」

「ツク…、カイ先生…。私のことはいいです、敵を追ってくださいっ!このちゃんが…このちゃんがっ!!!」

このかの姿は、近くにはなかった。

どうやら、敵の目的はやはりこのかだったようだ。

そして、そのこのかは攫われてしまったようだ。

「ツチ…だめだ。転移を繰り返しているようで、追いきれない。」

「一生の不覚…。また私はこのちゃんを守りきれなかったッ…！」
刹那はあらん限りの力で地面を何度も叩く。
それは、守りたいものを守れなかった自分を痛めつけ、責める為のものだろうか。」

「お前のせいじゃない。刹那の力は既にかなりのものだ。その刹那を倒すほどの相手がいると読みきれなかった俺の責任だ。」

「クツ…。」

「今は近衛を取り返すのが先だ。自虐なら後にしろ。まずは相手はどんなやつだった？」

「式紙使いが1人、神鳴流の剣士が1人…そして、白い髪の男の子が1人…他は大したことはなかったですが、この子が異常で…クツ…。」

「（白い髪の男の子…？まさかな。）わかった。その男の子の術式は？やはり西洋か？」

「そうですね…『やはり』…？知っているんですか？」

「ちょっとな。しかし、まずいな…さつさと救い出さないとどうなるか分からない。刹那は詠春に搜索依頼をしてくれ。俺はエヴァと手分けしてすぐに搜索を始める。」

「分かりました。」

「それと、楓をネギ君に張り付かせておいてくれ。下手に動かれると邪魔だ。」

「はい。」

「最後に。絶対俺が無事に救い出すから、刹那は心配するな。」

「…はい。」

「……そうして、カイは再び空へ上がった。」

3日目(後書き)

やっつけ仕事ですか？といわれれば、そう…なんですよね。

しかし…！また気が向いたら更新する感じで…！！

搜索。(前書き)

ああ…書いていて鬱になった…。

はあ…。

搜索。

『エヴァ、そっちはどうだ？』

『ダメだな。どこかに結界を張って隠れているのか、それとも既に遠くへ逃げたか…。カイの眼でも見つからないということは、既に遠くへ逃げたという線が強くなるが。』

『まだ搜索していないところがあるさ。詠春の方も西の術士を動かしているようだが、どうも東側の思惑で動くのが気に食わないようであり期待できないようだ。』

『ふむ…詠春は統率者には向いていないのかもしれないな。っと、今はそんなことを話している場合ではないか…』

『ああ。それじゃ、見つかったら連絡くれ。』

『わかった。そっちもな。』

このかの搜索は難航していた。

日はとつくの昔に沈んでしまい、いまはもう深夜と呼べる時間帯だ。

カイは直死の魔眼の付属効果らしき、普通なら見えないものを見通す力をもって搜索している。

これならば、結果があれば一発で見つかるのだが、一向に誘拐犯達は見つかる気配がなかった。

カイは時間の経過と共に焦りを増していった。

というのは、なにか嫌な予感がしてならないからだ。カイのこ
ういう予感はかなり当たってしまう。

と、カイはそのとき視界の隅に見慣れた白い翼を見つけた。
刹那である。

「刹那、もう大丈夫…じゃないよな？」

刹那の昼間の戦闘でつけられた怪我は見た目はひどくはなかったが、
あばらが3本折れているのと左足の骨にヒビが入っているなど筆頭
に、身体の中はかなりボロボロだった。

カイが刹那の傍へと飛んでいくと、その顔には痛みを堪えてのもの
だろう脂汗がびっしりと浮かんでいた。

「……………」

「…………無理はしてもいいが、無茶はするな？刹那が死んで悲しむ者
もいることを忘れるな。」

「…………はい。」

やめるとも、休めともカイには言えない。

人には無理をしても押し通さなければならぬときがある。

自分のことを化け物と蔑んでいた刹那であっても、その想いはやは
り立派に人間のものだ。

だが、そんな想いも届かずこのかは見つかからない。

既に東の空は白み始めている。

搜索している者たちの焦燥感はピークに達していた。

進展のない搜索に対する焦りをごまかそうとして、他の搜索者にやたら連絡をとり、互いに芳しくない現実を突きつけあい更に焦るといふ悪循環さえ生まれている。

カイとてかなり焦っている。刹那と別れたあとから全く休みもせず
に飛び続けている。

そのとき、カイに念話が届いた。相手は楓だ。

『カイ先生！見つけたでござる！！』

『ツー！！楓か！？いまどこにいる！』

『街のはずれの森林地帯でござる。敵は大軍…それに大きな鬼すら
召喚されているでござる。ネギ坊主とアスナを庇ってではちと拙者
にはきついでござるな。』

『ツチ、だから大人しくしていると…。いや、ネギ君を責めるのは
お門違いか。こちらでも魔力を探知できた。すぐに向かうからもう
少し耐える！』

『できるだけ早くしてくれると嬉しいでござるな…。』

楓の言うとおり、街を挟んだ向こう側からかなり大きな魔力を行使
しているのを感じられる。カイはよりにもよってちょうど反対側を
搜索していたわけである。

(これだけ大きな魔力。わざわざ他の連中に連絡する必要もない。しかし、これだけの魔力をだせるのは…いや今はいい。)

カイは嫌な予感を振り払うように影による転移魔法を発動させた。

転移した先は一面真っ黒だった。

視界を埋め尽くすのは、召喚されたものであるう鬼の黒い身体だった。

いまは坂上リク状態で身体が縮んでいるので、背の高い鬼達に囲まれている状態となったカイには一面が真っ黒い壁に囲まれているように見えているのだ。

いきなり影から現れたカイにギョツとした鬼だったが、それでも押しつぶすようにしてカイへと襲い掛かる。

それを意にも介さず、すぐにカイは空へと飛び上がった。

空から見た地上は、やはり森の緑色を侵食するがごとき黒色だった。それは、さながら黒い海だろうか。

そんな海の中にも、一点だけぽっかりと開いている場所があった。

それは楓たちがいる場所で、楓が戦っていると一目瞭然で分かった。

それを目視したカイは一度地上に降りた。
カイにとっては空を飛ぶよりも地上を一直線に駆けるほうが速い。
わざわざ地上に降りてきたカイに鬼達が群がるが、カイは気にしていない。

「左手に魔力、右手に気：咸卦法！」

咸卦法を発動させたカイの周りは暴風が吹き荒れ、鬼達が吹き飛ばす。そしてカイは弾丸になった。

カイは進行方向にはまるで何もないかの様に駆ける。

彼が通った後には鬼達の千切れとんだ色々なものが飛び散りかなりグロイことになっている。

カイの脚力は、数秒もせずには楓たちの戦っていた場所へと到達した。

「待たせたな。楓。」

「遅いでござるよ。カ…ごほんっ、リク君。」

「ちょ…援軍ってこのガキンチヨ!?!」

「そつでござるよ?」

「そつでござるって…、いくら楓さんが強いって言ってもネギももうこんなだし…私死んだかも…。」

カイが到着したときには、ネギは魔力切れで荒い息をつき、かなり辛そうにしていた。

そしてネギからの魔力供給がなくなったアスナは、ただのすごい中

学生に戻っているので専ら楓に守ってもらっているようだった。その楓はというと、かなり飄々としていて、余裕綽々といった感じだろうか。

「お前余裕じゃないか…?」

「いやいや、流石につ、これだけの数を、庇いながらはっ、きついぞじれる、よっ!」

喋りながらも楓は空から襲ってきた烏族の攻撃をいなす。

良く見れば、分身も限りなく実体に近い精度のものが、既に楓の限界の7体出ている。

どうやら見た目ほどには余裕はなかったようだ。

「見てないで早く、手伝って欲しいでござるよ?」

「了解。」

そう言つてカイは分身を30体、実体に限りなく近い状態です。といつても、カイも普通の人間の思考能力しか持たない為、この数の分身を自由自在というわけにはいかない。

ではどうするかといえは。ただがむしやらに殴る蹴るの暴行をさせるのだ。要するにただ暴れる。

だが、カイの場合その分身の身体能力は半端ない。

ただ暴れるだけといつても真祖の吸血鬼のバカ力と速さは脅威である。下手な広域魔法よりよっぽどたちが悪い。

辺りは理不尽な暴力による破壊の嵐が吹き荒れた。

「相変わらず無茶苦茶でござるなー。こつ思つと、良く拙者は生き
ているでござるなあ…。」

「それより、近衛はどこだ？」

「あの一際でかい鬼のところだ。このかを見た瞬間ネギ坊主
が無茶をやらかしたから、ここまで引くの苦労したでござる。…
それにしても、このかの様子が少し変だったのが気になるでござる
…。」

「…そうか。ツチ、それにしても倒した傍から沸いてきやがる…。
元を断たないとダメだな。」

鬼達はカイにより殲滅されているのだが、それでも確実に後から沸
いて出て来ている。

もし、これが1人の術者によるものならば、遠くに見える巨大な鬼
の召喚と合わせても明らかにキャパシティオーバーだ。
カイの嫌な予感がどんどん強くなっていく。

「余裕がない…。楓、2人を抱えてついてきてくれ。ここに残すよ
りも安全だ。」

「わかったでござるよカイ先生。」

そのとき丁度年齢詐称薬が切れて、カイは元の姿に戻っていた。

「え…？ちよ…何時の間に!？」

「…はあ…はあ…カイ先生、このかさんをお願いします…。」

狼狽するアスナと、少し回復したのかネギがそんなことを言う。

「……………」

だがカイは答えない。

『エヴァ、今どこだ？』

『あの図体のでかい鬼に向かっている。そっちこそどこだ？』

『俺もいまからそっちへ行く、嫌な予感がする…。できるだけ早く頼む。』

『分かった。』

エヴァに連絡を入れつつも、カイは分身を13体にまで絞り一際大きな鬼に向かったの道を作り出している。

そのカイの上空を高速で白い翼が通り過ぎていく。

「あのバカッ…。」

「急ぐでいじめるよ…ッ。」

.....このかは壊されていた。

搜索。(後書き)

いろんな人からお怒りの声をもらいそうな展開ですね…。

前書きにも書いたけれど、すごく…鬱になりました…。

はあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6004k/>

異世界迷走記！？

2010年10月10日18時31分発行